四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報

平成11年度

2000. 3

香川県埋蔵文化財研究会

例　　言

1．本書は四国横断自動車道建設に伴い，平成11年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の概要を記録したものである。

2．本調査は香川県教育委員会が調査主体となり，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査担当者として実施した。

3．本年度の調査組織は以下のとおりである。

総括	所長	菅原良弘		
	次長	川原裕章		
総務	副主幹兼係長	六車正憲		
	副主幹兼係長	田中秀文		
	係長	新　一郎		
調査	参事	長尾重盛	主任技師	松岡宏一
	主任文化財専門員	大山眞充	主任技師	野崎隆亨
	主任文化財専門員	藤好史郎	技師	信里芳紀
	主任文化財専門員	長元茂樹	技師	長井博志
	文化財専門員	片桐孝浩	調査技術員	多田　歩
	文化財専門員	多田佳弘	調査技術員	糸山　晋
	文化財専門員	蔵本晋司	調査技術員	中山尚子
	文化財専門員	宮崎哲治	調査技術員	正山泰久
	文化財専門員	増井泰弘	調査技術員	豊岡多恵
	主任技師	溝渕大輔		

4．本書の執筆は第１章については大山・藤好が，第２章についてはそれぞれ調査担当者が行い，目次にその文責を記している。また，本書の編集は長井が担当し，溝渕・多田（歩）が補佐した。

5．各遺跡・地区の調査担当者は以下のとおりである。

八幡遺跡	信里・野崎・豊岡（1999年７月１日から1999年９月30日まで）
	蔵本・野崎・豊岡（2000年１月１日から2000年３月31日まで）
中森遺跡	信里・野崎・豊岡
前田東・中村遺跡	宮崎・増井・糸山
三殿出口遺跡	長元・松岡・中山
金毘羅山遺跡	長元・松岡・中山
樋端遺跡	長元・松岡・中山
成重遺跡	片桐・長井・多田（佳）・溝渕・多田（歩）・正山
谷遺跡	長井・溝渕・多田（歩）

善門池西遺跡	長元・松岡・中山
天王谷遺跡	長井・溝渕・多田（歩）
逊田石垣遺跡	長井・溝渕・多田（歩）

6．挿図の一部に国土地理院地形図（1／25,000),同地勢図（1／200,000）を使用した。

目　　次

第１章　平成11年度調査の概要 ……（大山・藤好）　1

第２章　調査の概要 …… 6
八幡遺跡 …… 6
１．立地と環境 ……（野崎）　6
２．調査の成果 ……（信里）　7
３．まとめ ……（信里）　17
中森遺跡 …… 19
１．調査の成果 ……（信里）　19
前田東・中村遺跡 …… 27
１．立地と環境 ……（宮崎）　27
２．調査の成果 ……（宮崎）　27
３．まとめ ……（宮崎）　31
三殿出口遺跡 …… 33
１．立地と環境 ……（長元）　33
２．調査の成果 ……（長元）　34
３．まとめ ……（長元）　39
金毘羅山遺跡 …… 40
１．立地と環境 ……（松岡）　40
２．調査成果 ……（松岡）　40
樋端遺跡 …… 43
１．立地と環境 ……（松岡）　43
２．調査成果 ……（松岡）　43
３．まとめ ……（松岡）　49
成重遺跡 …… 50
１．立地と環境 ……（多田（佳）・溝渕）　50
２．東側調査区の成果 ……（長井）　51
３．西側調査区（Ｇ区）の成果 ……（片桐・多田（佳））　59
谷遺跡 …… 79
１．立地と環境 ……（溝渕）　79
２．調査の成果 ……（長井）　79
３．まとめ ……（長井）　81

善門池西遺跡 …… 83
1．立地と環境 ……（長元） 83
2．調査成果 ……（長元） 83
3．まとめ ……（長元） 87
天王谷遺跡 …… 88
1．立地と環境 ……（溝渕） 88
2．調査の成果 ……（長井） 88
3．まとめ ……（長井） 94
逊田石垣遺跡 …… 96
1．立地と環境 ……（溝渕） 96
2．調査の成果 ……（長井） 96
3．まとめ ……（長井） 99

挿図目次

第 1 図　埋蔵文化財発掘調査対象地位置図…　4
第 2 図　樋端地区予備調査トレンチ配置図…　5
第 3 図　谷地区予備調査トレンチ配置図 …　5
第 4 図　周辺遺跡分布図 ……　6
第 5 図　Ⅰ区平面図 ……　9
第 6 図　Ⅰ区ＳＸ01・ＳＤ01・02断面図 …　10
第 7 図　八幡遺跡遺構配置図……　11,12
第 8 図　Ⅰ区ＳＤ01・ＳＸ01出土土器 ……　14
第 9 図　Ⅱ区ＳＸ01・ＳＤ01平・断面図ＳＸ01出土土器…　16
第10図　明治期更正図と検出遺構の照合 …　18
第11図　中森遺跡調査区割図 ……　19
第12図　Ｆ区平面図・ＳＤ02断面図及びＳＤ02・ＳＸ01出土土器 …　20
第13図　Ｇ区平面図 ……　22
第14図　中森遺跡遺構配置図及びトレンチ配置図 …　23,24
第15図　Ｇ区ＳＸ01・ＳＤ01・04出土土器…　25
第16図　Ｂ・Ｈ区等高線図 ……　26
第17図　調査区区割図 ……　27
第18図　Ｍ③区遺構配置図 ……　28
第19図　Ｎ③区遺構配置図 ……　29
第20図　Ｎ③区ＳＲ01出土遺物実測図 ……　30
第21図　Ｏ③区遺構配置図 ……　31
第22図　遺構変遷図 ……　32
第23図　遺跡の位置及び周辺の遺跡 ……　33
第24図　調査区割図及び遺構配置図……　35,36
第25図　Ⅰ－④東区ＳＴ01平・断面図 ……　37
第26図　Ⅰ－④西区ＳＫ04出土遺物実測図…　37
第27図　Ⅲ－①南区ＳＢ01平・断面図 ……　38
第28図　Ⅲ－②区ＳＦ01平・断面図 ……　39
第29図　遺跡位置図 ……　40
第30図　金毘羅山遺跡丘陵部地形測量図…　41,42
第31図　遺跡位置図 ……　43
第32図　ＳＴ18平・断面図 ……　44
第33図　ＳＫ12平・断面図 ……　45
第34図　ＳＫ19平・断面図 ……　46
第35図　樋端遺跡Ｃ地区地形測量図……　47,48
第36図　神越３号墳主体部平・断面図 ……　49
第37図　調査区割図 ……　50
第38図　Ｒ318遺構配置図……　51
第39図　Ｒ318第２遺構面ＳＸ01平・断面図及び出土土器実測図…　52
第40図　Ｒ318第１遺構面ＳＫ03平・断面図 …　52
第41図　Ｄ２区第１遺構面ＳＰ01平・立・断面図及び出土土器実測図 …　53
第42図　Ｄ２区第１遺構面ＳＤ02平・断面図及び出土土器実測図 …　54
第43図　Ａ区～Ｄ区第２面遺構配置図…　55,56
第44図　Ａ区～Ｄ区第１面遺構配置図…　57,58
第45図　Ｇ４・５区北壁土層序 ……　60
第46図　Ｇ４～８区遺構配置図（第３面）…　61
第47図　第２・３面ＳＨ01平・断面図 ……　62
第48図　Ｇ４区ＳＢ01平・断面図（第３面）…　63
第49図　ＳＢ01（ＳＰ022）出土遺物実測図 …　63
第50図　Ｇ４区東部遺構平面図（第３面）…　64
第51図　ＳＴ03出土遺物実測図 ……　65
第52図　Ｇ４区ＳＴ03平・断面図（第３面）…　65
第53図　Ｇ４区ＳＴ04平・断面図（第３面）…　65
第54図　Ｇ４区集石状遺構２平・立・断面図（第３面）…　66
第55図　Ｇ４区集石状遺構３平・立・断面図（第３面）…　68
第56図　Ｅ区～Ｇ区第２面遺構配置図…　69,70
第57図　Ｇ４～８区遺構配置図（第２面）…　72
第58図　Ｇ５区集石状遺構１平・断面図（第２面）…　73
第59図　Ｇ４区集石状遺構１平・断面図（第２面）…　74
第60図　Ｅ区～Ｇ区第１面遺構配置図…　75,76
第61図　Ｇ５区砂糖竈平・断面図（第１面）…　77
第62図　遺跡の位置及び周辺の遺跡 ……　79
第63図　調査区割図 ……　79
第64図　Ⅰ区ＳＨ01平・断面図 ……　80
第65図　Ⅱ区ＳＰ01平・立・断面図 ……　81
第66図　遺構配置図 ……　82
第67図　遺跡位置及び周辺遺跡 ……　83
第68図　調査区割図及び遺構配置図 ……　84
第69図　Ⅷ区ＳＸ01平・断面図及び出土遺物実測図…　85,86
第70図　Ⅷ区ＳＫ01平・断面図 ……　87
第71図　Ⅷ区ＳＰ03平・断面図 ……　87
第72図　Ⅷ区ＳＰ03出土遺物実測図 ……　87
第73図　遺跡の位置及び周辺の遺跡 ……　88
第74図　調査区割図 ……　89
第75図　窯周辺遺構コンター図 ……　89
第76図　ＳＦ02遺物出土状況平・立面図 …　91
第77図　ＳＦ02平・断面図 ……　92
第78図　出土遺物実測図 ……　93
第79図　ＳＫ04平・断面図 ……　94
第80図　遺構配置図 ……　95
第81図　遺跡の位置及び周辺の遺跡 ……　96
第82図　調査区割図 ……　96
第83図　ＳＢ01・02平・断面図及び出土土器実測図 …　97
第84図　ＳＴ01平・断面図及び出土土器実測図…　99
第85図　ＳＸ01平・断面図及び出土土器実測図 …　100
第86図　遺構配置図 ……　101

写真目次

写真１　Ⅰ区全景（南西から）…… 7
写真２　ＳＤ02全景（南西から）…… 7
写真３　Ⅰ区ＳＤ01南半部全景（南から）… 8
写真４　Ⅰ区ＳＤ01北半部全景（南から）… 8
写真５　Ⅰ区ＳＸ01全景（南西から）…… 8
写真６　Ⅰ区ＳＸ01ＳＤ01との交点部（西から）… 13
写真７　Ⅰ区ＳＸ01南屈曲部（北東から）… 13
写真８　Ⅱ区ＳＤ01全景（西から）…… 15
写真９　Ⅱ区ＳＸ01全景（西から）…… 15
写真10　Ⅲ区東半部地割溝群全景（西から）… 17
写真11　Ｆ区ＳＤ02全景（西から）…… 19
写真12　Ｆ区西半部全景（東から）…… 21
写真13　Ｇ区中世屋敷地全景（南西から）… 21
写真14　Ｇ区ＳＤ02～04全景（東から）…… 21
写真15　Ｈ区全景（南西から）…… 25
写真16　Ｍ③区完掘状況（東から）…… 28
写真17　Ｍ③区ＳＥ01全景（東から）…… 28
写真18　Ｎ③区上層完掘状況（北から）…… 29
写真19　Ｎ③区下層完掘状況（東から）…… 29
写真20　Ｎ③区ＳＲ01完掘状況（北から）… 30
写真21　Ｏ③区土壙墓完掘状況（北から）… 31
写真22　Ⅱ－②北区弥生土器検出状況（南から）… 34
写真23　Ⅰ－④東区ＳＴ01（西から）…… 37
写真24　Ⅰ－④西区ＳＫ04（西から）…… 37
写真25　Ⅲ－①南区ＳＢ01（西から）…… 38
写真26　Ⅲ－②区ＳＦ01（東から）…… 38
写真27　南東部丘陵調査前状況（南東から）… 40
写真28　2トレンチ内土器棺墓検出状況（南西から）… 40
写真29　Ｃ地区遠景（東から）…… 43
写真30　ＳＴ18検出状況（南から）…… 44
写真31　尾根筋土壙墓列全景（北東から）… 44
写真32　ＳＫ12完掘状況（西から）…… 44
写真33　神越３号墳主体部検出状況（北西から）… 46
写真34　神越３号墳完掘状況（東から）…… 49
写真35　Ｒ318ＳＸ01完掘状況（西から）… 51
写真36　Ｒ318ＳＫ01～04全景（西から）… 53
写真37　Ｄ２区第１遺構面全景（南から）… 53
写真38　Ｇ６・８区第３面遺構検出状況（北東から）… 59
写真39　Ｇ４区ＳＢ01検出状況（西から）… 63
写真40　Ｇ４区東部遺構検出状況（西から）… 64
写真41　Ｇ４区ＳＴ04検出状況（北から）… 65
写真42　Ｇ４区集石状遺構２検出状況（西から）… 67
写真43　Ｇ４区集石状遺構２土層断面（南から）… 67
写真44　Ｇ４区集石状遺構３検出状況（南から）… 67
写真45　Ｇ４区下位集石状遺構３検出状況（南から）… 67
写真46　Ｇ５区集石状遺構１検出状況（西から）… 71
写真47　Ｇ５区集石状遺構１土層断面（西から）… 71
写真48　Ｇ４区集石状遺構１検出状況（南から）… 71
写真49　Ｇ４区集石状遺構１・５検出状況（南から）… 71
写真50　Ⅰ区ＳＨ01完掘状況（西から）…… 80
写真51　Ⅰ区ＳＨ02完掘状況（東から）…… 80
写真52　Ⅱ区ＳＰ01土器出土状況（東から）… 81
写真53　Ⅷ区ＳＫ01（北から）…… 87
写真54　Ⅷ区ＳＰ03（南から）…… 87
写真55　ＳＦ01・02遠景（北から）…… 93
写真56　ＳＦ01・02近景（東から）…… 93
写真57　ＳＦ02焼成室瓦出土状況（南から）… 94
写真58　ＳＦ02焼成室ロストル上瓦出土状況（南から）… 94
写真59　Ⅰ区ＳＢ01・02全景（西から）…… 98
写真60　Ⅰ区ＳＴ01完掘状況（北から）…… 98

表目次

表１　四国横断自動車道に伴う埋蔵文化財調査一覧… 3

第１章　　平成11年度調査の概要

四国横断自動車道のうち高松市内区間及び津田引田間建設に伴う埋蔵文化財調査は平成８年度から開始され，本年度で４年目となった。

高松市内区間の本年度の調査面積は7,904㎡で，昨年度までの実績と合わせると全体（約37,000㎡）の87%が終了したことになる。一方津田～引田間については，本年度の調査面積は21,075㎡で，昨年度までの実績と合わせると全体（約145,000㎡）の99%が終了したことになる。

１．高松市内区間調査の概要

高松市内の横断道関係埋蔵文化財発掘調査対象地は，高松・善通寺間と高松市内区間の２工区に分かれる。当初計画では，西部の高松・善通寺間に該当する遺跡としては香川郡条里Ｂ地区（八幡遺跡・中森遺跡），東部の高松市内区間では香川郡条里Ｃ地区・Ｄ地区，前田東・中村遺跡の合計9,116㎡を調査実施する予定であった。この内，調査対象地の用地確保の遅れが建設省施工箇所の香川郡条里Ｂ地区中森遺跡と香川郡条里Ｄ地区で生じたため，その期間を公団施工箇所の香川郡条里Ｂ地区八幡遺跡の調査に振り替えた。

八幡遺跡の発掘調査は,7月～９月と１月～３月の２時期に分けて合計4,315㎡の調査を実施した。調査区の南部では中世の香川郡条里地割の坪界の南北方向の溝とそれに規制された東西の方位を有するやや規模の大きな堀状の溝を検出した。後者の堀状の溝は，その埋土の堆積状況からすると留水状況下で埋没したものとみられ，調査区南端の落ち込みと関連が窺われるが，いずれも遺物をほとんど含まない点が注目される。

中森遺跡は10月～12月にかけて1,563㎡の発掘調査を実施した。国道11号より北側の箇所で中世の屋敷地の一画を検出し，南部では昨年度調査の旧石器ブロックの東側でサヌカイト剥片等が出土した。

香川郡条里Ｃ地区では,126㎡を対象として建物撤去後の調査を実施した。

平成９年度から調査を実施している高松東インターチェンジ建設予定地の前田東中村遺跡は，今年度は1,900㎡の発掘調査を実施した。年度当初の用地取得見込みでは，一部年度後半まで持ち越す危険があったため,年度当初と末に工程を２分していたが,用地取得の進展から連続した調査となった。13,146㎡の発掘調査を足かけ３年で実施し，縄文時代から中世にかけての大規模な複合遺跡の調査が今年度で完了した。

平成12年度は，横断道発掘調査の最終年度であり，高松市田村町以西で，高松市内区間の香川郡条里Ｄ地区2,500㎡と善通寺高松区間の香川郡条里Ｂ地区八幡遺跡の1,542㎡と中森遺跡の752㎡の合計が残るだけとなった。

２．津田引田間調査の概要

本年度の調査対象となった遺跡は，三殿出口遺跡，金毘羅山遺跡（下屋敷地区），樋端遺跡，成重遺跡，谷遺跡，善門池西遺跡（池の奥地区），天王谷遺跡（塩屋地区），迯田石垣遺跡の８遺跡である。

三殿出口遺跡は昨年度予備調査で弥生時代の遺物包含層等を検出したため，４月から６月までと11月に本調査を実施した。家屋が多く残っていたため撤去時期や工事工程との調整を重ねながらの調査であ

ったが，中世の火葬墓や近世の砂糖竈跡などを検出し，完了した。

金毘羅山遺跡は，平成10年度に平地部と丘陵斜面の一部の調査を実施しているが，今年度の調査は丘陵斜面の残り部分である。12～３月（１月中断）の調査期間で，竪穴式石室２基，土器棺墓４基他を発掘した。

樋端遺跡の本年度の調査はＣ地区南部とＥ地区が対象で，９・10月に実施した。Ｅ地区は家屋撤去後の８月に予備調査を実施した結果，横断道用地南に広がる弥生時代後期の集落跡である神越遺跡はここまでは延びていないことが確認でき，おそらく湊川の氾濫によって遺跡は消滅したものと推測された。一方Ｃ地区の丘陵尾根上からは弥生時代後期と推定される35基の土壙墓群や８基の土器棺墓が検出され，遺物としては懸垂鏡として使用されたと思われる内行花文鏡の破片を検出したことは大きな成果であった。

成重遺跡は遺跡西端一帯と，東端の家屋撤去後の３カ所を調査した。６月からは遺跡西端の調査を開始し，弥生時代の集石遺構，竪穴住居跡や中世の集落跡等を調査した。

谷遺跡は家屋撤収後の８月に平地部の予備調査を実施した結果，上下２面の遺構面が検出されたため，９月から成重遺跡の調査と併行して本調査を開始した。上面では中世の掘立柱建物跡や土坑を検出し，下面では弥生時代の竪穴住居跡２棟，土坑などを発掘した。本年度は，この平地部分2,641㎡と窯跡周辺の一部100㎡を調査し，次年度は丘陵斜面に築かれた近世の陶器窯跡本体900㎡の調査を予定している。

善門池西遺跡は平成９年度から断続的に調査されているが，本年度が最終年度である。
中世のピットが多数検出されたが，細長い土坑からは中世の瀬戸焼が出土したことは注目される。

天王谷遺跡は昨年度からの継続調査で，７・８月に実施した。注目できる遺構は13～14世紀のロストル式瓦窯２基で，連珠文軒平瓦や巴文軒丸瓦も出土し，中世瓦生産のあり方を研究する上で貴重な資料となろう。

迯田石垣遺跡は４～６月に実施した。中世の掘立柱建物跡，池状遺構などが検出された。
中でも掘立柱建物跡の１棟は四面庇付きの建物に復元でき，この付近に寺があったという伝承と合わせると，遺跡の性格としては中世寺院を求めてもよいかもしれない。

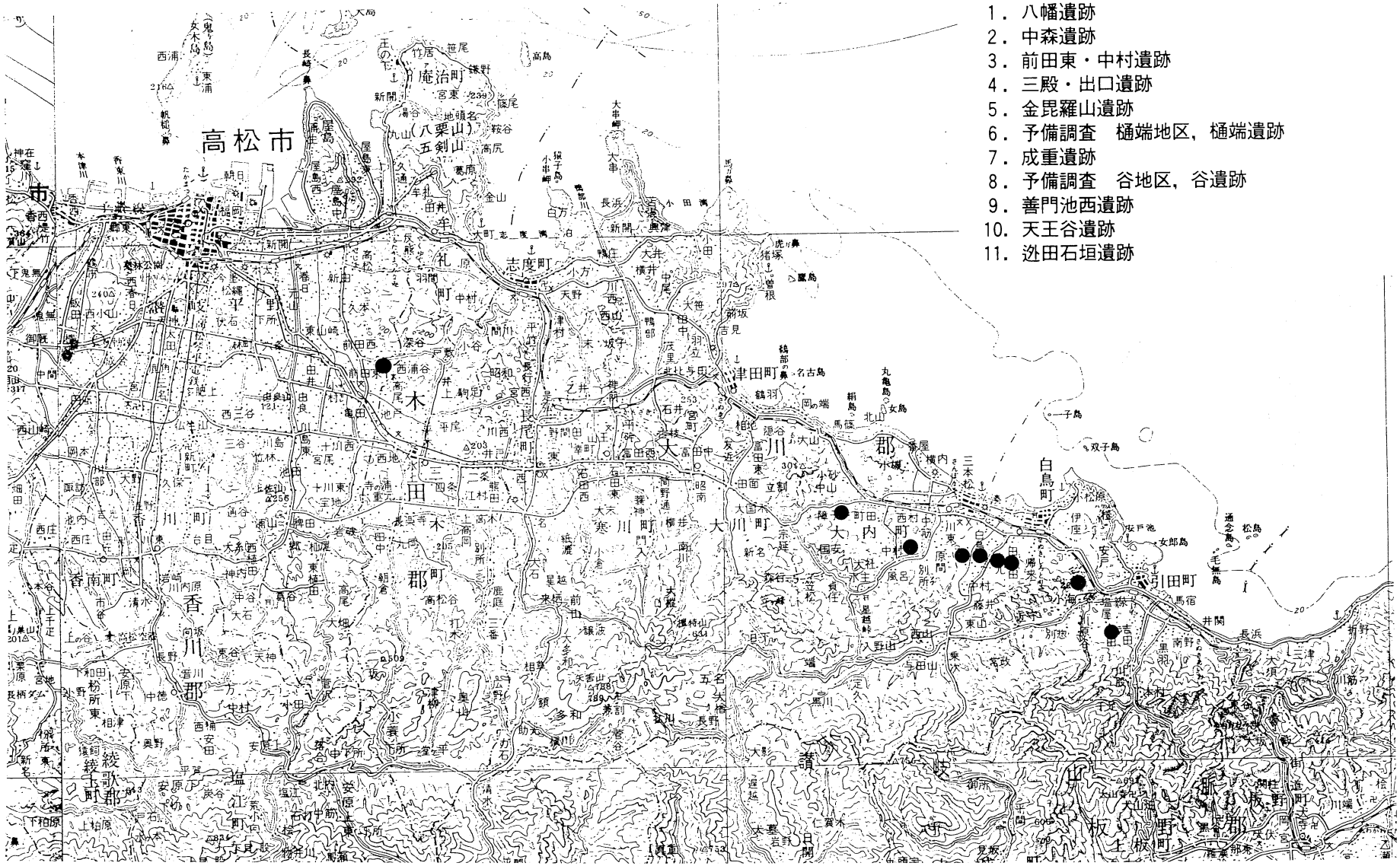
いずれにしても善門池遺跡，天王谷遺跡，迯田石垣遺跡で調査された内容は香川県東部の中世の様子を知る上で貴重な成果である。

以上が本年度の調査概要であるが，次年度には谷遺跡900㎡を残すのみとなった。なお調査の大半は日本道路公団四国支社の委託を受けて実施したものであるが，側道部分の成重遺跡681㎡と樋端遺跡50㎡については県土木部道路建設課の委託を受け，また成重遺跡における国道318号拡幅部分258㎡については県土木部横断道対策総室の委託を受けて実施したものである。

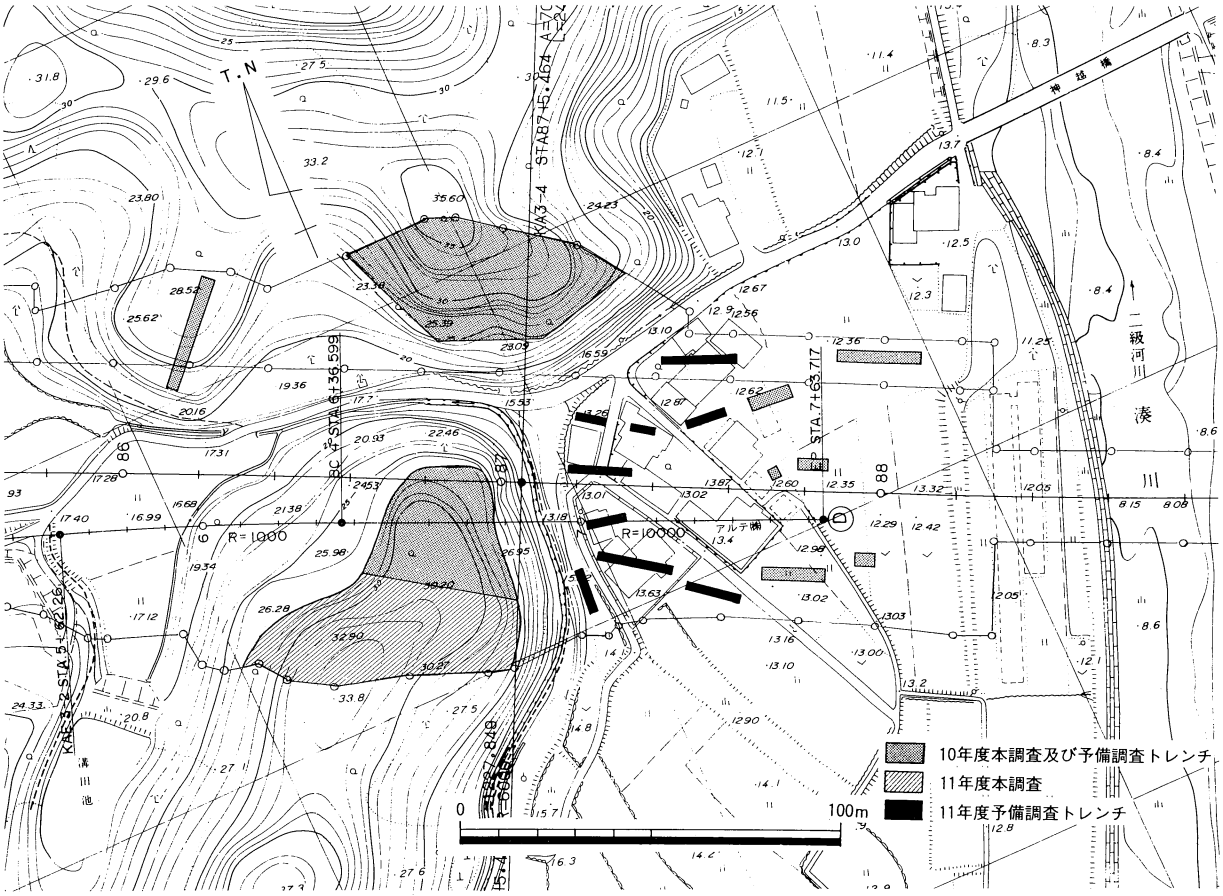
NO	区間	地区名	遺跡名	所在地	調査総面積（㎡）	年度別調査面積（㎡）				
						8年度	9年度	10年度	11年度	12年度予定
1	高松市内区間	香川郡条里A	中間東井坪	高松市中間町	709	709	0	0	0	
2		正箱	正箱	高松市壇紙町	800	0	0	800	0	
3		香川郡条里B	八幡	〃	6,057	0	0	200	4,315	1,542
4		香川郡条里B	中森	〃	5,330	0	0	3,015	1,563	752
5		香川郡条里C		高松市勅使町	896	0	0	770	126	
6		香川郡条里D	（田村）	高松市田村町	2,500	0	0	0	0	2,500
7			上天神	高松市上天神町	190	0	190	0	0	
8		林・坊城	林・坊城	高松市林町	2,971	481	490	2,000	0	
9		山田郡条里A	林浴	〃	2,626	2,626	0	0	0	
10		東山埼・水田	東山埼・水田	高松市東山崎町	1,978	0	0	1,978	0	
11		前田東・中村	前田東・中村	高松市前田東町	13,146	0	4,040	7,206	1,900	
市内区間合計					37,203	3,816	4,720	15,969	7,904	4,794
12	津田～引田	中谷	中谷	大川郡津田町鶴羽	518	518	0	0	0	
13		大山	大山	〃	2,113	2,113	0	0	0	
14		馬篠A～D	—	大川郡大内町馬篠	620	0	620	0	0	
15		小砂	—	大川郡大内町小砂	100	0	100	0	0	
16		中山A～D	坪井	大川郡大内町中山	6,566	0	0	6,566	0	
17		三殿A・B	三殿出口	大川郡大内町三殿	6,505	0	0	135	6,370	
18		町田	—	大川郡大内町町田	69	0	0	69	0	
19		楠谷A	—	大川郡大内町水主	1,000	0	0	1,000	0	
20		楠谷B・C	楠谷	〃	2,038	460	1,578	0	0	
21		高原	—	〃	11	0	11	0	0	
22		下屋敷	金毘羅山	〃	5,446	446	100	3,600	1,300	
23		別所A	塔の山南	大川郡大内町川東	1,315	0	15	1,300	0	
24		別所B	—	〃	29	0	29	0	0	
25		杖の端	西谷	〃	2,092	0	2,092	0	0	
26		原間	原間	〃	43,997	500	19,254	24,243	0	
27		樋端A・B・D	神越2号墳他	大川郡白鳥町白鳥	2,033	0	0	2,033	0	
28		樋端C	樋端	〃	2,825	0	0	1,425	1,400	
29		樋端E		〃	379	0	0	132	247	
30		成重	成重	〃	26,885	1,500	14,650	6,543	4,192	
31		谷	谷	〃	3,752	0	0	111	2,741	900
32		池の奥	善門池西	〃	7,116	0	3,566	2,500	1,050	
33			池の奥	〃	8,700	0	0	8,700	0	
34		法月	—	大川郡白鳥町帰来	510	0	510	0	0	
35		塩屋A・B	川北	大川郡引田町引田	6,038	0	0	6,038	0	
36			天王谷	大川郡引田町塩屋	2,675	0	0	1,200	1,475	
37		逊田A	逊田石垣	大川郡引田町引田	2,854	0	0	554	2,300	
38		逊田B	逊田谷川下池	〃	1,450	0	0	1,450	0	
39		鹿庭	鹿庭	大川郡引田町吉田	4,110	0	310	3,800	0	
40		黒羽	庵の谷	大川郡引田町黒羽	3,978	0	3,978	0	0	
津田～引田合計					145,724	5,537	46,813	71,399	21,075	900
総計					182,927	9,353	51,533	87,368	28,979	5,694
					累計（㎡）	9,353	60,886	148,254	177,233	182,927
					(%)	5	33	81	97	100

※　調査面積には県及び建設省負担分を含む。

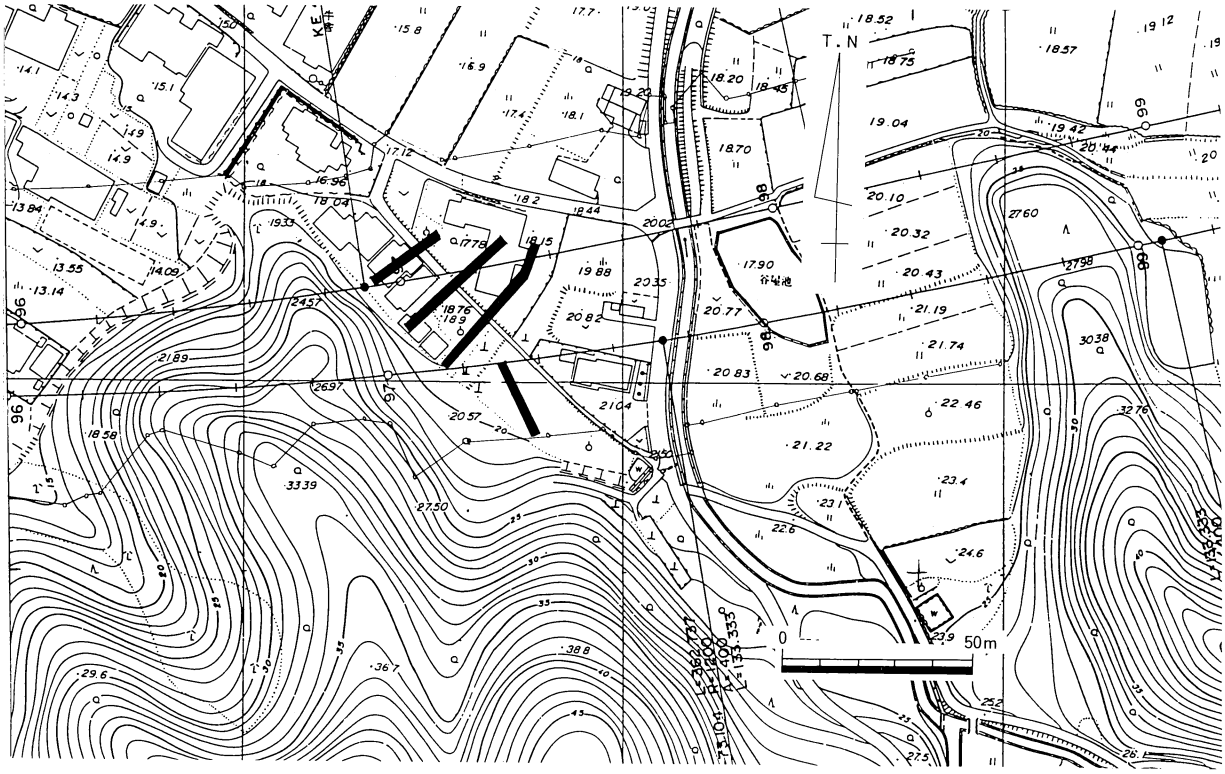
第1表　四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査一覧



第１図　埋蔵文化財発掘調査対象地位置図（１/200,000）



第２図　樋端地区予備調査トレンチ配置図（１/2,000）



第３図　谷地区予備調査トレンチ配置図（１/2,000）

第2章　調査の概要

八　幡　遺　跡

1．立地と環境

八幡遺跡は高松市檀紙町に所在する。遺跡西側には小規模河川である古川が流れ，やがて本津川と合流し瀬戸内海へと注ぐ。また東側には江戸初期に改修ないし付け替えが行われた香東川が流れる。本遺跡はこの両河川間の標高21m前後の扇状地上で新たに確認された。

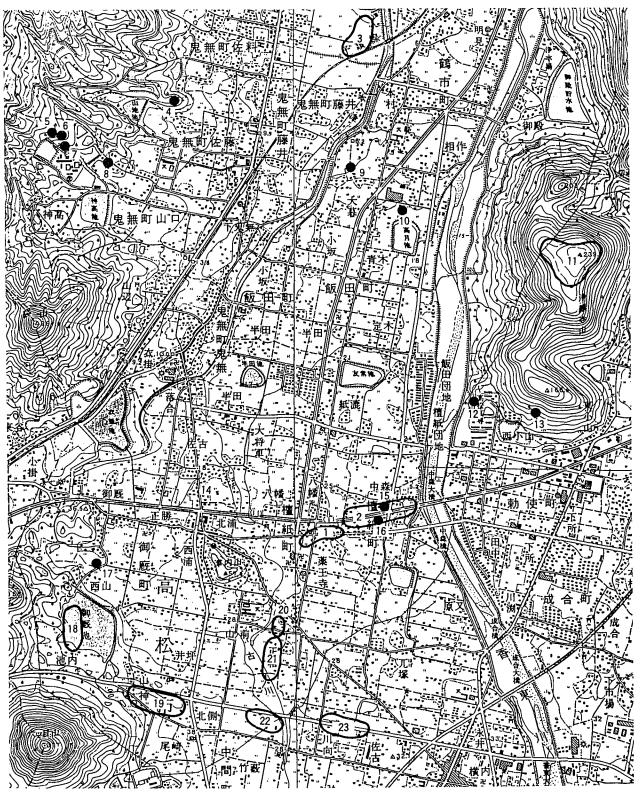
八幡遺跡周辺の六ツ目山東麓地域では後期旧石器が確認される遺跡が集中する。またこれら後期旧石器群は扇状地礫層を覆うＡＴ火山ガラスを含む層準，あるいはその直上層から確認されることが多い。その具体例として中間東井坪遺跡では瀬戸内技法を反映する石器群がＡＴ火山灰層直上から出土し，中間西井坪遺跡では角錐状石器を主体とする石器群が確認されている。これら石器群は層位別資料であるだけではなく一定程度の集中が見られるブロックを形成しており，今後の整理・検討が期待される。

縄文時代の明確な調査例は少なく正箱遺跡で尖塔器が確認されている他は明確な集落調査例はない。

弥生時代では伽藍山山頂に中期後半の高地性集落が造られるが，平地部で明確な集落の検出例はない。弥生時代後期になると中間西井坪遺跡など御厩池遺跡など遺跡数が増加する傾向にある。

古墳時代になると中間西井坪遺跡では埴輪焼成遺構と埋没古墳が数基確認されている。古代になると正箱遺跡では８世紀代の掘立柱建物群が確認されるとともに，これら建物群の主軸方位が現存する条里型地割の方向に合致する。だが，地割自体は平野全域で確認されず集落など特定箇所に見られるに留まるという条里制初源期の一局面を表している。中世期には昨年度の中森遺跡などで確認されたように，耕地開発が活発化し集落以外の平野部にも明確な地下遺構として地割が確認できるようになる。そしてこの地割が現在の条里型地割の景観に繋がっていくものと思われる。

１．八幡遺跡　２．中森遺跡　３．西打遺跡
４．今岡古墳　５．平木３号墳
６．平木２号墳　７．平木１号墳
８．鬼無大塚古墳　９．王墓古墳
10．相作牛塚古墳　11．浄願寺山古墳群
12．ガメ塚古墳　13．ガメ塚２～４号墳
14．御厩大塚古墳　15．中森１号墳
16．中森２号墳　17．御厩天神社古墳
18．御厩池遺跡　19．中間西井坪遺跡
20．薬王寺遺跡　21.正箱遺跡
22．中間東井坪遺跡　23.兀塚遺跡



第４図　周辺遺跡分布図（Ｓ＝１：50,000）

2．調査の成果

今年度の調査対象地は昨年度の予備調査で全面発掘調査が必要と判断された5,857㎡のうち，事業地内の家屋撤去等の条件整備との関係から上半期にⅠ区からⅢ区にかけての2,727㎡，下半期にⅣ区からⅥ区の1,588㎡の発掘調査を行った。また，調査対象地（香川郡９条・14里相当）周辺は条里型地割が良好に遺存していることから，これらの地下遺構の有無と施工時期・存続期間の確認，及び条里景観における坪内の土地利用を追求を主眼に置いた調査を行った。以下，調査区毎に遺構・遺物の概略を説明する。

(1)　Ⅰ区の概要

Ⅰ区は調査対象地の南端に位置し，調査区内を現状の南北方向の条里型地割坪境線が貫通し，着手以前は水田であった。現状の地表面はT.P22m前後を測り，南から北へ緩やかに傾斜し，Ⅰ区北東部では北東方向へ傾斜する状況が看取される。基本層序は現地表面から0.3m程の耕作土と床土が見られ黄褐色粘土の地山層にいたる。また，現状の水田畦畔を境にしてⅠ区北半部と南半部では検出遺構面に約0.3m程の段差が確認でき，上記のとおり遺物包含層が見られない点からも遺構面は著しい削平を受けているものと思われる。Ⅰ区北半部中央には八幡２号塚が存在し，調査の結果，近世末から近現代の遺物が確認できたが，封土及び内部には明確な構造は確認できなかった。

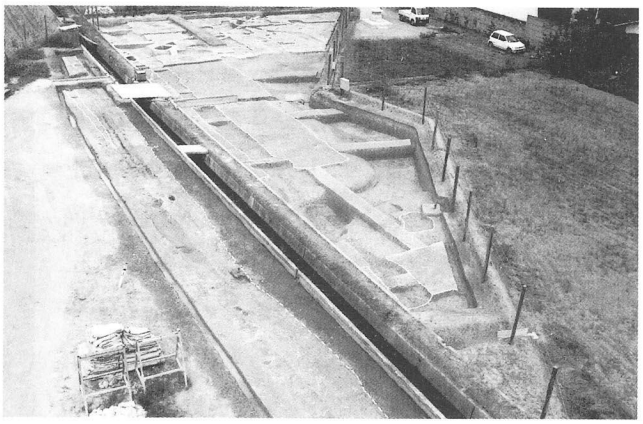


写真１　Ⅰ区　全景（南西から）

ＳＤ02　Ⅰ区北半部を南西方向から北東方向へ流下し，上面幅1.2～1.5m，深さ0.5～0.7mを測る溝状遺構である。

断面形は概ね逆台形を呈するが底面は恒常的な流水作用による凹凸が見られ，壁面は同作用によって抉られオーバーハングする箇所が確認できる。

埋没土は暗灰色粘土～シルトを基本とし最下層・下層・上層の３つに区分でき両側には上記流水作用による壁面の崩落土の流入を認める。この崩落土の貫入状況や後述する出土遺物の時間幅から上層・下層間に最低一回の掘り直し行為を想定する。出土遺物は少量で，下層より弥生後期前葉の高杯口縁部片，上層より甕口縁部片の出土を見た。

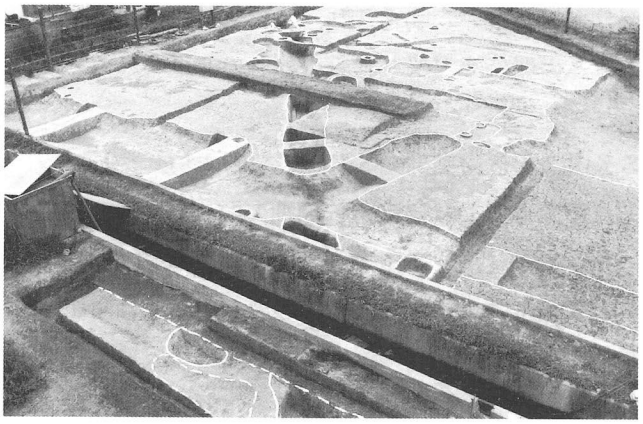


写真２　ＳＤ02　全景（南西から）

これらの土器はいずれも胎土中に角閃石を多量に含む高松平野北東部産である。これら出土遺物から本溝の帰属時期を弥生後期前葉から終末とし，堆積状況，掘り直し等の維持行為・出土遺物の時間幅を考慮すると本溝は灌漑水路とすることができ，その水源・取水口は現状の微地形から判断して，本遺跡西側を流下する現古川を推定しておきたい。

ＳＤ01　Ｉ区中央部を南北に流れる現状の条里型地割坪界線である水路に並行して検出した溝状遺構である。遺構面の削平により規模は検出箇所によってバラツキがあるが，Ｉ区南端から北半部中央の後述するＳＸ01と併行する部分では，上面幅1.2～1.5m，深さ0.5mを測り，北半部中央の八幡２号塚東側付近から調査区北端部では上面幅３m前後，深さ0.8m程を測り，明確に規模を異にする。断面形は概ね逆台形を呈し，埋没土は大きく下層の褐灰色シルトと上層の灰色シルトの最低２層の単位に分割することができる。ＳＸ01と接する部分のＩ区南半部では上層とした灰色シルトはＳＸ01の上層の埋土となっており，両遺構が同時埋没している状況が伺える。

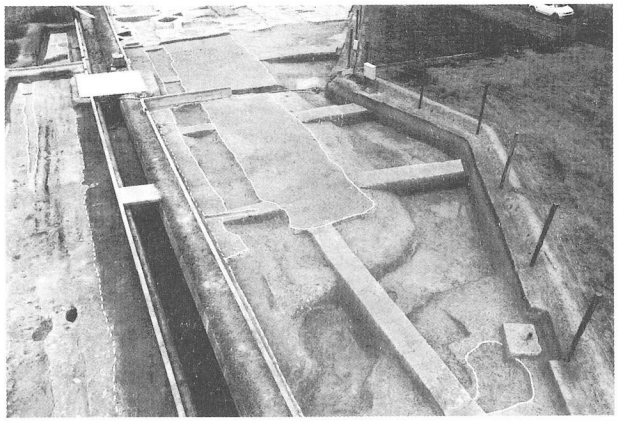


写真３　Ｉ区ＳＤ01　南半部全景（南から）

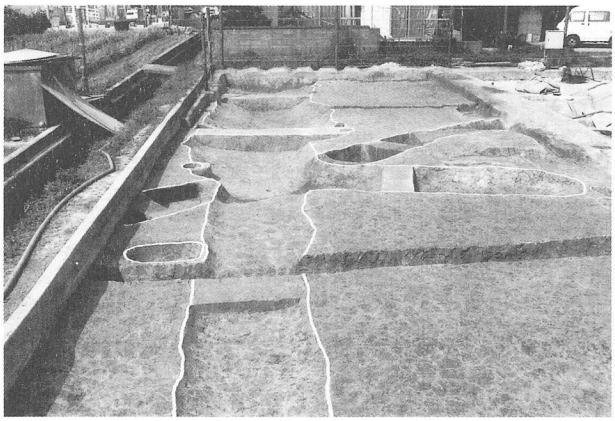


写真４　Ｉ区ＳＤ01　北半部全景（南から）

出土遺物はＳＸ01と並行する部分の下層から第８図１の土師質土器杯が八幡２号塚西側の部分上層～下層から第８図２の瀬戸・美濃折縁皿，3の土師質土器足釜，4同火鉢が出土した。１の土師質土器杯は14Ｃ前半に２～４は概ね16世紀後半から末に比定され，出土位置によって時間幅をもつ。

この出土遺物の時間的な差違と上記の規模の差違を考慮すると，まずＩ区南端からＳＸ01に並行する部分の規模の条里坪界溝が先行して14Ｃ前半に掘開され，その後15Ｃを前後する時期に八幡２号塚東側部分が拡張ないし改変され，16Ｃ末に埋没したと考える。この拡張・改変の要因については後述するＳＸ01との関係で理解されるべきものと思われる。

ＳＸ01　Ｉ区南半部でＳＤ01に並行ないし接して検出した掘状の遺構である。平面プランはＳＤ01との交点部分東側でほぼ直角に屈曲し（南屈曲部）ＳＤ01に並行して北へ延び（直線部分），八幡２号塚南側付近で再び東へ屈曲する（北屈曲部）。Ｉ区北半部と南半部で上面プランに段差状のズレが認められるのは後世の遺構面の削平に起因し，本来は南屈曲部から北屈曲部へ直線上に肩部が延びていたものと思われる。また，この部分の東側については事業地外へ延びる為確認できず，幅12m前後の堀状のものが階段状にクランクしながら北東方向へ延びるものなのか，南屈部から堀状のものが東へ派生する形態を採るかは，判断できない。

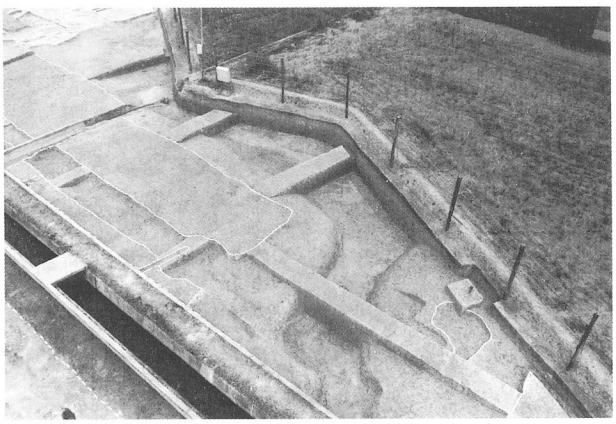
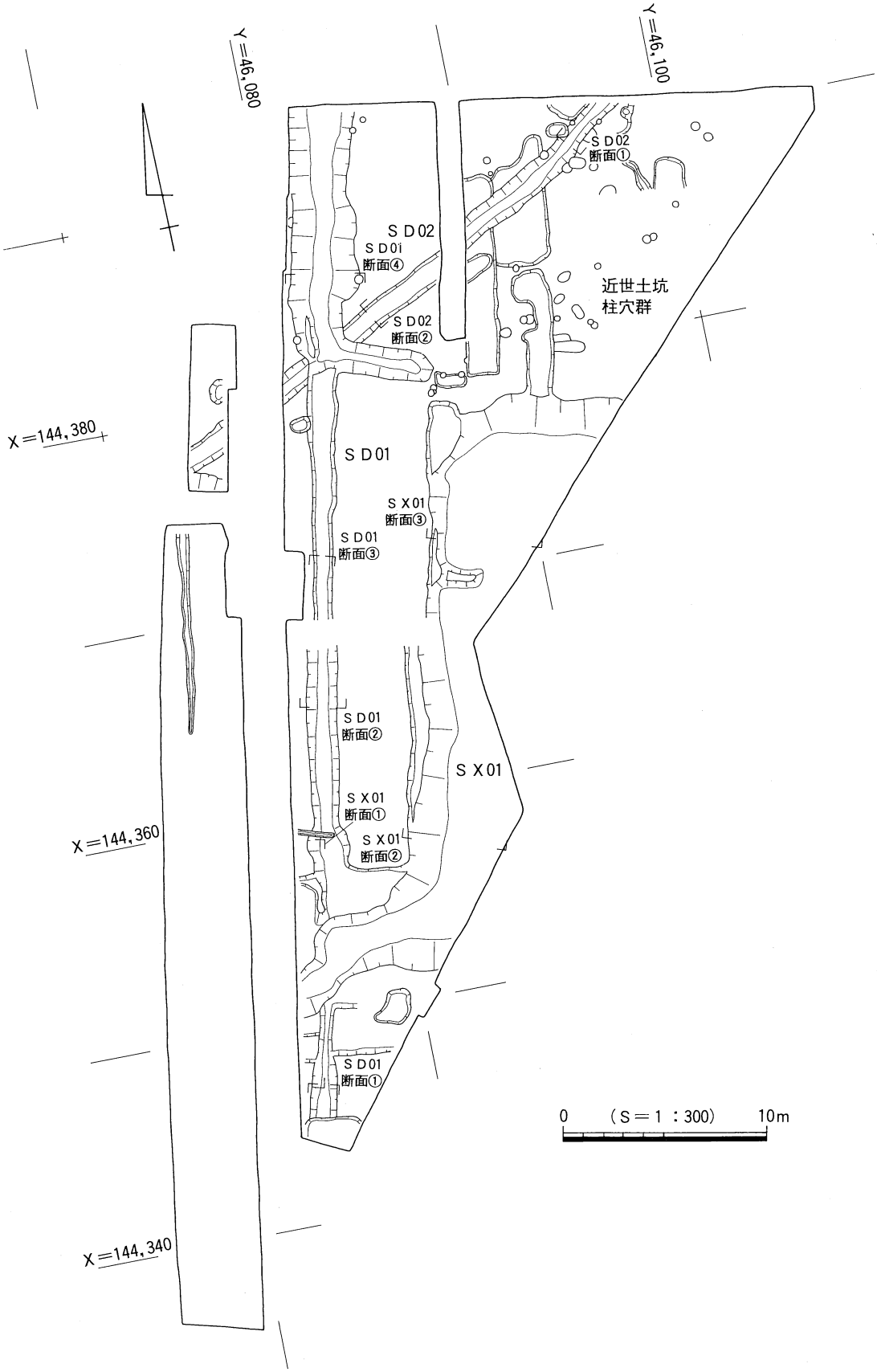


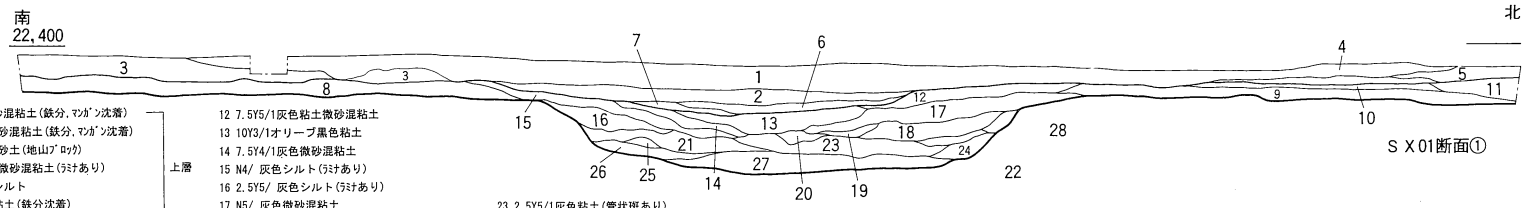
写真５　Ｉ区ＳＸ01　全景（南西から）

南端部分についてはＳＤ01との交点部分を越えて現水路下へ延びる様相を見せることやこの水路を挟んで西側調査区では確認できないことから，


Y=46,100
Y=46,080
X=144,380
X=144,360
X=144,340
SD02
断面①
SD02
SD01
断面④
SD02
断面②
近世土坑
柱穴群
SD01
SX01
断面③
SD01
断面③
SD01
断面②
SX01
SX01
断面①
SX01
断面②
SD01
断面①
0
(S＝1：300)
10m

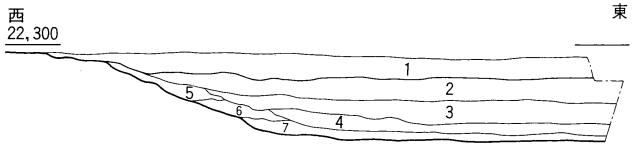
第5図　Ⅰ区　平面図

第6図　Ⅰ区　ＳＸ01・ＳＤ01・02　断面図

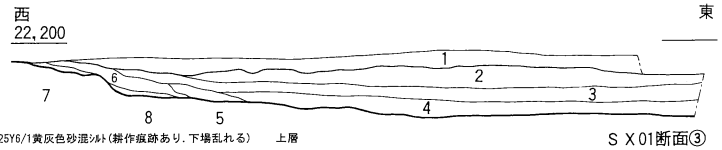


1 10YR5/1灰褐色砂混粘土(鉄分,ﾏﾝｶﾞﾝ沈着)
2 25Y4/1黄灰色微砂混粘土(鉄分,ﾏﾝｶﾞﾝ沈着)
3 5PB4/1暗青灰色砂土(地山ﾌﾞﾛｯｸ)
4 5PB5/1暗青灰色微砂混粘土(ﾗﾐﾅあり)
5 7.5Y7/1灰白色シルト
6 2.5Y5/1黄灰色粘土(鉄分沈着)
7 5Y4/1灰色微砂混粘土
8 5PB3/1暗青灰色微砂混粘土(ﾗﾐﾅあり)
9 5PB4/1暗青灰色微砂混粘土(ﾗﾐﾅあり)
10 2.5GY6/1オリーブ灰色シルト(ﾗﾐﾅあり)
11 10Y8/1灰白色シルト(ﾗﾐﾅあり)
12 7.5Y5/1灰色粘土微砂混粘土
13 10Y3/1オリーブ黒色粘土
14 7.5Y4/1灰色微砂混粘土
15 N4/ 灰色シルト(ﾗﾐﾅあり)
16 2.5Y5/ 灰色シルト(ﾗﾐﾅあり)
17 N5/ 灰色微砂混粘土
18 10Y5/ 灰色粘土(鉄分多く沈着)
19 7.5Y4/1灰色粘土
20 10Y6/1灰色細砂
21 N4/ 灰色シルト(ﾗﾐﾅあり)
22 N6/ 灰色粘土
23 2.5Y5/1灰色粘土(管状斑あり)
24 2.5GY5/1オリーブ灰色微砂混粘土
25 2.5GY7/1明オリーブ灰色微砂(ﾗﾐﾅあり)
26 2.5GY7/1明オリーブ灰色微砂(ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混)
27 2.5Y4/1灰色粘土(管状斑あり)
28 N5/ 灰色粘土

上層

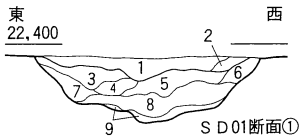


1 25Y6/1黄灰色砂混シルト(鉄分,ﾏﾝｶﾞﾝ多く沈着)　上層
2 25Y4/1黄灰色砂混粘土
3 10YR4/1褐灰色砂混粘土
4 10YR3/2黒褐色粘土(管状斑あり)
5 10YR7/6明黄褐色粘土(ｼﾙﾄがﾗﾐﾅ状に入る,流入土)
6 N4/ 灰色砂混粘土(ｼﾙﾄがﾗﾐﾅ状に入る)
7 N5/ 灰色粘土(ｼﾙﾄがﾗﾐﾅ状に入る)
下層

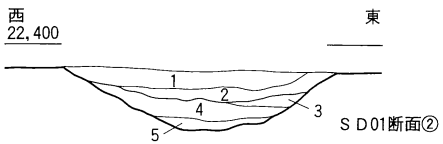


1 25Y6/1黄灰色砂混ｼﾙﾄ(耕作痕跡あり,下場乱れる)　上層
2 25Y4/1黄灰色粘土
3 25Y4/2暗灰黄色粘土(管状斑あり)
4 N3/ 暗灰色粘土(管状紋あり)
5 10YR5/1褐灰色砂混粘土
6 N4/ 灰色砂混粘土
7 2.5Y7/6明黄褐色砂混粘土(流入土)
8 5Y7/4浅黄色砂混粘土(流入土)
下層

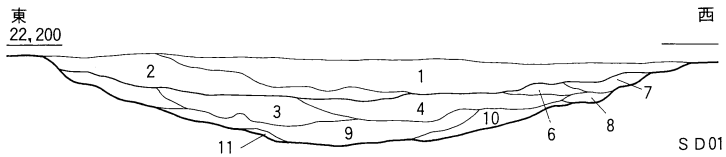
0　(Ｓ＝１：60)　2 m



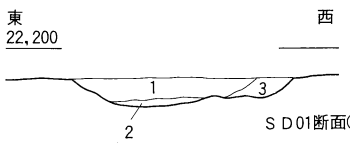
1 10YR6/6明黄褐色砂混粘土(+10YR5/1褐灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ含む)
2 10YR5/1褐灰色粘土　上層
3 N5/ 灰色粘土(ﾗﾐﾅあり)
4 N4/ 灰色粘土
5 10YR7/6明黄褐色粘土(地山流入土)
6 10YR4/1褐灰色粘土(ﾗﾐﾅあり)
7 10Y4/1灰色シルト(ﾗﾐﾅあり)
8 N4/ 灰色粘土(ﾗﾐﾅあり)
9 2.5GY8/1灰白色砂混粘土
下層



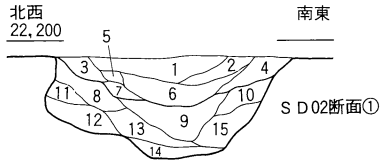
1 25Y6/1黄灰色砂混ｼﾙﾄ(鉄分,ﾏﾝｶﾞﾝ多く沈着)
2 5Y5/1灰色ｼﾙﾄ(ﾗﾐﾅあり)　上層
3 10Y5/1灰色ｼﾙﾄ(ﾗﾐﾅあり)
4 10YR5/1褐灰色粘土(ﾗﾐﾅあり)　下層
5 25Y3/1黒褐色砂混粘土(ﾗﾐﾅあり)



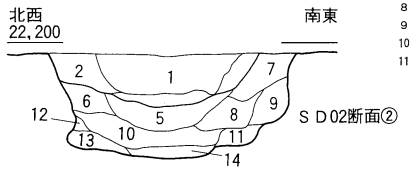
1 2.5Y6/1黄灰色砂混シルト(鉄分,ﾏﾝｶﾞﾝ多く沈着)
2 2.5Y5/1黄灰色粘質土(ｼﾙﾄがﾗﾐﾅ状に入る)　上層
3 5Y5/1灰色砂混シルト
4 2.5Y4/1黄灰色粘土(ｼﾙﾄがﾗﾐﾅ状に入る)
5 10YR6/1褐灰色粘質土(ｼﾙﾄがﾗﾐﾅ状に入る)
6 2.5Y5/1黄灰色砂混粘質土
7 10YR6/6明黄褐色粘質土(流土)
8 10YR5/1褐灰白色砂混粘土(流土)
9 5Y4/1灰色粘質土(ｼﾙﾄがﾗﾐﾅ状に入る)
10 7.5Y5/1灰色粘質土(ｼﾙﾄがﾗﾐﾅ状に入る)
11 5Y5/1灰色シルト
下層



1 25Y4/1黄灰色粘土(ｼﾙﾄがﾗﾐﾅ状に入る)
2 5Y6/1黄灰色粘土
3 5Y5/15灰色砂土

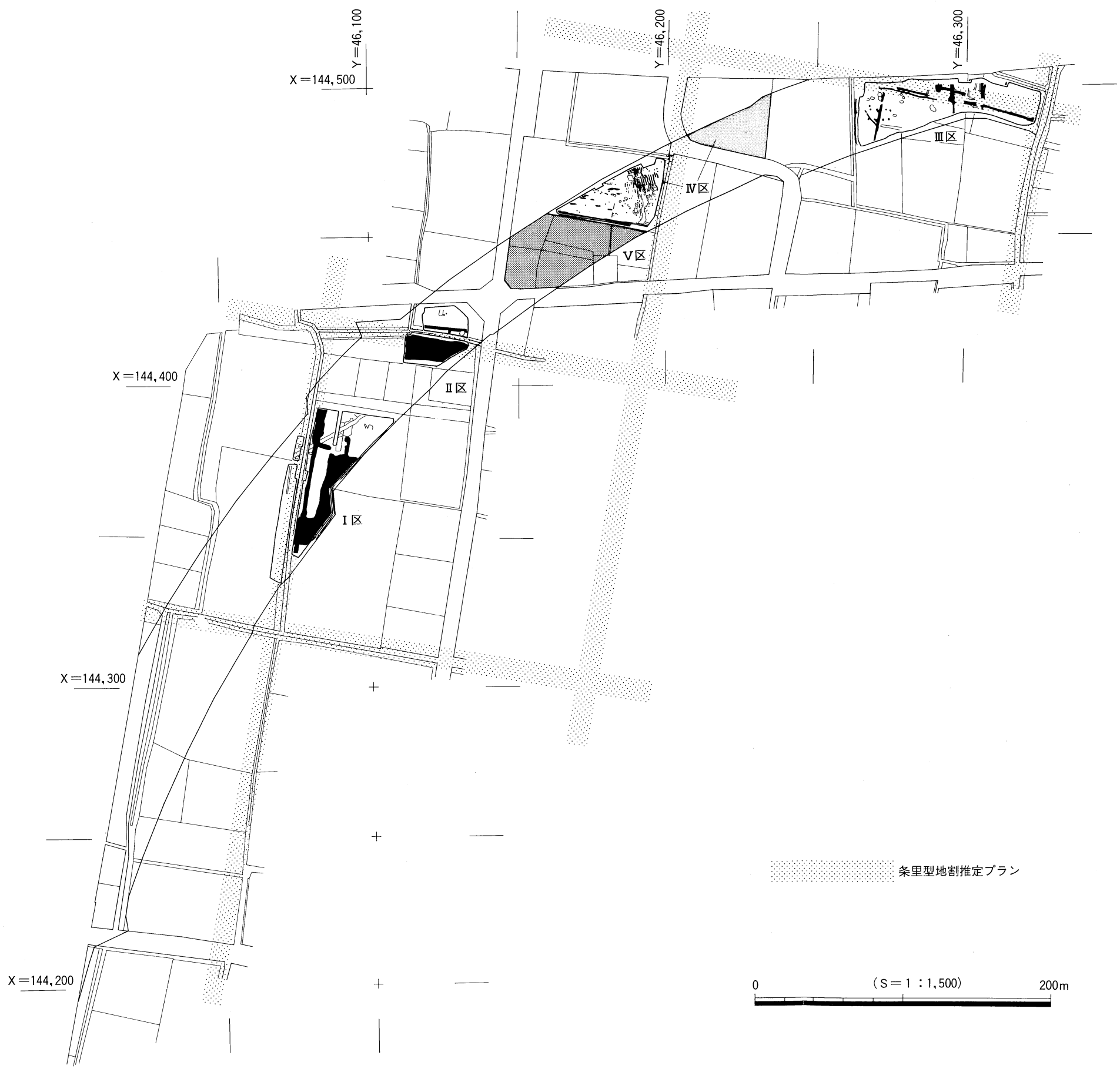


1 N4/ 暗灰オリーブ色砂混シルト
2 N3/ 暗灰色砂混シルト
3 2.5Y7/1灰白色シルト(崩落土)
4 2.5Y7/1灰白色シルト(崩落土)
5 10Y8/1灰白色シルト
6 2.5Y3/1黒褐色砂混粘土
7 2.5Y4/1黄灰色砂混粘土
上層
8 5Y6/1灰色シルト(鉄分沈着,崩落土)
9 2.5Y2/1黒色砂混粘土
10 2.5Y7/6明黄褐色粘質土(崩落土)
11 5Y7/2灰白色シルト(ﾗﾐﾅあり,崩落土)
12 5Y4/1灰色粘混シルト(ﾗﾐﾅあり,崩落土)
13 2.5Y3/1黒褐色砂混粘土
14 2.5Y4/1黄灰色粗砂(ﾗﾐﾅあり)
15 2.5Y5/1黄灰色砂混粘土
下層



1 5PB4/1暗青灰色砂混粘土
2 7.5Y8/1灰白色砂質土(崩落土)
3 5P5/1紫灰色砂混粘土
4 5B2/1青黒色粘質土
上層
5 5PB3/1暗青灰色砂混粘土
6 N7/ 灰白色シルト(流土)
7 10Y8/1灰白色砂質土(ﾗﾐﾅあり,崩落土)
8 10Y6/1灰色シルト(ﾗﾐﾅあり,崩落土)
9 7.5Y6/1灰白色砂質土(ﾗﾐﾅあり,崩落土)
10 N3/ 暗灰色砂混粘土(ﾗﾐﾅあり)
11 7.5Y7/1灰白色砂混シルト
12 N5/ 灰色粗砂
13 2.5GY7/1明オリーブ灰色粗砂混シルト(ﾗﾐﾅあり)
14 N4/ 灰色粗砂(ﾗﾐﾅあり)
下層

0　(Ｓ＝１：40)　1 m



第７図　八幡遺跡　遺構配置図

水路下で収束するとともに，ＳＤ01に加えて別の条里坪界溝が存在する可能性を考えておきたい。

規模は検出面で南北60m，直線部分は東西20m以上（東肩未確認）を測る。下場のラインは調査区南端付近のＳＤ01との交点部分では両側にテラス状の平坦面と幅２m程のやや蛇行する溝状を呈し，南屈曲部から広がるように北屈曲部にかけては上場に沿ってほぼ直線上に延び，一部に矮小な突出部を付設する。底面のレベルはＳＤ01との交点部分と北屈曲部の最深部では0.2m程の比高差をもち緩やかに北へ向かって傾斜するが，底面は概ね平坦である。

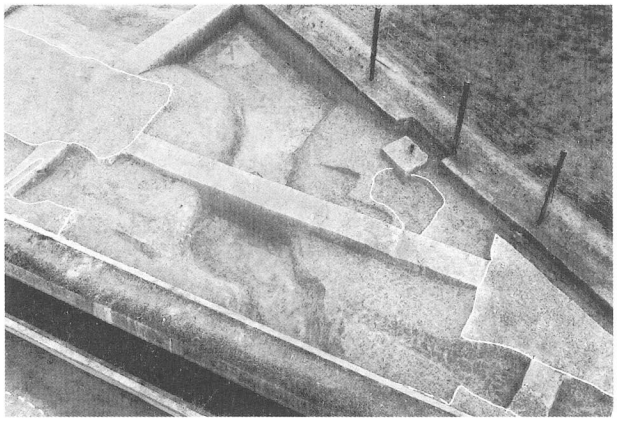


写真６　Ｉ区ＳＸ01　ＳＤ01との交点部（西から）

埋没土は大きく下層とした暗灰色系ないし褐灰色系の粘質土と上層の黄灰色シルトの２層に分かれ肩部には地山である黄褐色粘土の流入土を認めるが，土累・土塀等の崩壊による二次堆積を想定できる程のものではない。

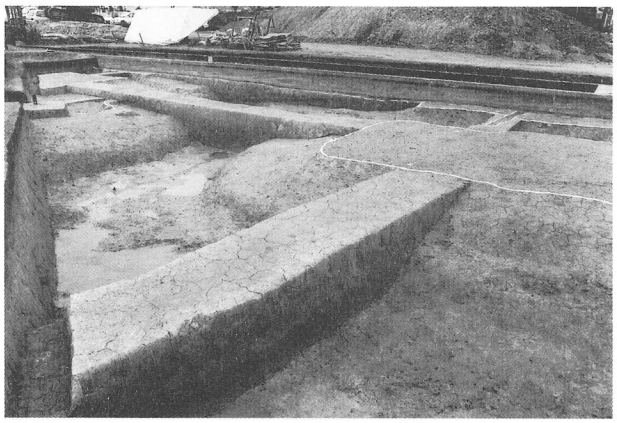


写真７　Ｉ区ＳＸ01　南屈曲部（北東から）

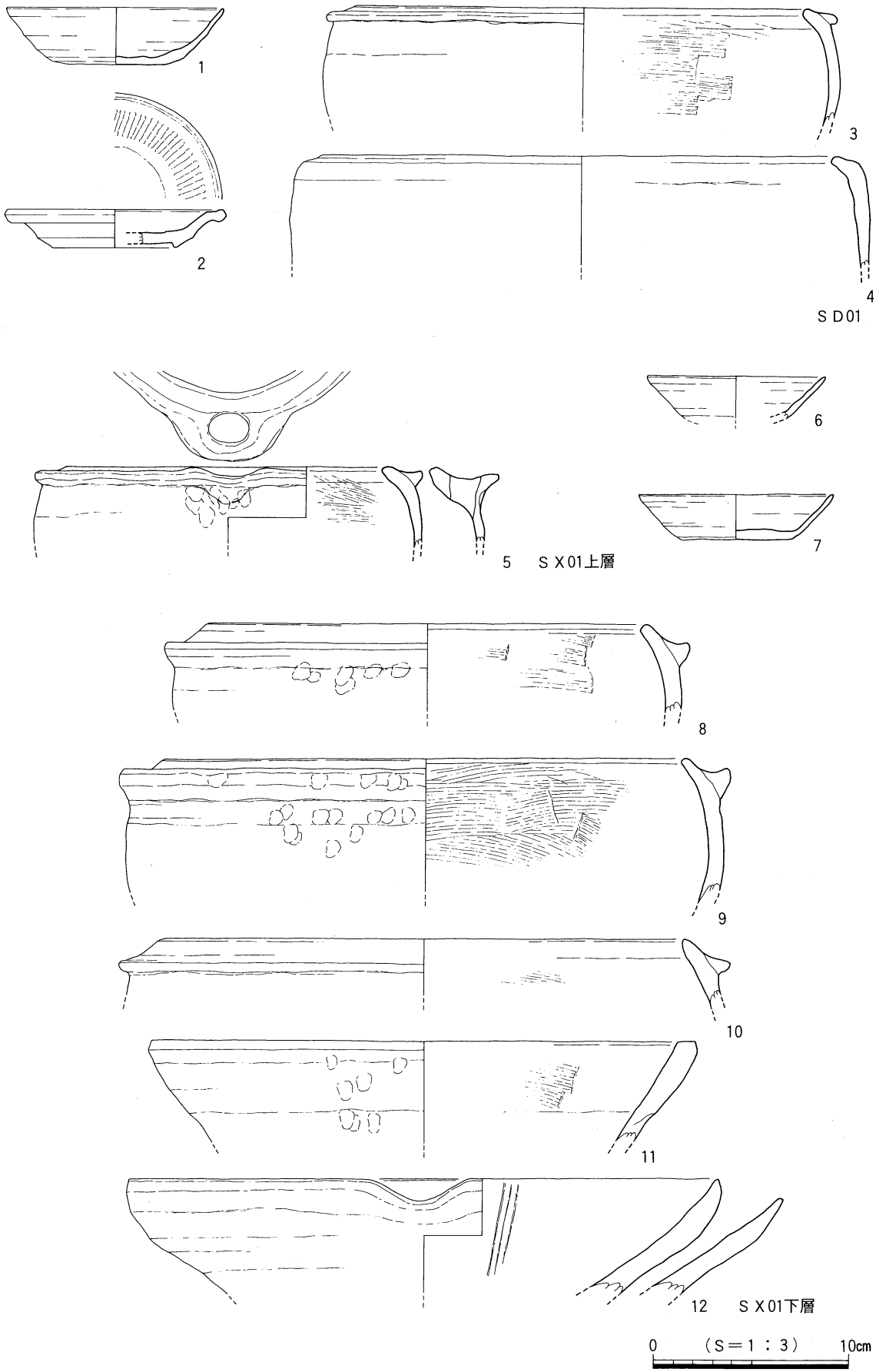
ＳＤ01との交点部分の下層にはラミナ状堆積が確認できる灰色系粘土～シルトが確認でき，流水状態が想定されるが，南屈曲部から北屈曲部にかけてこのように堆積状況は見られず，上記の下層とした暗灰色系粘土が0.6m程漸移的に堆積する。これら堆積状況などから条里坪界溝であるＳＤ01ないし現水路下に想定される別の条里坪境溝から引水していたことと，それ以外の部分では長期間の常時帯水状態にあったことが伺える。

出土遺物は28リットル入コンテナ３箱程で，南屈曲部付近の下層にやや集中して遺物が見られたが多くのものに使用痕が確認できる破片の状態で出土した。器種組成は土師質土器足釜などの煮沸具や土師質ないし瓦質焼成の捏鉢・擂鉢などの調理具が大半で，土師質土器杯などの供膳具は極めて少ない。第８図５が上層，6～12が下層より出土している。

第８図６・７は土師質土器杯である。６は小片の為，口径・傾きに検討の余地を残す。７は口径が10cm・器高が2.5cmと小形化の様相を示しながらも立ち上がりが急な比較的古相を示す特徴を留めていることから，14Ｃ中葉～後葉に位置づけられよう。８～10は土師質土器足釜である。貼り付けによる鍔の形態にバラツキがあるがいずれのものも胴部の球形化がすすみ，口縁部が顕著に内径する傾向を示す。これらの特徴から14Ｃ末から15Ｃ前葉の所産と見ておきたい。11は土師質土器捏鉢である。小片の為，口径・傾きに検討を余地を残す。12は楠井産瓦質擂鉢である。５は土師質土器土釜である。16Ｃ後葉に位置づけられよう。

出土遺物から本遺構は14Ｃ中葉～後葉に構築され16Ｃ後葉に埋没したと考えられる。これは断面観察でＳＤ01と同時埋没していることも両遺構の出土遺物の年代観とも矛盾しない。

他，Ｉ区北半部では近世後半以降の土坑・ピット群を検出しているがここでは省略する。



第8図　Ⅰ区　S D01・S X01出土土器

(2)　Ⅱ区の概要

Ⅱ区はⅠ区から20m程北東よりの部分に現存する条里型地割の東西方向の坪界線である水路が，調査区中央を貫通し，着手以前は水田であった。基本層序はⅠ区と同様に0.3m程の耕作土と床土が見られた後，ベースである黄褐色粘土層が現れる。遺構面直上には遺物包含層を一切交えない点からⅠ同様に有る程度の削平を被っているものと思われる。調査の結果，上記の条里型地割に合致する水路北側で14c後半代の溝（ＳＤ01）を検出し，南側で同様にこれに並行する形で堀状遺構（ＳＸ01）を検出した。

ＳＤ01　Ⅱ区中央部の条里型地割坪界線である水路北側で検出した，上面幅0.7～0.8m，深さ0.3m前後を測る断面逆台形の東西方向の溝である。

この現水路を挟んで南側にはＳＸ01が併走し，検出面でのこれとの間隔は２～2.5m程を測る。埋没土は灰白色シルト～粘質土が見られ底面付近から14Ｃ後半に比定される土師質土器足釜口縁部片，同脚部片が出土した。

また，主たる埋土の特徴がⅠ区で検出したＳＤ01・ＳＸ01に似ることから，これらの年代観に準じて14Ｃ後半から16Ｃ後葉に埋没したものと推定しておきたい。

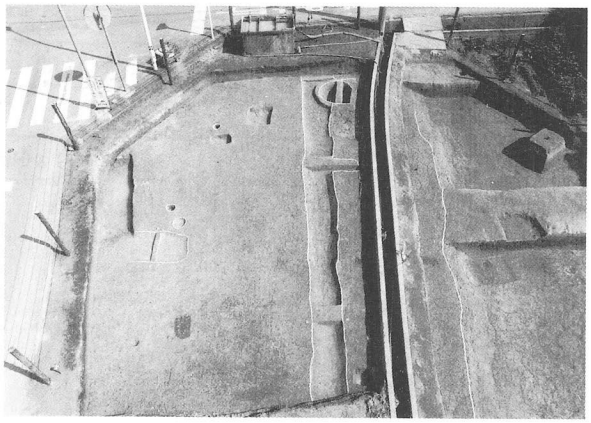


写真８　Ⅱ区　ＳＤ01　全景（西から）

ＳＸ01　Ⅱ区南半部で検出した上面幅８～９ｍ，深さ0.4～0.5m程を測り，断面が逆台形を呈する堀状の遺構である。

底面は平坦で検出した範囲では殆ど比高差は見られない。南北両側で立ち上がりはの傾斜は異なっている。条里坪界溝であるＳＤ01が位置する北側は比較的に急傾斜で南側は一端テラス状の幅1.5m程の平坦面を有し，緩やかに立ち上がる。

埋没土は大きく下層の灰黄色ないし灰褐色系の粘質土と上層の灰白色シルトの２つに分層される。この上層の灰白色シルト・粘質土の下場は耕作痕跡と思われる攪拌された状況が看取され，埋没後は耕作地へと転換したものと思われる。この埋没土の特徴はⅠ区で検出した堀状遺構ＳＸ01の特徴と酷似する。また，上層の灰白色系シルト～粘質土は北接するＳＤ01の埋土にも類似する。出土遺物は少なく器形・器種が判別できるものは少ない。上層より16Ｃ後半代に属する土師質土器火鉢，下層より第９図１に図示した14Ｃ後半～15Ｃ初頭の土師質土器足釜が出土した。

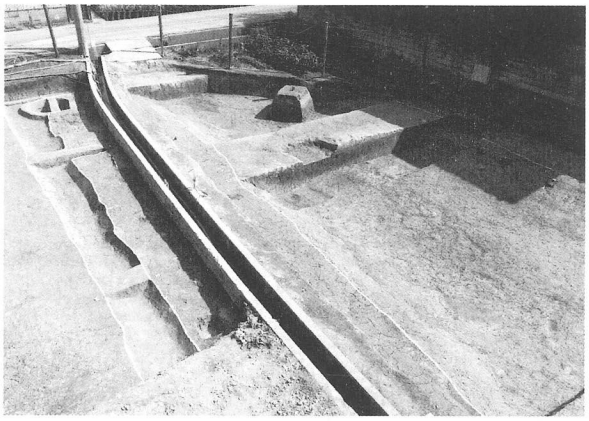
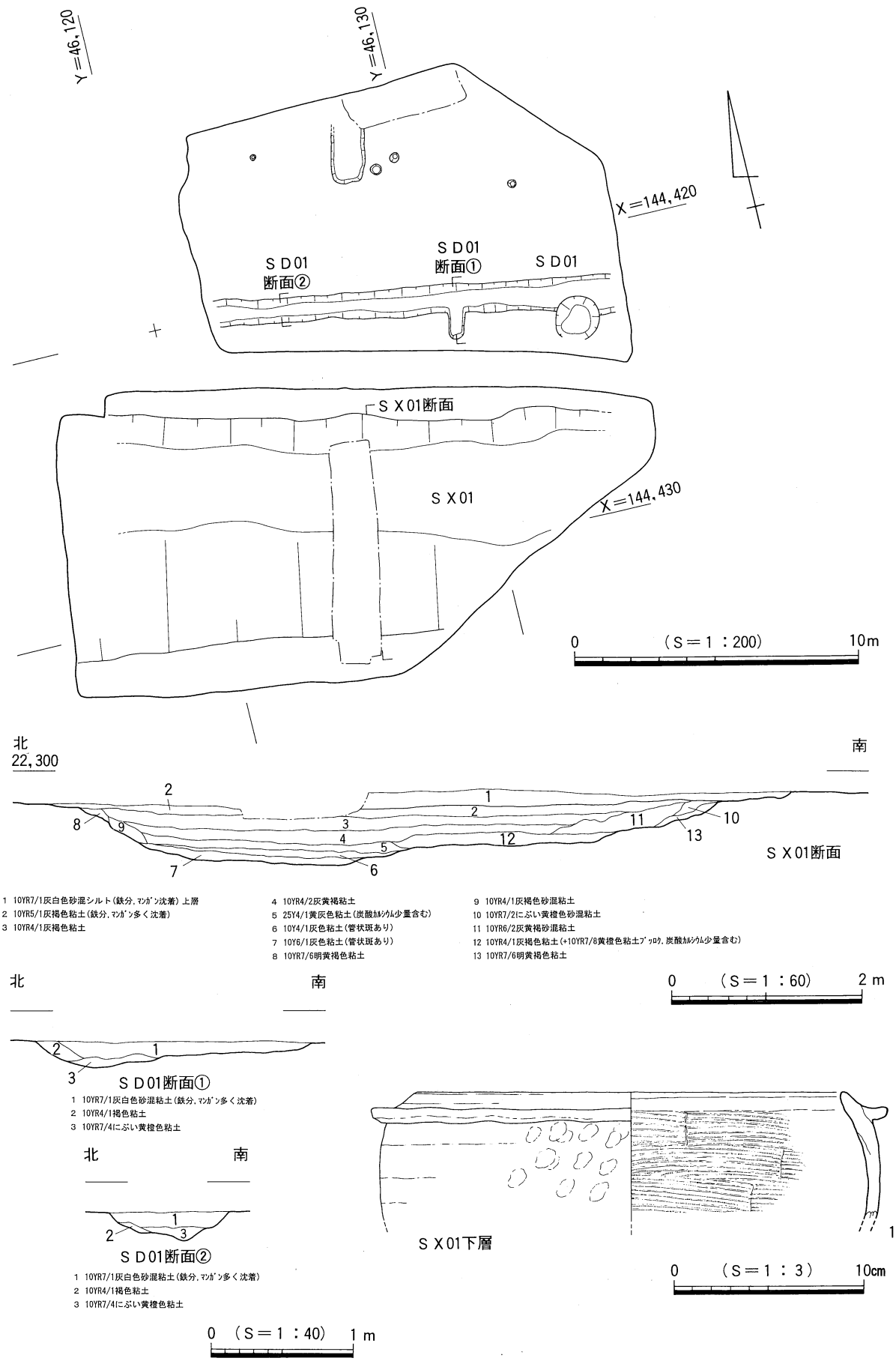


写真９　Ⅱ区　ＳＸ01　全景（西から）

これら出土遺物から本遺構は14Ｃ後半代に掘開され16Ｃ後半に埋没したと推定する。また，本遺構の継続期間はⅠ区のＳＤ01・ＳＸ01，Ⅱ区ＳＤ01の継続期間とも符合し，埋没土の特徴の類似もこれを支持する。



第９図　Ⅱ区　ＳＸ01・ＳＤ01平・断面図ＳＸ01出土土器

(3) Ⅲ区の概要

本調査区は国道11号線バイパスに南接し，本遺跡で最も北東部に位置し，中森遺跡とも東接するものである。調査区東端が現存する南北の条里型地割坪界線に相当し，中央部を東西の同地割坪界推定線が通過する形になる。

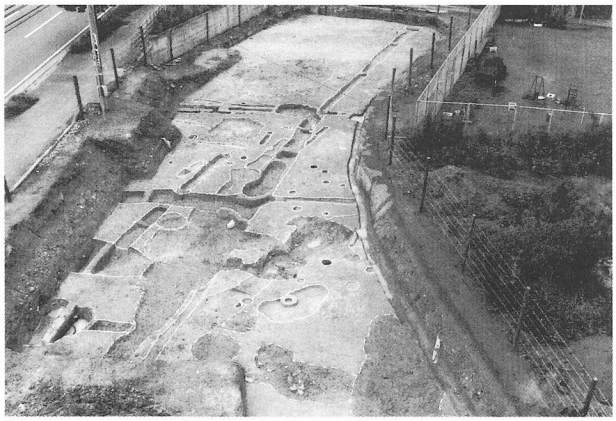


写真10　Ⅲ区東半部地割溝群　全景（西から）

調査区東端では条里坪界溝に相当する溝は検出できなかったが，東西方向の坪界に合致する溝（ＳＤ01を確認した。このＳＤ01は調査区中央で複数南北に派生する形を採るが，その方位は現存する条里型地割線の方向には合致せずやや東へ傾く。出土遺物は近世後半代の陶磁器類に加えて若干量の中世土師質土器（概ね14～15Ｃ代）の出土を見た。断面観察では掘り直し等の痕跡は確認できなかったが，中世期に設定された本遺構の平面プランを活かして近世後半段階に再び地割溝が掘開されたと見ておきたい。

4．まとめ

今回の発掘調査では弥生・中世・近世の遺構が主に確認された。ここでは諸遺構の性格と今後の検討課題を挙げることでまとめとしておきたい。

＜条里型地割溝の検出及び土地開発の推移＞

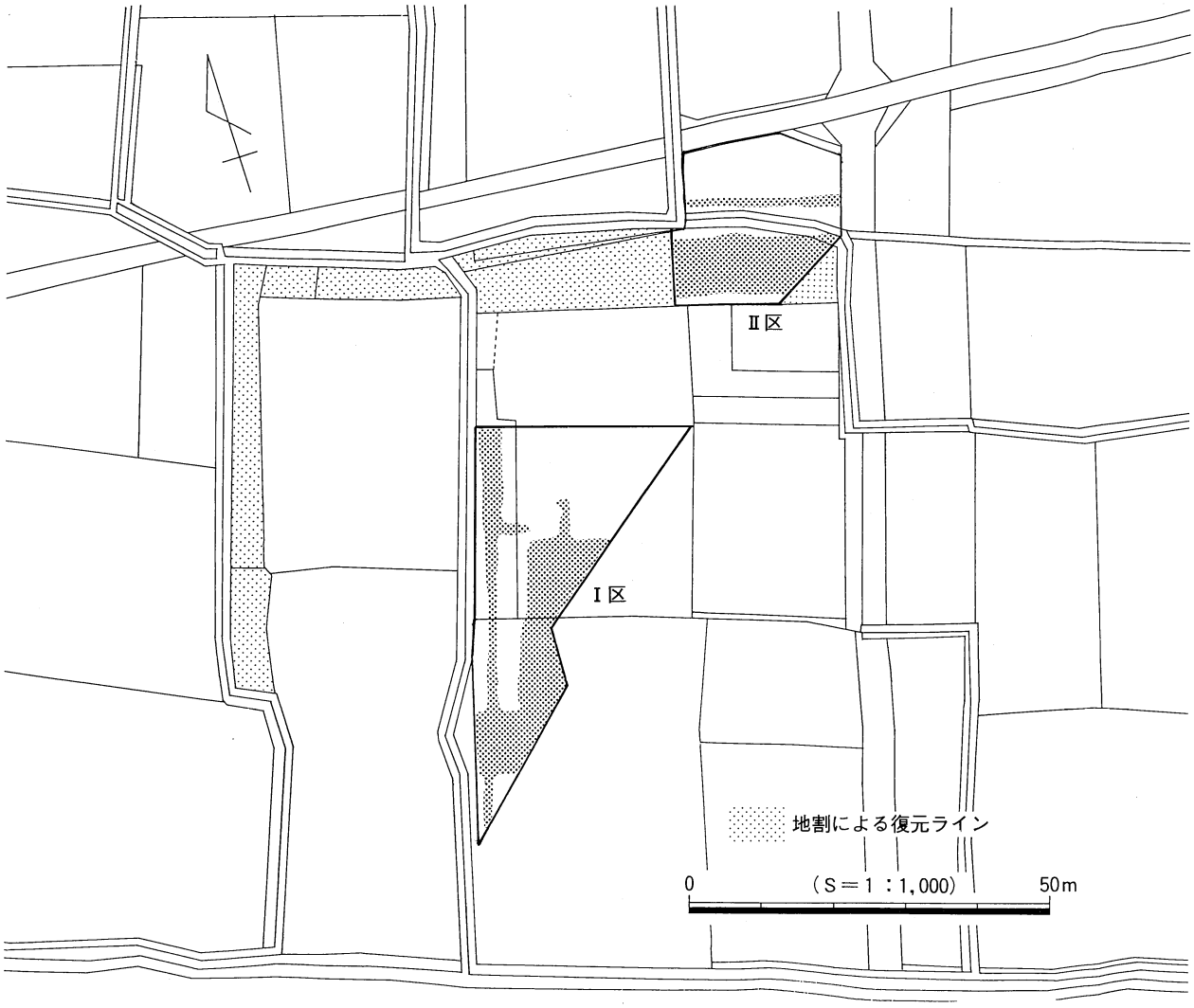
すべての調査区において現存する条里型地割坪界線に合致する溝を検出した（Ⅰ区ＳＤ01・Ⅱ区ＳＤ01等）。そしてその掘開年代は14Ｃ中葉に求められ，そのほとんどのものが16Ｃ末には埋没していることが判明した。この結果は昨年度及び今年度の中森遺跡の成果とも矛盾しないもので，本遺跡周辺に普遍化できる現象として位置づけられるものと考えられる。

さて，Ⅰ区では弥生後期～終末期にかけての灌漑水路ＳＤ02を検出した。流下方向や周辺の微地形からこのＳＤ02は本遺跡南西を北流する現古川の旧流路から取水するものと推定されるが，先の条里型地割溝を土地区画以外に灌漑水路と仮定した場合弥生後期終末以降，中世14世紀にいたるまで同様の性格をもつ遺構は検出していない。調査範囲の制約もあるが，弥生後期以降，古川の下刻が進行し取水が困難となり，中世14Ｃ代までの土地開発の空白期を想定できよう。本遺跡周辺の現香東川西岸は，東岸の網目状の旧河道が多く観察され沖積層が発達する土地条件に比べて，旧河道が発達せずに比較的高燥な土地条件を現在まで留めている点からも推測されよう。これらの土地条件と関係した耕地開発への推移は条里型地割に基づいた土地開発の開始年代と絡めて今後追求して行くべき問題であろう。

＜Ⅰ区・Ⅱ区ＳＸ01（堀状遺構）の評価＞

Ⅰ区・Ⅱ区において検出したＳＸ01の堀状の遺構は，近接する条里型地割溝とも関連性をもった遺構であることは既に述べた通りである。Ⅰ区では本遺構の幅の確認ができなかったが，Ⅱ区では幅８～９ｍと隣接する同時期の条里型地割坪界溝と比較にならない規模をもつ。一定の流水状態ではなく長期間の帯水状態にあったことも灌漑用の用水路とは捉えられない。そして，これら遺構は調査区外へ延びる為，全体の平面形を正確に伺い知ることは困難である。

そこで，本遺跡周辺は条里型地割が良好に依存することから，現状の地割にこれらの遺構のプランが反映されている可能性を考えて，最も時間的に遡れる資料として明治期の土地更正図との照合を試みた（第10図）。Ⅰ区ＳＸ01は地割には反映されていない。Ⅱ区ＳＸ01に対応すると思われる部分にはこれを反映した地割が確認できる。これを手がかりに復元すると，Ⅱ区ＳＸ01は調査西端から西へ58mの所で南へクランクし，Ⅰ区ＳＸ01を取り囲む様に55m程延びていたことになる。この地割が地下遺構を反映しているという前提に立てば，これらの遺構の性格としては平地城館の可能性が考えられよう。平地城館の可能性がある地点は，地割として反映されることに加えて，通称地名に地下遺構の存在を示唆するものが見られる場合が多い。現在までに聞き取り調査を行った限りでは現在の字名「八幡」以外に，これに該当する通称地名などは確認できていない。文字資料においてもこれを示唆するものは確認できていない。しかし，想定される平面プランからは平地城館の可能性が最も高く，今後はこれを補強する作業を継続していきたい。



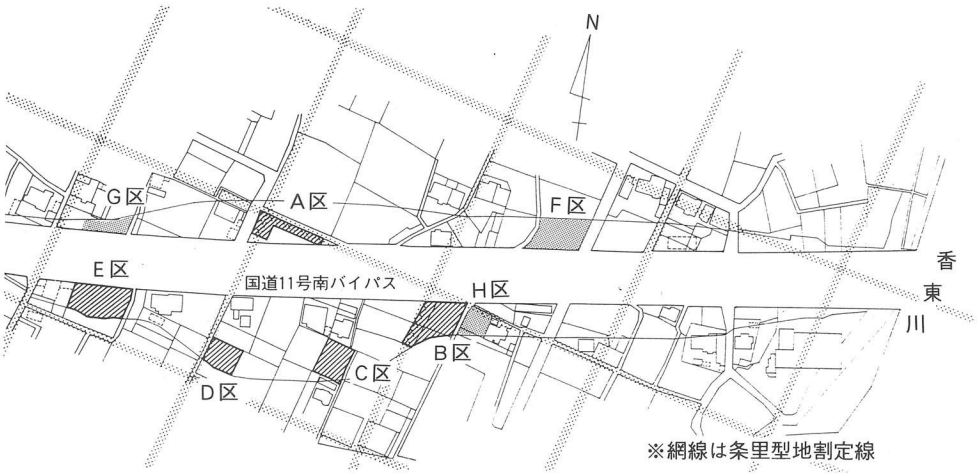
第10図　明治期更正図と検出遺構の照合

中　森　遺　跡

1．調査の成果

本遺跡は昨年度からの継続事業である。今年度は用地取得との関係から昨年度地下遺構の状況が把握できなかった4,290㎡を対象として予備調査を実施した。その結果を受けて，用地取得が完了した今年度は1,563㎡の本調査を実施した。調査区割については昨年度のＢ～Ｅ区の地区割を踏襲し，Ｆ区から始めることとした。

調査の結果Ｆ区では古墳時代中期から古代にかけての溝群，Ｇ区では中世14～16Ｃ代の屋敷地を検出した。Ｈ区は昨年度に後期旧石器ブロックが確認された東側の部分に相当し，少量の横長剥片の出土を確認するとともに，扇状地性礫層上面で同時期の自然窪地を検出した。



第11図　中森遺跡調査区割図

(1)　Ｆ区の概要

本調査区は消滅した中森１号墳の推定地に該当する。調査の結果，その推定地と思われる塚状の部分を確認するとともに，古墳時代中期～古代までの谷地形と古墳時代後期から古代の数条溝を検出した。基本層序は現表面から1.5程の客土層があり，中世～近世期の旧耕作土が0.3m見られた後，遺構面である灰黄色粘土に達する。遺構面は南東から北西へ緩やか傾斜し両部分での比高差は0.3m程を測る。

ＳＤ02　調査区東半部で検出した平面形が円弧を描く溝状遺構である。検出面で上面幅1.1～1.4m，深さ0.4～0.5mを測り，断面が概ね逆台形を呈する。埋没土は上層とした褐灰色粘土と下層とした黒褐色ないし暗灰色粘土に分かれる。両層位とも流水痕跡を示すラミナ状堆積は確認できず比較的長期間掘開当時の形状を留めていたと思われる。

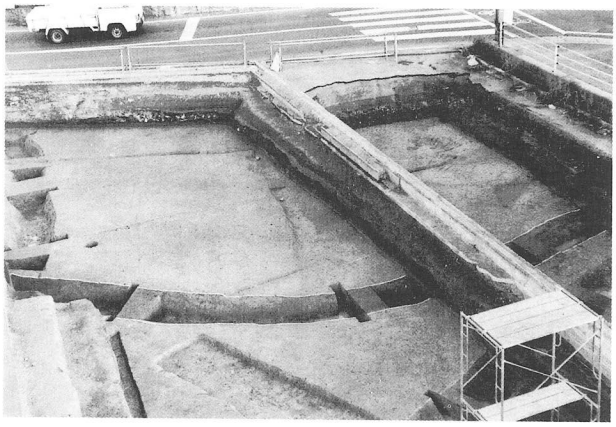
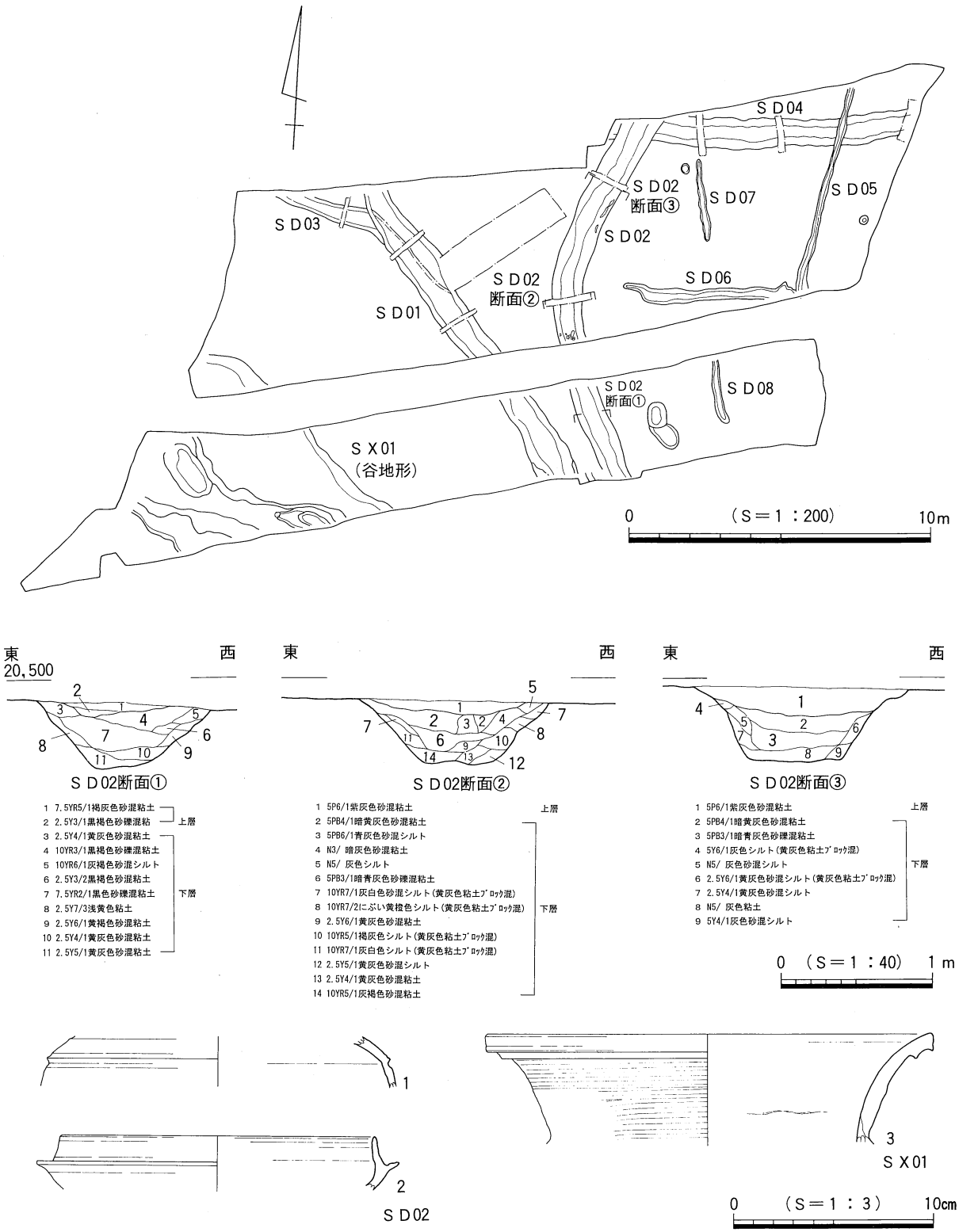


写真11　Ｆ区ＳＤ02　全景（西から）

出土遺物は小破片の状態のものが多く主に下層より第12図に示す杯身・蓋類を中心とした須恵器が出土土した。第12図１・２とも概ねＭＴ15型式に該当するものと思われる。また，このＳＤ02の内側には亡失した中森１号墳推定地が存在する。調査



第12図　F区　平面図・S D02断面図及びS D02・S X01出土土器

区南西隅に地山がほぼ円形に削り残された箇所があり，地元の聞き取り調査によるとこの部分に中森１号墳とされた塚状の高まりが存在していたものと思われる。そして，この外側にＳＤ02が円弧を描くように東へカーブするが，古墳周溝と断定できるだけの材料は得られていない。他古墳時代の遺物としてＳＤ07より石製模造品の紡錘車が出土している。

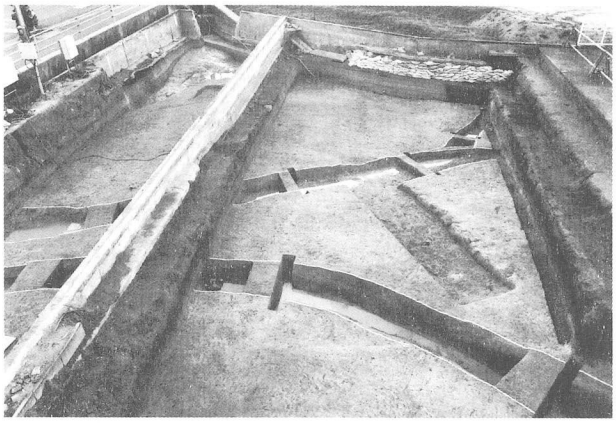


写真12　Ｆ区西半部　全景（東から）

(2)　Ｇ区の概要

本調査区は国道11号線バイパスを挟んで，昨年度Ｈ区の北側に位置する。調査区自体は270㎡程の小規模なものであったが，Ｅ区で検出した14Ｃ後半～16Ｃに営まれた屋敷地とは別の同時期の屋敷地を検出した。これに周辺の予備調査結果を合わせると，上記時期には同一坪内に小規模な屋敷地が２つ程度存在することが判明し，条里景観における土地利用の一例を示す資料となった。

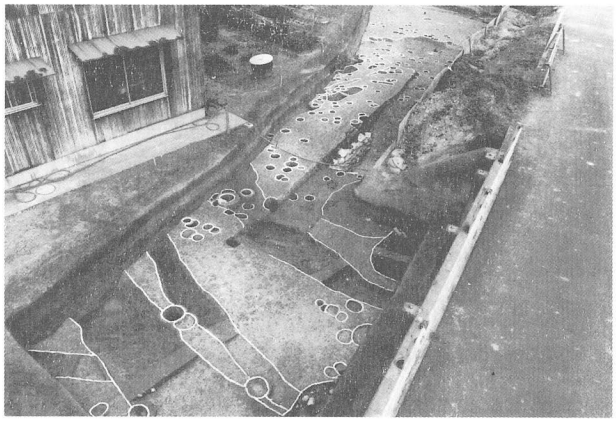


写真13　Ｇ区中世屋敷地　全景（南西から）

基本層序は現耕作土床土が0.25ｍ程調査区全域に確認され，検出面である黄灰色粘土ないし灰色粘土が現れる。このベース土の差違は遺構面下位の埋積谷の存在が影響している。この埋積谷は下層の扇状地礫層の起伏によって作り出された浅谷状の地形に，粘土層が何層か分かれて堆積しているものでこの上面の灰色粘土が中世遺構検出面となる。

中世屋敷地　本調査区全域で屋敷地に関連する遺構を検出した。調査範囲の限界から復元した各建物の規模は判明しないが，掘立柱建物５棟以上，井戸２基，溝４条，他柱穴・土坑数基である。第13図に示した建物複原案以外にも数十基の柱穴が存在することから，掘立柱建物の数は増加するものと思われる。柱穴からの出土遺物の検討を行っていないので，建物の詳細な変遷は本報告時の課題としておくが，出土遺物全体の示す14Ｃ後半から16Ｃ後半という時間幅からも，一定期間の継続期間を見積もる必要があろう。

検出遺構の中で，屋敷地の範囲を推定する手がかりになる遺構として，調査区西端付近では柱穴分布が減少するとともに３条の切り合い関係をもつ溝（ＳＤ02・03・04）を検出した。この溝群の西側18ｍには条里型地割坪界溝が存在し，この間は構造物等の問題から調査しきれなかったが，柱穴等の分布が減少することから，

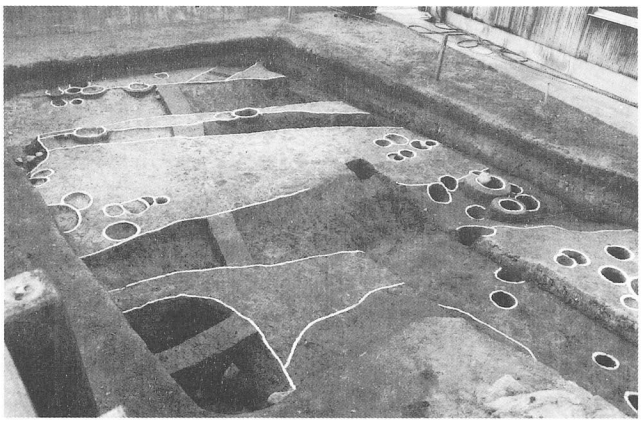


写真14　Ｇ区ＳＤ02～04　全景（東から）

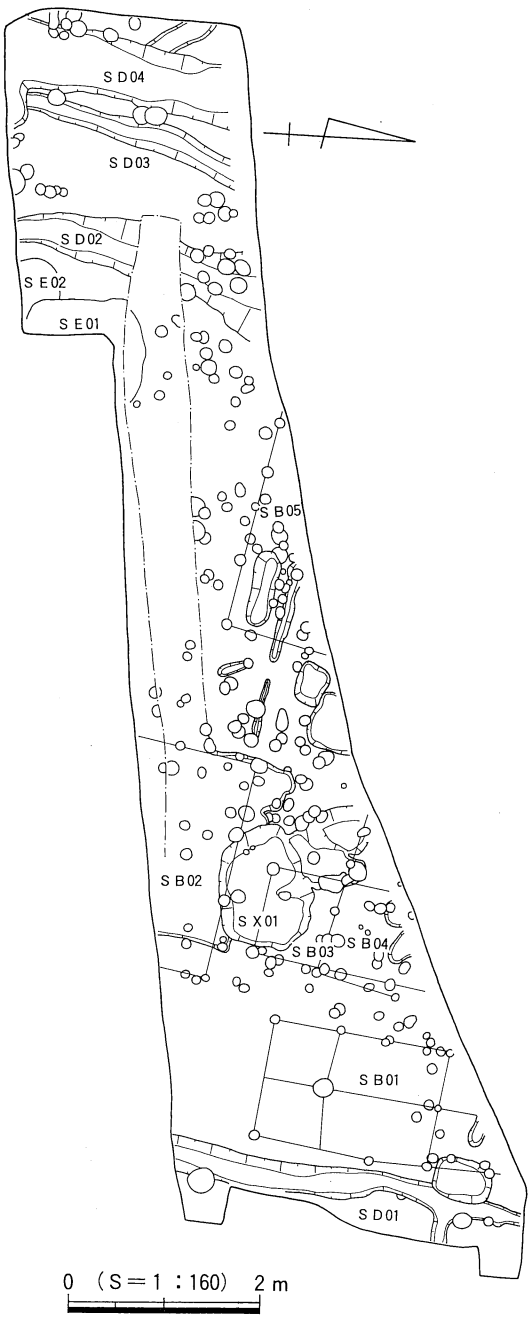
ＳＤ02・03・04をほぼ屋敷地の西限を示すものと考えておきたい。一方東限は，ＳＤ01付近において柱穴等の遺構分布が希薄になることと東側の予備調査トレンチで遺構が確認さないことから，本調査区東端付近を東限として，東西幅約30m前後の屋敷地の範囲を推定しておきたい。

次に本調査区南側に位置するＥ区の屋敷地との関係である。今年度Ｇ区では14Ｃ後半から16Ｃ末の時間幅をもつものが確認され，その組成も，ほとんどＨ区の屋敷地と差がないものである。今年度は調査範囲の制約があり建物構成の比較はできないが，井戸などの建物等に付随する屋敷地内の構成要素を見ると，両調査区ともに石組み井戸が存在する。

以上の点から，Ｈ区とＧ区で検出された屋敷地は14Ｃ後半から16Ｃ末までの時間幅の中でそれぞれ同時併存した可能性が高い。また，この屋敷地の継続期間は周辺の条里型地割坪界溝との年代とも合致する。

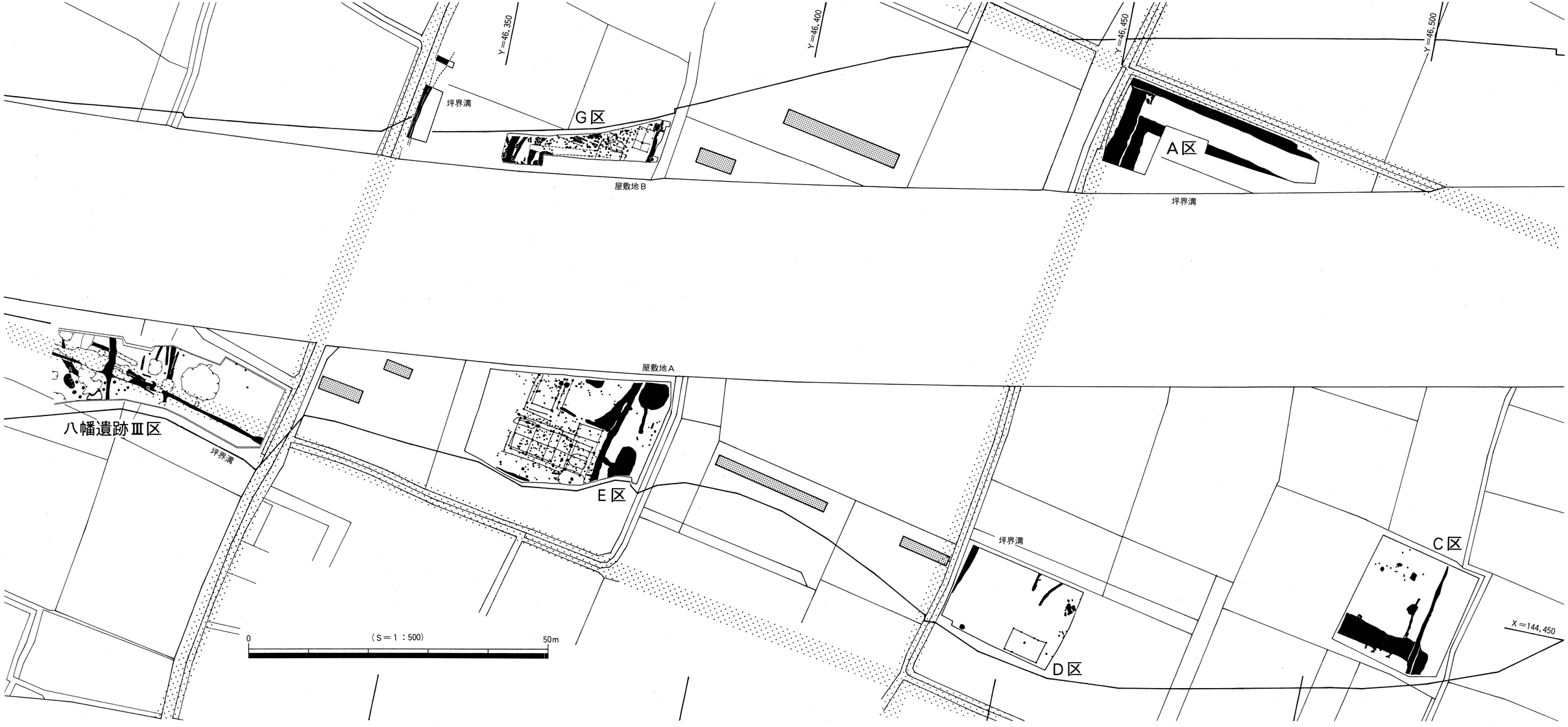
次にこのふたつの屋敷地が存在する坪内の土地利用を考えてみたい。予備調査トレンチ結果が中心となり，中央に国道11線バイパスが存在するなど不明確な部分が多いが，他に同一坪内で掘立柱建物など屋敷の存在を示す遺構は確認されていない。これらからは屋敷地の数は２あるいは３つ程存在していたものと思われる。

来年度は坪内の未着手部分である北東部の調査を実施し，この想定が妥当であるか継続検証していく必要があろう。

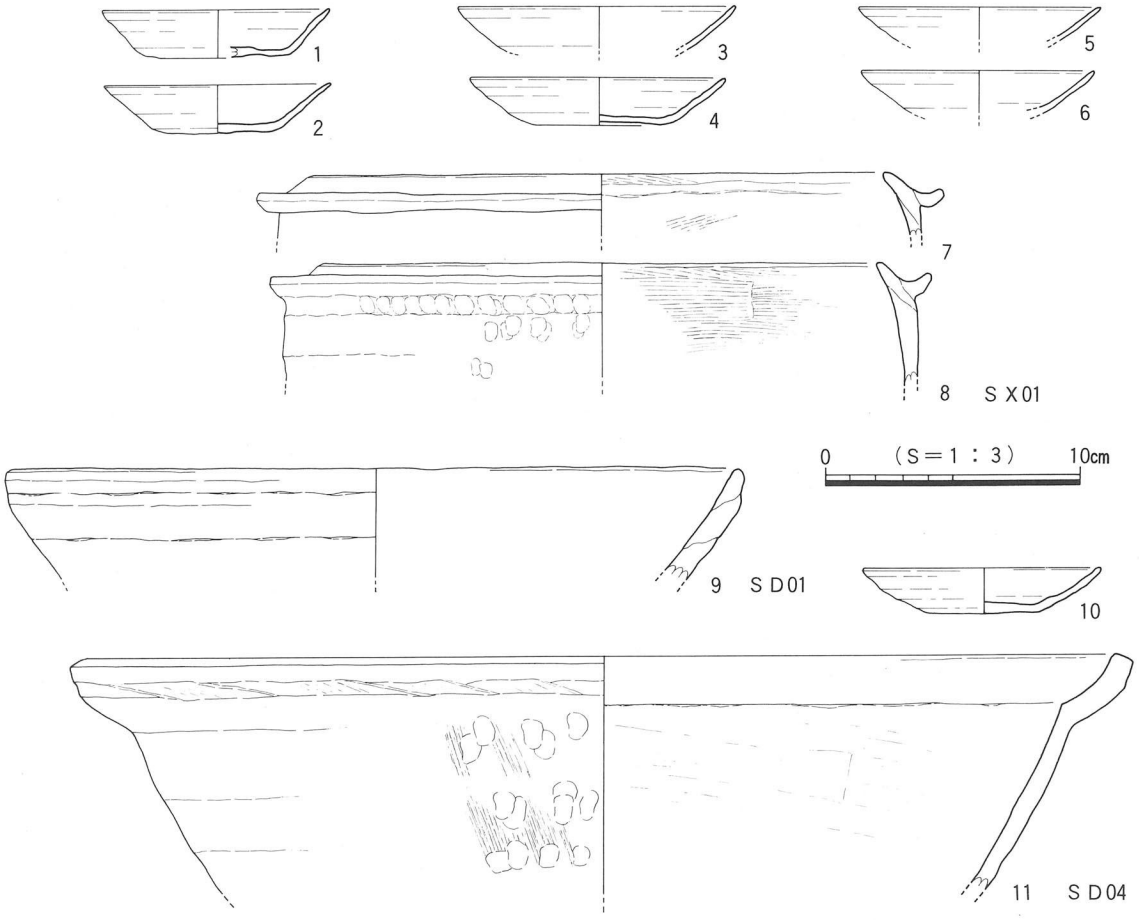


第13図　Ｇ区　平面図

第15図には屋敷地の初期の土器様相を示すと思われる資料を図示した。１～８はＳＸ01出土遺物である。１～６は土師質土器杯である。いずれのものも胴部に回転ナデを施した後，個別に口縁端部外面にナデ調整を行うために，やや丸みをもち内径する口縁部をもつという製作上の癖が確認できる。７・８は土師質土器足釜である。やや張り気味の胴部から内傾する口縁部をもち，ハネアゲ状の鍔部を有する。これらは14c後半代に位置づけられよう。９はＳＤ01出土の瓦質焼成の捏鉢である。口縁部の形態から楠井産と判断されるもので外面に接合痕を明瞭に留める。10・11はＳＤ04出土遺物である。10は土師質土器杯で口縁部の調整にＳＸ01出土のものと同様の癖を見ることができる。11は土師質土器鍋である。口縁部形態から楠井産と考えられる。



第14図　中森遺跡　遺構配置図及びトレンチ配置図



第15図　Ｇ区　ＳＸ01・ＳＤ01・04出土遺物

(3)　Ｈ区の概要

昨年度調査Ｂ区の東側に位置する調査区である。Ｂ区では横長剥片を主体とした３つのブロックからなる合計100点程の石器群を確認している。今年度はその広がりを確認する目的で予備調査及び本調査を実施した。ＡＴ火山ガラス含まれ旧石器包含層である黄灰色シルトの0.2m程堆積を確認したものの石器は横長剥片１点に留まった。また，この黄灰色シルト層下位の扇状地砂礫層をベースとした矮小な窪地を検出した。

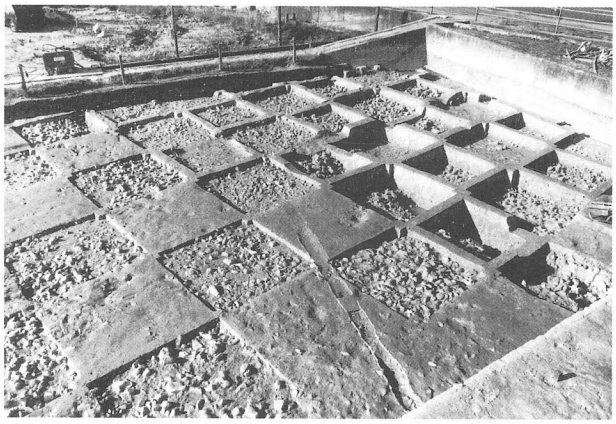


写真15　Ｈ区　全景（南西から）

第16図は昨年度調査Ｂ区と照合した扇状地礫層上面での等高線図である。これを見るとＢ区ブロック１とした付近から北東方向へ傾斜する微地形が読み取れる。最も石器が集中するブロック１は21m前後の最も礫層が隆起する部分から若干北側の縁辺部に位置すると考えられる。今年度の調査では石器ブロックの範囲の確定とその周辺の微地形が復元された点が大きい。

第16図　B・H区　等高線図

前田東・中村遺跡

1．立地と環境

前田東・中村遺跡は，香川県のほぼ中央部にあたる高松平野の東端部，高松市前田東町140番地外に所在する。高松平野の東方に位置する立石山系の山裾部にあたり，三方を低丘陵に囲まれた，西へ向かって緩やかに傾斜する緩扇状地上に広がっている。標高は調査区東端で22.5m，西端で19.8mを測る。

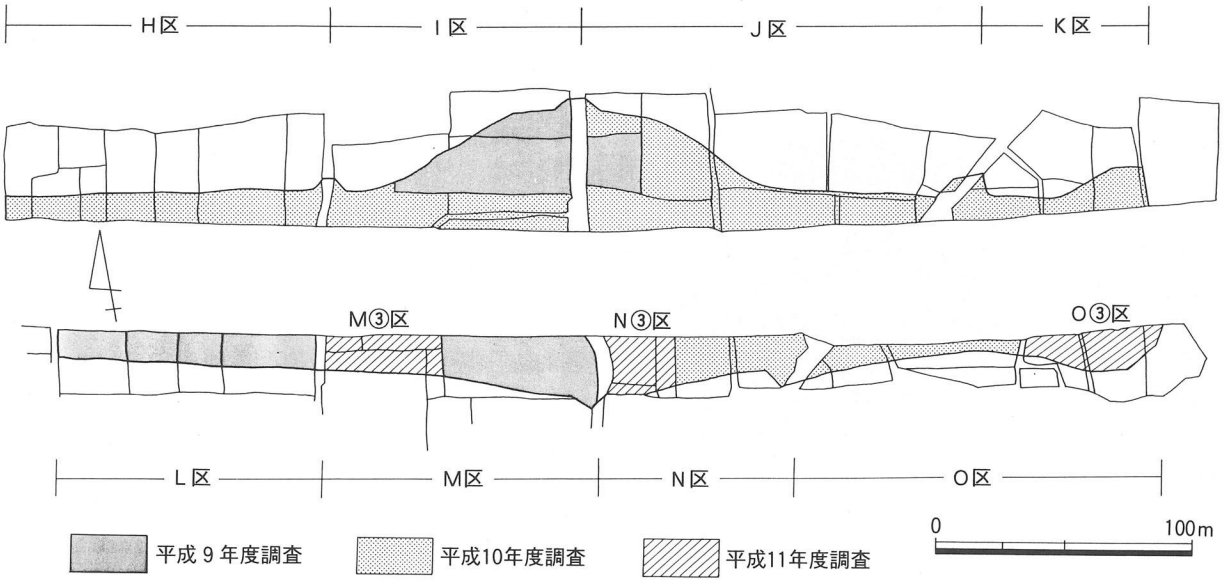
前田東・中村遺跡の近隣の遺跡としては，弥生時代後期の高地性集落である西浦谷遺跡や，弥生時代末から古墳時代初頭にかけての墳墓群である権八原遺跡などが存在している。とりわけ，白鳳期の寺院である宝寿寺跡は，当該地の北方約100mの位置にあり，本遺跡との関連が期待されるところである。

2．調査の成果

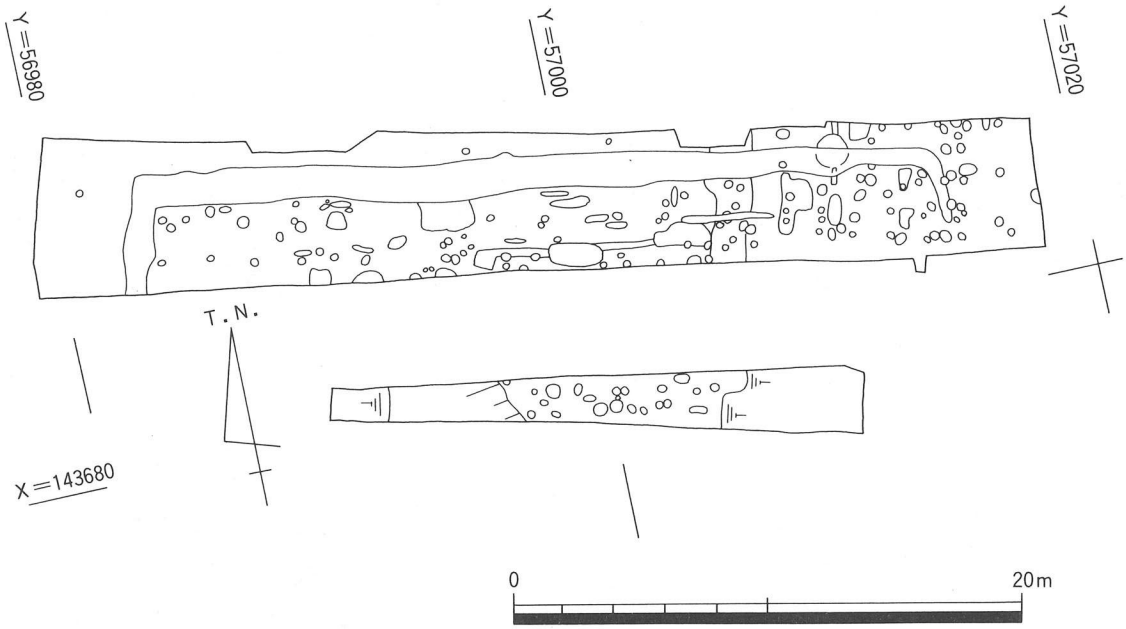
調査対象地は，四国横断自動車道の高松東インターチェンジ部分で，国道11号線高松東道路の南北両側にまたがり，東西に細長く広がっている。調査は平成９年９月から開始し，平成10年度，さらに今年度と足掛け３年にわたって継続して行っている。今年度は調査最終年度にあたり，調査対象面積約13,000㎡のうちの1,900㎡について４月１日から６月30日までの３ヶ月の期間で実施した。調査は直営方式１班体制をとり，調査区割のM③区・N③区・O③区を終了し，前田東・中村遺跡の調査を終えた。

調査区の地形は，尾根上の２つの低丘陵（H・I区西半部，K・O区）とその間の谷状の低地部（I区東半部・J区・N区）となっており，低地部を流れていた旧河道が埋没した後には古代以降の遺構が作られている。低丘陵上では弥生時代・古代から中世・近世の概ね３時期の遺構を確認している。遺構面の数は基本的に低丘陵部で１面，低地部では２面となっている。低地部では下層が弥生時代の遺構面，上層が古代から中世の遺構面であるが，部分的にはさらにその上に近世の遺構面が存在する調査区もある。

以下，それぞれの調査区ごとに概要を述べる。



第17図　調査区区割図（１／3,000）



第18図　M③区遺構配置図（1/300）

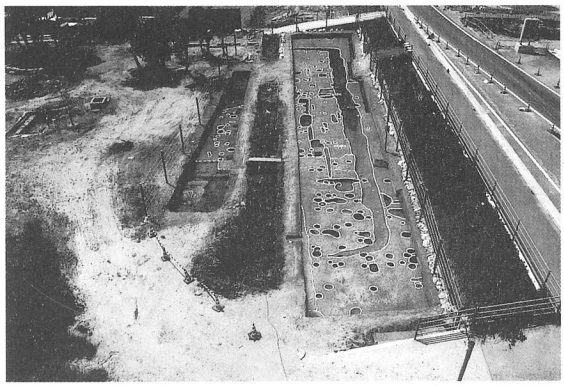


写真16　M③区完掘状況（東から）

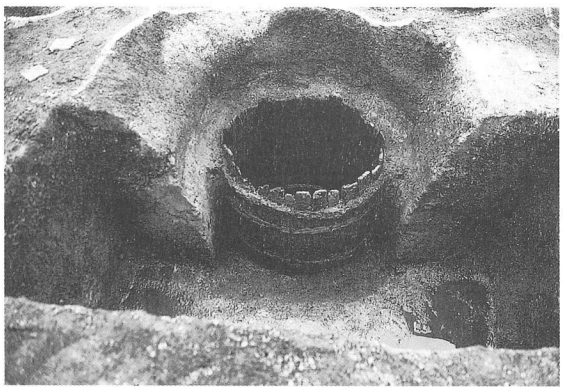


写真17　M③区ＳＥ01全景（東から）

M③区の概要

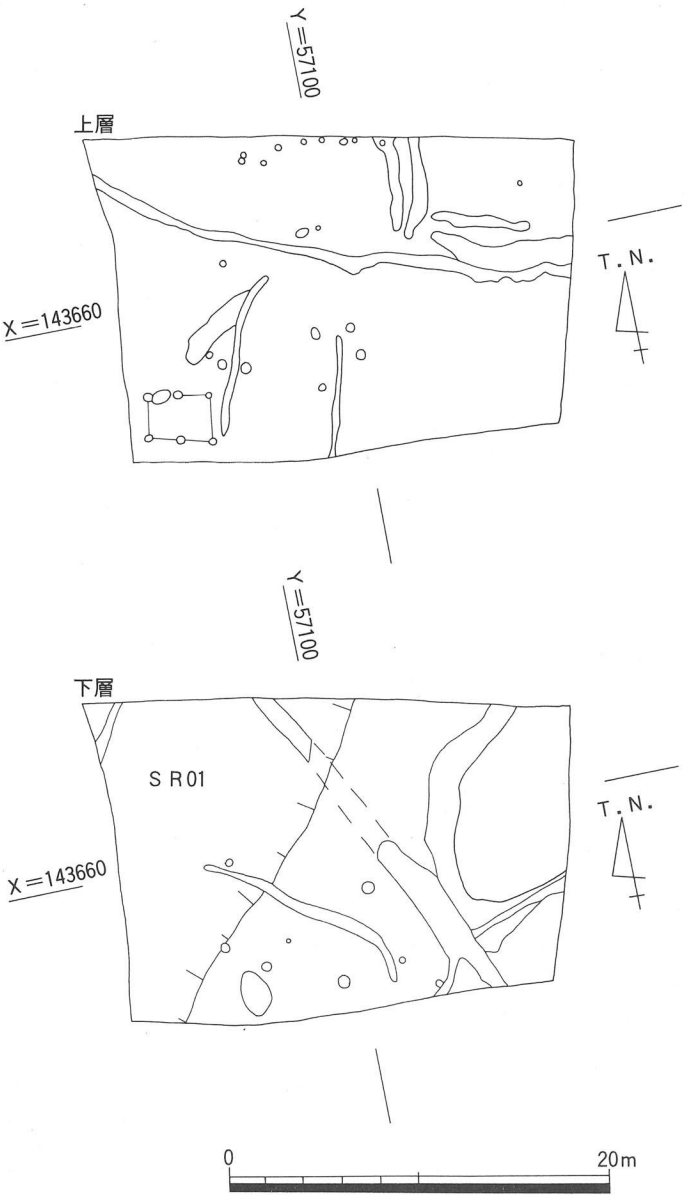
高松東道路の南側やや西よりに位置する調査区で，宅地の地境を兼ねる石積みの水路が造られているため，中央で南北に分断されている。後世の削平がきつく及んでおり，遺構面は１面で弥生時代と古代から中世の２時期の遺構を確認した。北側の調査区では溝状遺構，土坑，井戸，柱穴を検出した。中央に位置する溝状遺構は，周囲の地割と同じ方向を有するコの字形を呈しており，それに囲まれた内部には多数の柱穴が存在している。溝状遺構内からは古代から中世にかけての土器片等が出土しており，中世段階の屋敷地を囲繞する溝状遺構になる可能性が高い。柱穴は多数みられるものの，明確に建物を示すようなものは認められない。この柱穴群は南の調査区にも及んでおり，建物の建て替え等があったことが想像できる。柱穴以外にも土坑や直径80cm，長さ120cmの樽を２段組み合わせた井戸などがあるが，土器細片しか出土しておらず時期比定ができない。弥生時代の遺構はわずかであり，数基の土坑から弥生時代後期の土器片が出土した程度である。南調査区は，後世の攪乱が著しく，西端の落ち込みから弥生時代後期の土器が若干出土した程度である。

N③区の概要

高松東道路の南側でほぼ中央に位置する調査区で，遺構面は２面存在しており，上層は古代から中世，下層は弥生時代のものである。

上層では溝状遺構数条と掘立柱建物１棟，若干の柱穴が見られる。調査区の中央に位置する溝状遺構は，昨年度調査区のN①・②区から連続するものと思われる。古代の須恵器片が少量出土している。緩やかに弧を描いており，周囲の地割方向とずれていく点が昨年度の成果とは異なっている。掘立柱建物は規模も小さく，周囲の柱穴のあり方などから見ても，当該地は集落域であったとは考えにくく，農地等の生産域として土地利用されたものと考えたい。

下層では，溝状遺構数条と土坑，柱穴，自然河川を検出した。溝状遺構の一部は自然河川が埋没した後に掘られたものもみられることから，時間差があったことがうかがえる。自然河川は，N③区北側の高松東道路建設に伴う発掘調査で検出している自然河川と連続するものと考えられる。以前の調査区では縄文時代後期の土器が多数出土しているが，今回の調査区では，縄文時代後期の深鉢の破片数点が出土しただけであった。自然河川の堆積状況の断面観察からは，粒子の粗い砂層が幾重にも分厚く堆積しており，砂層と砂層の間には細砂や粘



第19図　N③区遺構配置図（１/400）

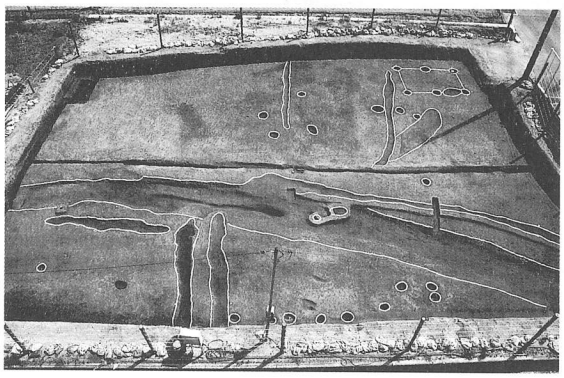


写真18　N③区上層完掘状況（北から）

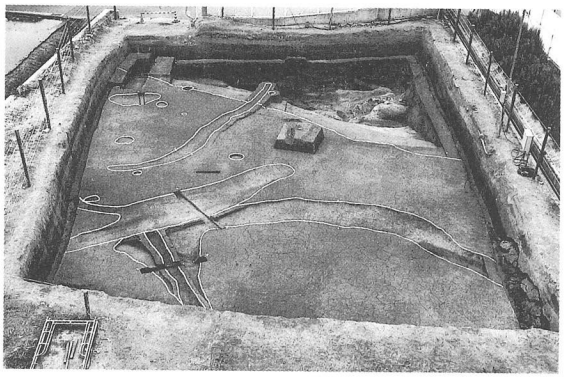
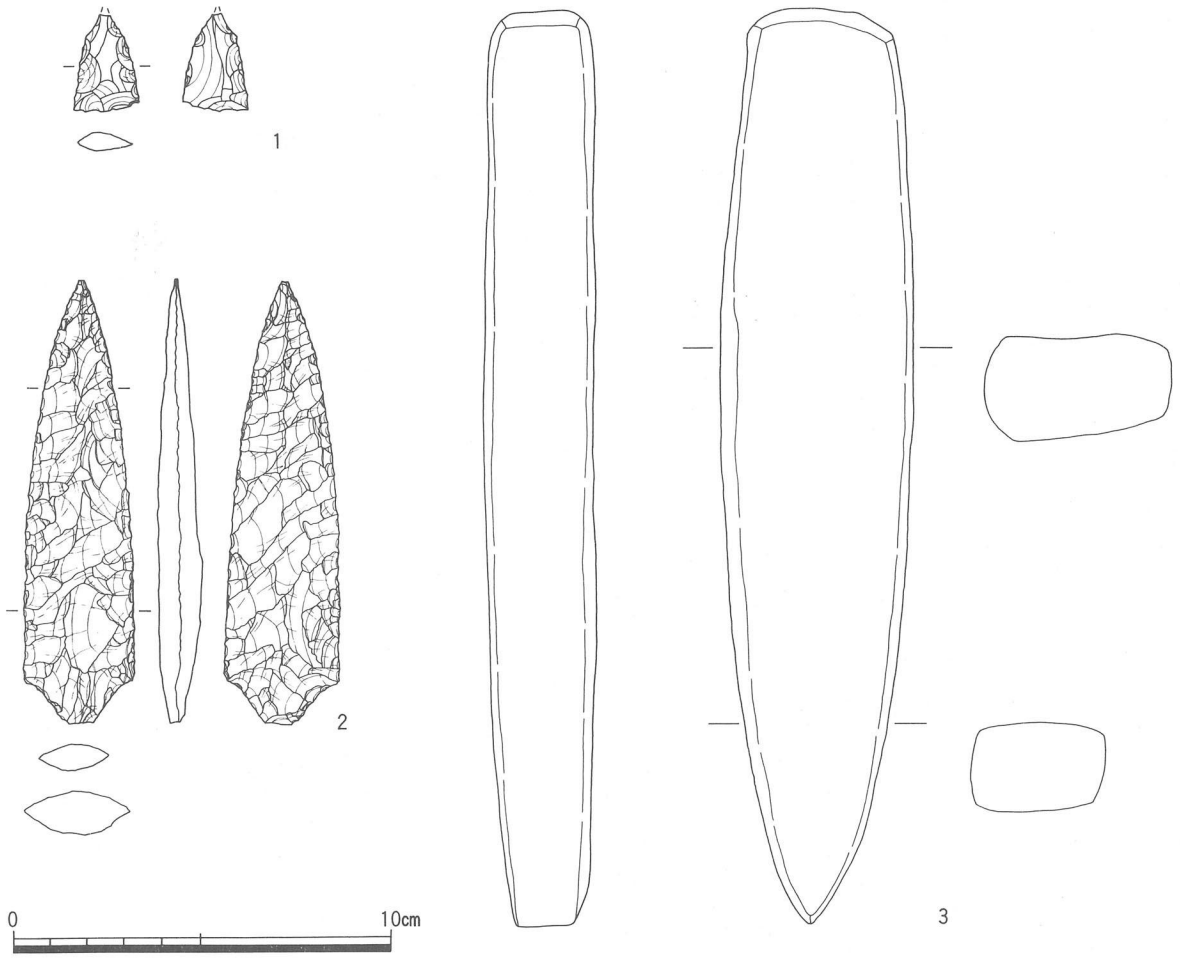


写真19　N③区下層完掘状況（東から）



第20図　N③区ＳＲ01出土遺物実測図（1／2）

土層などはほとんど見られないことから，恒常的に水の流れるものではなく，時折洪水砂のような激しい流水が繰り返されたものと考えられる。砂層の下位からは少量の縄文時代後期の土器が，中位から上位では弥生時代中期末から後期の土器が出土しているが，必ずしも層位と時代が対応しているわけではないようである。土器以外では図示した石器が自然河川から出土している。1の石鏃と2の有舌尖頭器はサヌカイト製，3の柱状片刃石斧は結晶片岩製である。

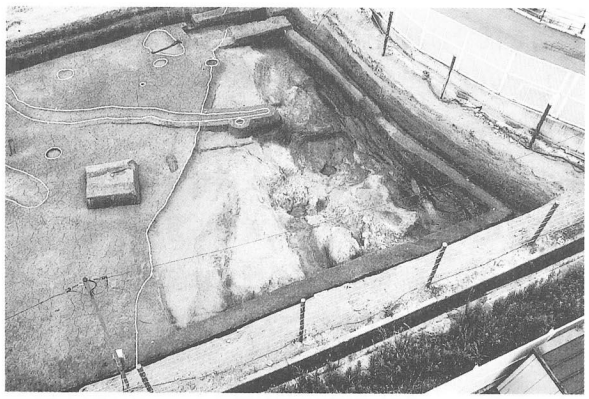
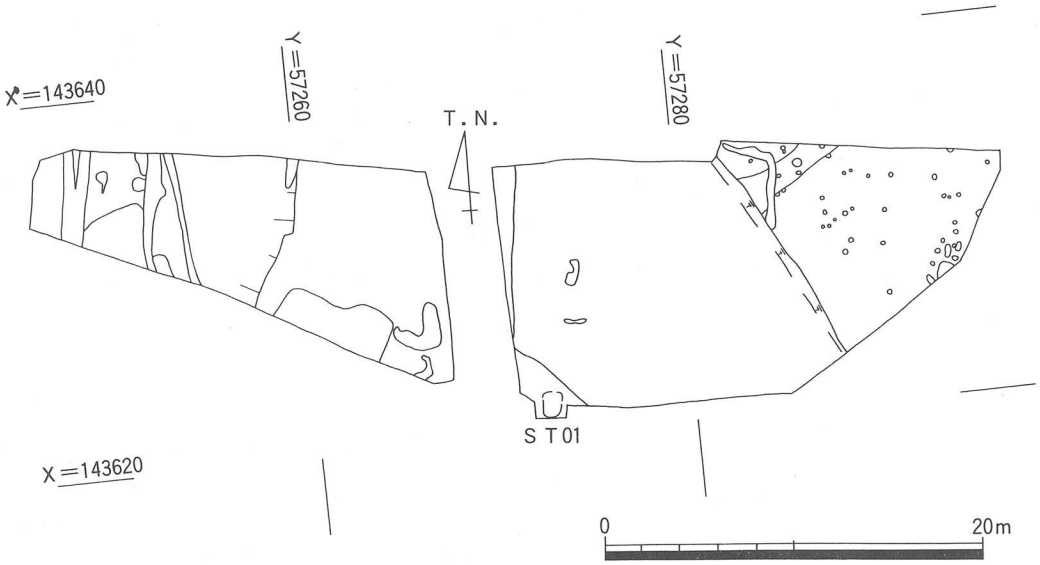


写真20　N③区ＳＲ01完掘状況（北から）

O③区の概要

遅れていた用地買収が一転して急に調査する事になった，東端の調査区である。低丘陵上にあたっているため階段状に削平を受けており，遺構の遺存状態はきわめて悪い。遺構面は1枚で，耕作土直下に安定した地山である黄色系粘土層が見られる。東端で溝状遺構と柱穴群，中央付近で土壙墓1基，西端で溝状遺構数条を検出した。出土した遺物は細片が多く時期の比定が困難であるが，ほとんど古代から



第21図　O③区遺構配置図（1/400）

中世にかけてのものと考えられる。土壙墓は1.0×0.8m以上の長方形で，大腿骨等が遺存していたが総じて残りが悪い。土器はないが刀子ないし小刀と見られる鉄製品が1点出土している。木棺の痕跡なども認められない。土壙墓の下位に存在する包含層のは古代の遺物しか見られないことから，この土壙墓は中世頃のものと推測される。

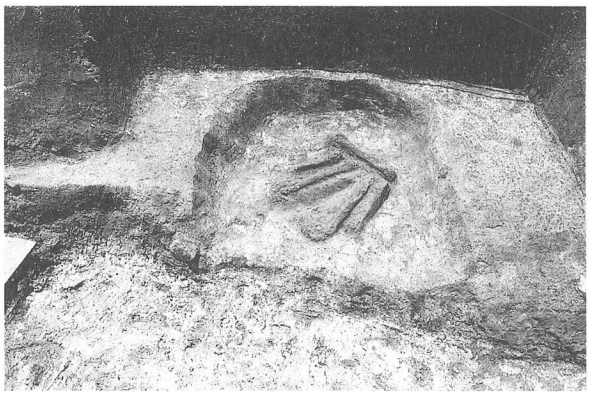


写真21　O③区土壙墓完掘状況（北から）

3．まとめ

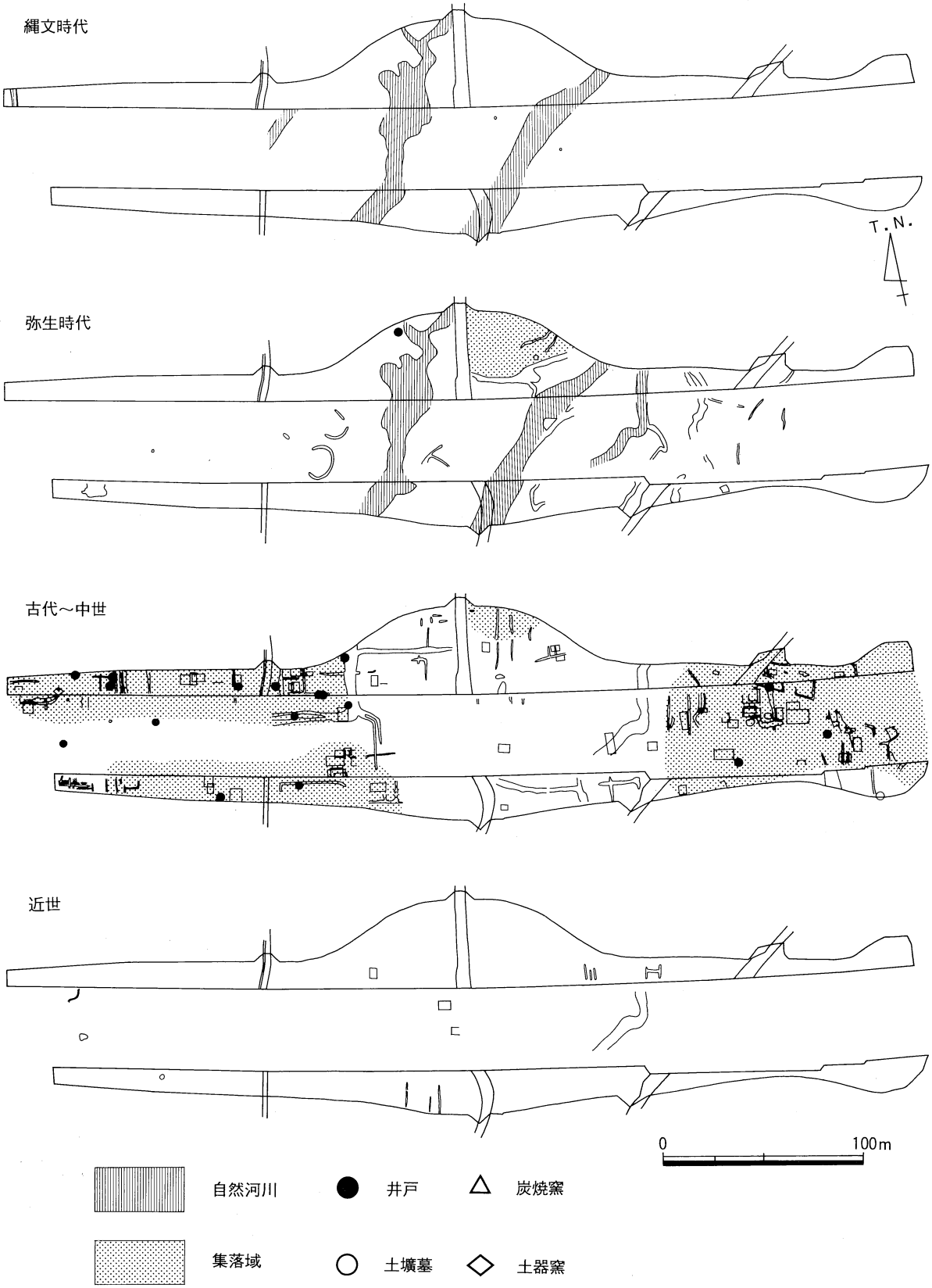
最後に前田東・中村遺跡の大まかな時代の変遷を考えてみたい。

縄文時代：遺跡中央の低地部を南に流下する2本の自然河川が存在している。土坑などの若干の遺構が認められるが，居住域を示すような遺構・遺物は認められない。

弥生時代（中期から後期）：2本の自然河川は埋積しながらも依然として機能している。東の低丘陵裾部に溝状遺構が作られ，西の低丘陵上では円形に巡る溝状遺構が見られる。これを竪穴住居の周溝と見なす事もできるが確証はなく，J区やO区の竪穴住居も確実なものとは言えず，当該期の居住域に関しても確認できない状況である。

古代から中世：前田東・中村遺跡の最盛期である。中央の自然河川は埋没し，低地部にも遺構が展開を見せ始める。とはいうものの，この部分はおそらく生産域として土地利用されたと思われ，居住域は東西の低丘陵上に広がっている。現在も周辺に残る条里地割に沿う溝状遺構も見られる。それぞれの居住域ではおびただしい柱穴が認められ，さらに詳細な集落内部における建物の変遷が可能であろう。東の居住域には炭焼き窯も認められる。

近世：中央付近に農作業小屋的な小規模な掘立柱建物が数棟見られる程度になり，ほぼ全体が農地として使われたものと考えられる。



第22図　遺構変遷図（1/3,000）

三殿出口遺跡

1．立地と環境

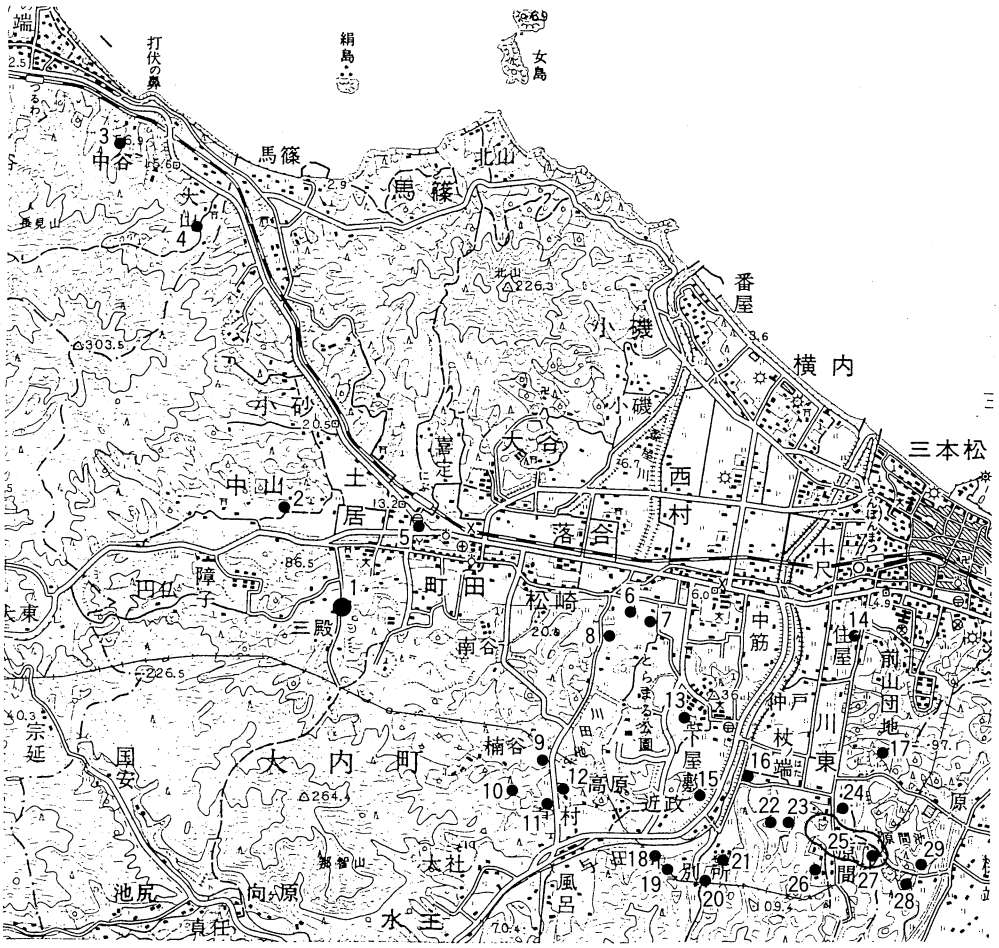
三殿出口遺跡は，大内町西部にある国安山と那智山に挟まれた谷部を北流する石風呂川の西岸に位置している。標高は20～25mで，扇状地形のほぼ扇頂部に近く，調査の結果度重なる洪水による多くの土石流砂を確認した。

地名の由来は，幕政時代，三殿地区に三人の殿様（地主）がいたことからつけられ，旧屋敷地に比定される跡地も残っているが，いずれも当遺跡よりは谷奥部に当たる。

周辺の遺跡は，大内町西部に限ってみると，ＪＲ丹生駅南50mの地点に土居遺跡があり，地表下３ｍより土器片が多数発見されている。縄文時代晩期の土器片・弥生時代後期の完形の甕をはじめ，中世の土師器・土釜の脚が出土しており，かなりの時期幅がある遺跡である。

土居遺跡の西方500mに坪井遺跡がある。遺構は掘立柱建物７棟をはじめ，溝，柱穴等が確認されており，掘立柱建物の柱穴から出土した須恵器杯蓋から８世紀頃の遺構と考えられている。溝や自然流路からも同じ頃の須恵器や土師器皿が見つかっており，建物と溝は何らかの関係をもっていたと想定できる。

下図の遺跡分布図で見ると，大内町西部の遺跡の密度は薄い。しかし，遺物の散布が確認されていることから，今後大内町西部においても新たな遺跡が増えてくる可能性が指摘できる。



1　三殿出口遺跡
2　坪井遺跡
3　中谷遺跡
4　大山遺跡
5　土居遺跡
6　清塚遺跡
7　西村遺跡
8　落合遺跡
9　楠谷遺跡
10　楠谷古墳
11　仲善寺遺跡
12　北山遺跡
13　与田寺山古墳
14　住屋遺跡
15　金毘羅山遺跡
16　杖の端遺跡
17　大日山古墳
18　笠塚遺跡
19　城の内遺跡
20　別所古墳
21　別所池田遺跡
22　杖の端遺跡
23　西谷遺跡
24　県道原間遺跡
25　横断道原間遺跡
26　原間１号墳
27　原間２号墳
28　神越古墳
29　神越桃山古墳

第23図　遺跡の位置及び周辺の遺跡（１/50,000）

2．調査の成果

調査対象地は，大内町三殿701－2番地外の四国横断自動車道建設予定地で，6,370㎡の面積を調査した。調査前の地目は，水田，宅地，雑種地などである。

地形的には南から北に緩やかに傾斜する扇状地で，調査区の中央を町道三殿中央線が走っており，町道より西側をⅠ区，東側の北半分をⅡ区，南半分をⅢ区とした。町道付近を頂部とし，それぞれⅠ区は西側，Ⅱ区・Ⅲ区は東側に微妙に傾斜している。

(1) 調査区概要

Ⅰ－①②③④区

Ⅰ区で検出した遺構は，溝状遺構，井戸，柱穴，土坑，火葬墓である。遺物は中世のものと思われる土師器の杯が出土しているほか，溝状遺構を中心に近世の遺物が出土した。また下層の弥生土器包含層からも少量の摩滅した弥生土器が出土している。地形的には南から北に向かって傾斜し，微妙に西側に傾斜している。土層序的には調査区全面に土石流砂の厚い堆積土が確認でき，Ⅰ－④区ではその上面に中世の遺構面を部分的に確認した。Ⅰ－③区は地下げされており，中世の遺構はⅠ－④区より北部には続いていないことを確認した。この調査区では主として近世の遺構を検出した。また，Ⅰ－①区と②区の北は，土石流砂の堆積上に安定した面がなく，トレンチ調査による下層確認調査のみとし，全面調査はしなかった。

Ⅱ－①②③④区

地形的には大きく南から北に向かって傾斜している。調査区の東半分で石風呂川の旧流路を検出し，それ以外では溝状遺構，井戸，柱穴，土坑，砂糖竈を検出している。遺物は，石鏃，弥生土器片，中世土器片，近世土器片が出土している。また井戸からは近世の伊万里焼碗が出土している。

また，Ⅱ－①北区は，土石流砂の厚い堆積に覆われていることから，トレンチ調査のみとし，③区東は，全面が旧石風呂川の流路と判断したため，トレンチ調査も行わず終了した。

Ⅲ－①②③区

地形的には南から北に向かって傾斜している。Ⅱ区と同様に東半分が石風呂川の旧流路の影響を受けて，遺構の残りが悪い。検出した遺構は，ピット，土坑，掘立柱建物，砂糖竈である。出土遺物は少なく，中世土器片・近世土器片がほとんどである。

Ⅲ－①区は，北側と南側は全面調査したが，北側は遺構無し，南側は部分的に残っていた。中央部はトレンチ調査のみとしたが，遺構，遺物ともに検出できなかった。Ⅲ－③区もトレンチ調査した結果，洪水砂礫に覆われており，遺構は検出できなかった。

(2) 弥生時代

Ⅱ－②北区の旧石風呂川流域際で弥生土器の集中している土坑状の溜まりがあった。高杯の脚部や鉢など10点程見つかっている。当初，土坑として調査していたが，明瞭な掘形は見られず，土坑とまでは断定できなかった。その他にも弥生土器の集中した箇所が見られたが，それらは旧石風呂川により深くえぐられた箇所であったり，弥生土器自体が細片であり，摩滅していることから，これらはいずれも流

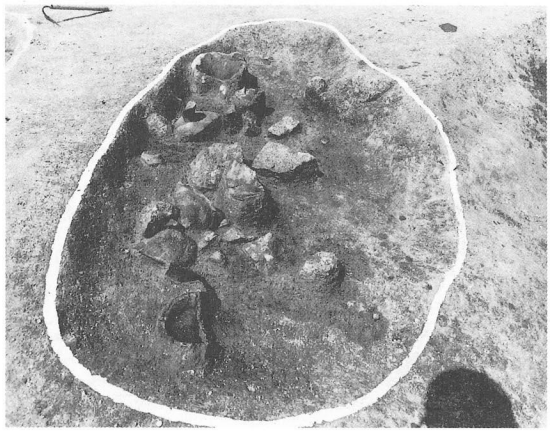
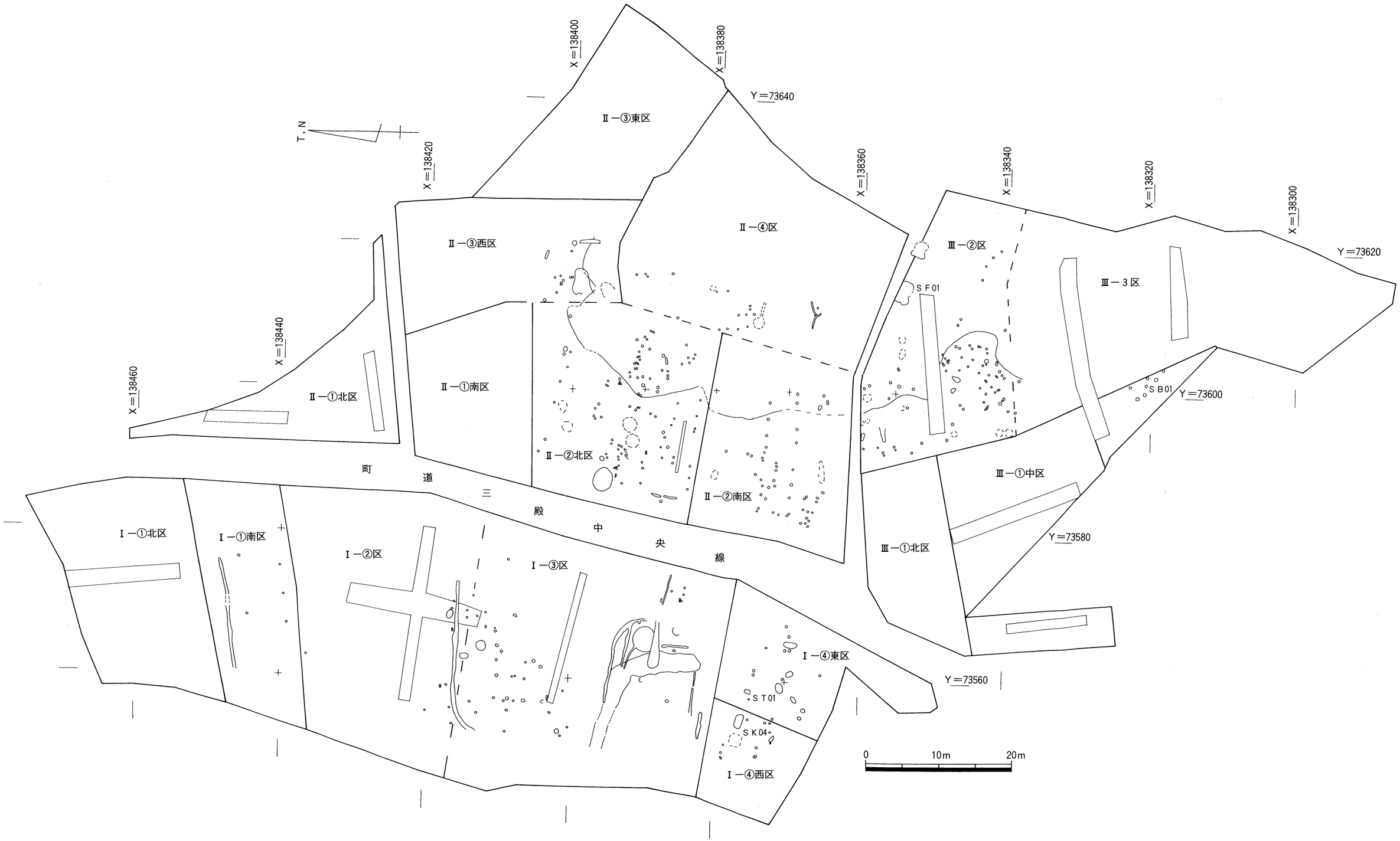


写真22　Ⅱ－②北区　弥生土器検出状況（南から）



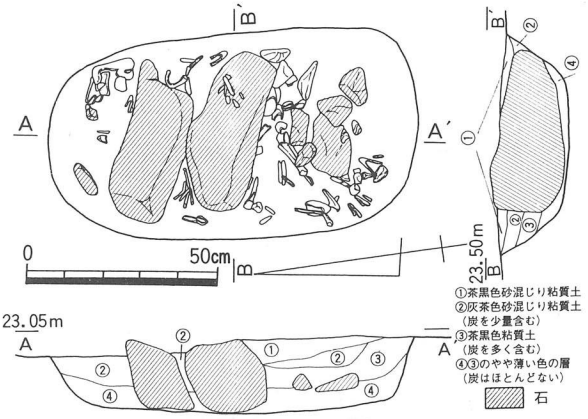
第24図　調査区割図及び遺構配置図（1/500）

入によるものと考えられる。以上のように三殿出口遺跡では，弥生土器の流入による散布は見られるものの，弥生時代の遺構は検出できなかった。

(3) 中世

ＳＴ01　Ⅰ－④東区で検出した火葬墓である。平面形態は南北方向に長軸，東西方向に短軸を持つ楕円形を呈している。現存での規模は長軸約100cm，短軸約55cm，深さ約20cmを測る。中央部やや北寄りに上面を中心に被熱痕をとどめる花崗岩礫が２石配されていた。土層を観察した結果，中層から上層にかけて焼け落ちた人骨が見られる事，石の下に骨片が無い事，2石の花崗岩礫は概ね現位置をとどめている事，炭層及び石の裏側に繊維状の炭化物が付着していた状況等を確認した。以上のことからこれらの石は棺台として使用し，土坑内で火葬にした可能性が高いことが解る。

帰属時期については２石間から出土した土師器の杯より中世のものと考えられる。



第25図　Ⅰ－④東区　ＳＴ01平・断面図

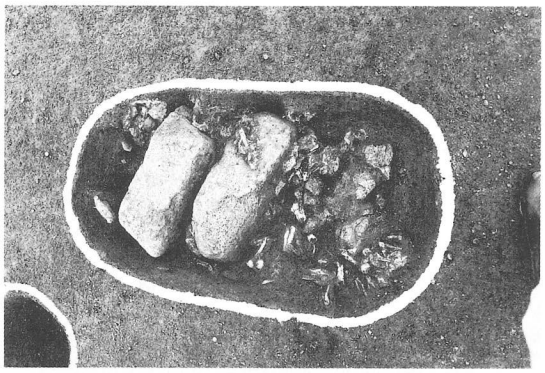
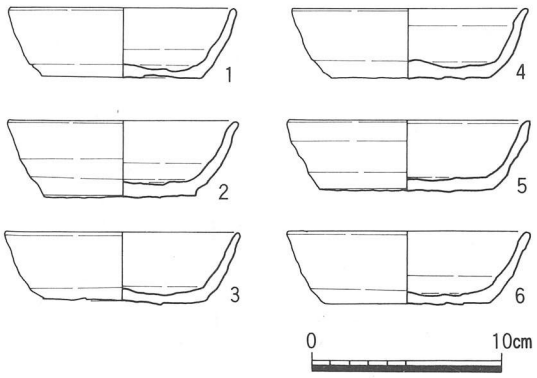


写真23　Ⅰ－④東区　ＳＴ01（西から）

ＳＫ04　Ⅰ－④西区で検出した土坑である。平面形態は楕円形で，現存規模は長軸約190cm，短軸約105cm，深さは約18～20cmを測る。土坑の主軸の方向は，Ｎ－70°－Ｗである。この土坑で特筆されるのは，上面に重ねられる形で径10～12cmのやや肉厚の土師器杯が６枚見つかっていることである。地鎮祭祀に使用されていたものであろうか。

１～６は土師器杯である。ほぼ同形態・同法量で，底部へら切り調整・体部横なで調整なども同じであり，時期は中世と考える。



第26図　Ⅰ－④西区　ＳＫ04出土遺物実測図

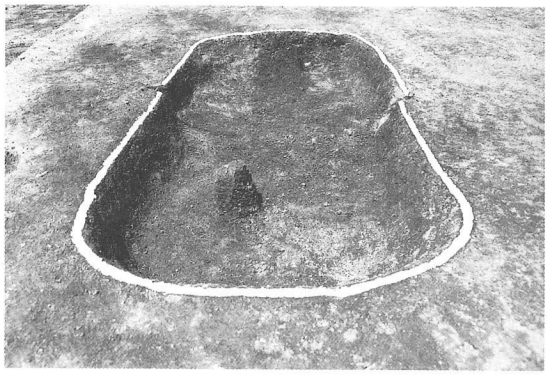
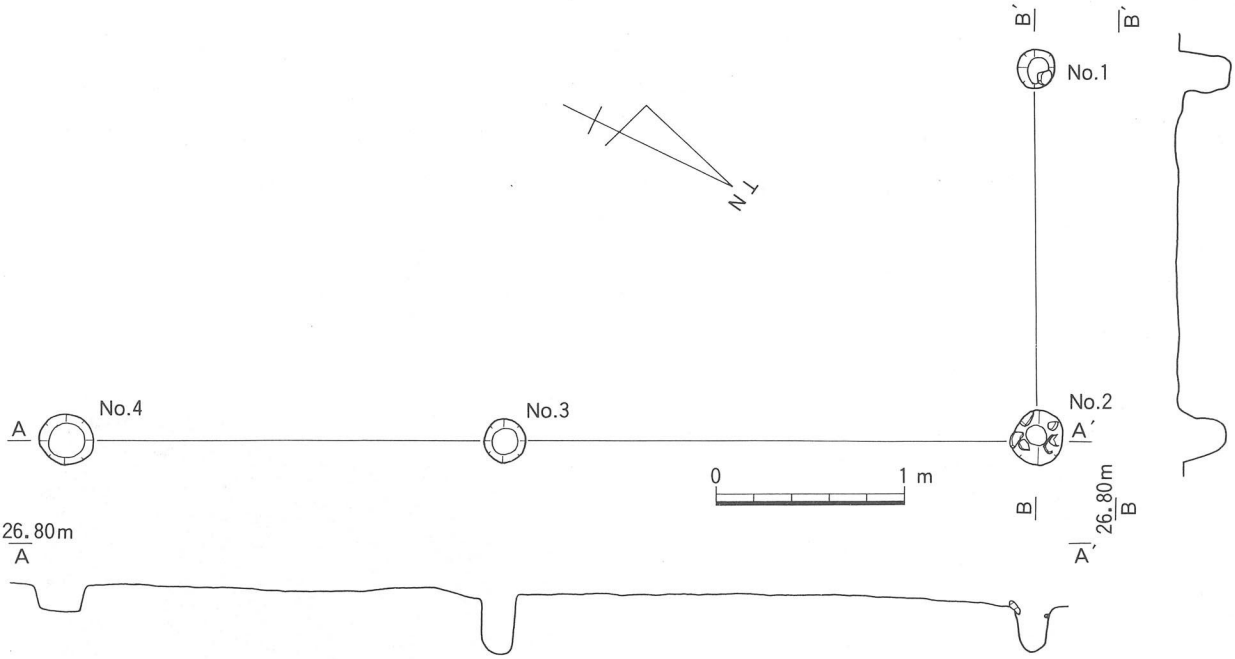


写真24　Ⅰ－④西区　ＳＫ04（西から）

ＳＢ01　Ⅲ－①南区で検出した掘立柱建物である。西側が調査区外にでるため全体の規模は不明である

が２間（3.8m）×３間（5.4m）の規模を持つと想定できる。主軸方向はN－25°－Wを測る。柱穴掘形の平面形態は円形を呈し，直径25～30cmを測る。柱穴の深さはNo４のみ10cm程度であるが，ほかは一様に20～25cmである。柱穴出土遺物より，中世の掘立柱建物である。



第27図　Ⅲ－①南区　ＳＢ01　平・断面図

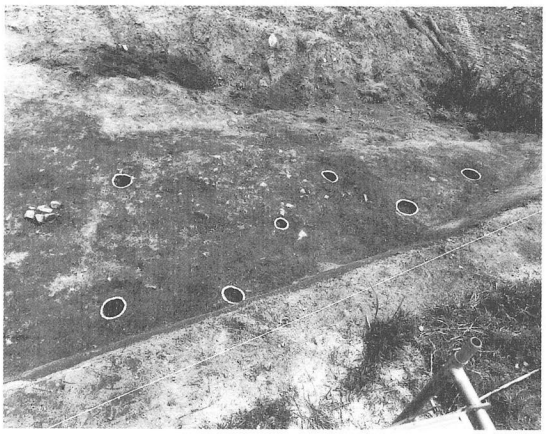


写真25　Ⅲ－①南区　ＳＢ01（西から）

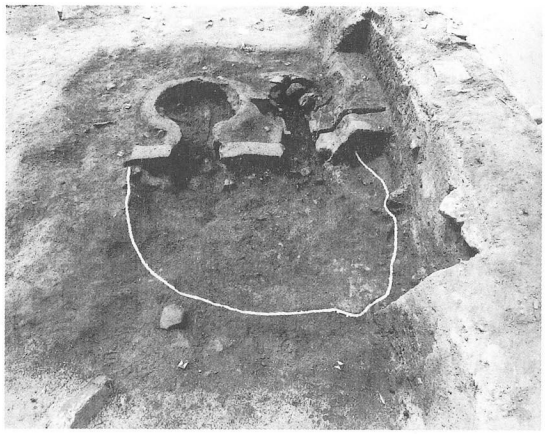
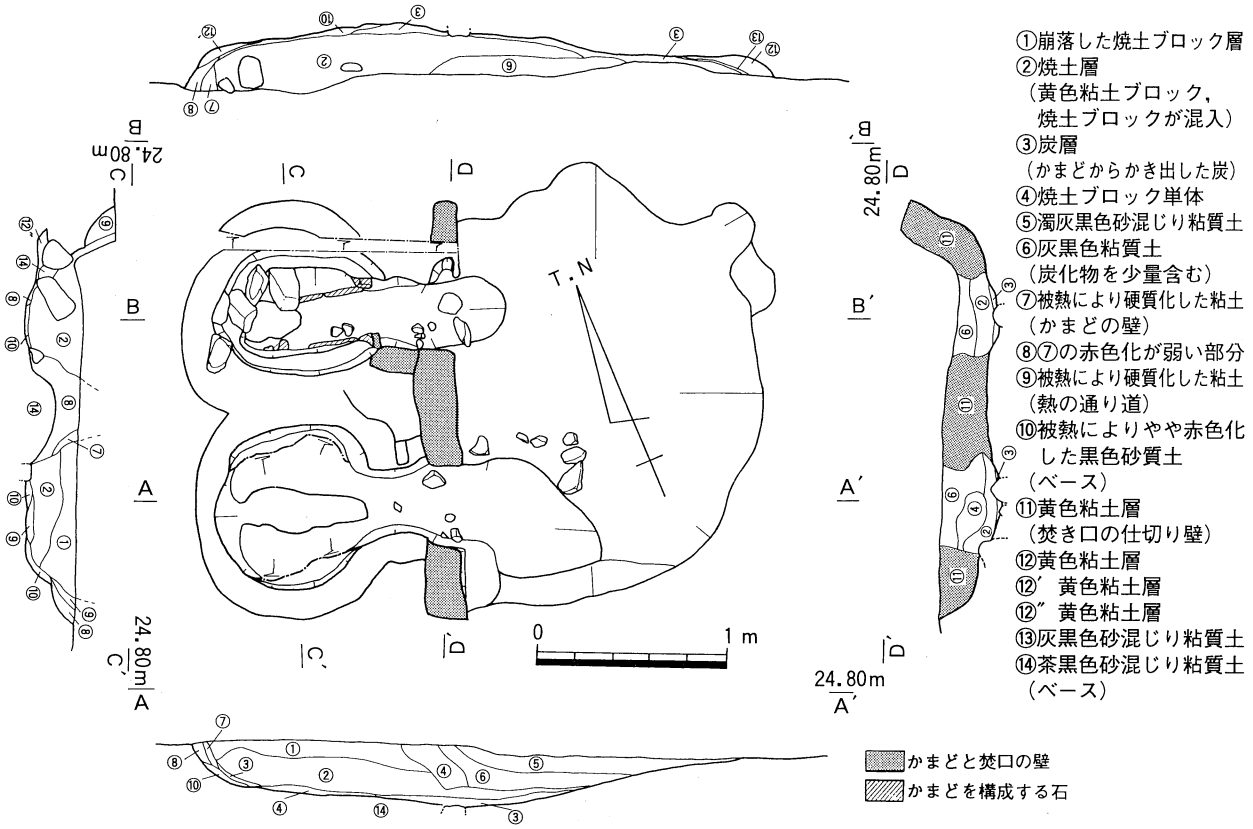


写真26　Ⅲ－②区　ＳＦ01（東から）

(4)　近世

ＳＦ01　Ⅲ－②区北側で検出した砂糖製造用の竈である。竈は二連式で，ベース面を掘り込み，粘土をつき固めて半地下式につくられていた。二つの竈の内，残りの良い南側のもので，平面形が，現存長で内径約40cmの円形であった。また，北側の竈の下部には，ロストルに使われた方柱状の角礫が，幅約20cmで直列に並べられていた。一方，焚き口は，竈本体の東側に二つ設けられており，竈との間は黄色粘土をもって仕切りとしていた。なお，焚き口から後方には，掻き出した炭が一面に広がっていた。

砂糖づくりは，幕末から昭和初期にかけて旧大内郡で盛んに行われた伝統産業であり，文献資料及び聞き取り調査から，この竈はさとうきびの搾汁を煮詰めて黒砂糖（白下糖）をつくるためのもので，煮詰める工程を二段階に分けて行うため，二連式となっていることがわかった。



第28図　Ⅲ－②区　ＳＦ01　平・断面図

3．まとめ

当遺跡では，中世及び近世の遺構面を検出した。以下，特筆される遺構について述べてみる。

まず，中世の遺構では，Ⅰ－④区で検出したＳＴ01（火葬墓）が挙げられる。土葬が主である時代にあって，火葬そのものが珍しいことから，県内で発掘された例は少なく，旧大内郡では，初めてのこととなった。また，ＳＫ04から出土した土師器については，現状で詳細な時期決定がなされておらず，周辺の遺跡で出土した中世の土師器を含めて，編年等の検討をする余地があり，今後の課題といえよう。但し，中世の遺構面については，遺跡全体に広がる訳ではなく，Ⅰ－④区などで部分的に検出するにとどまった。その事は，当遺跡が地形的に不安定な所に営まれ，遺跡の東側を流れる石風呂川の度重なる氾濫による洪水砂の堆積が，広範囲でみられたこと，Ⅰ－③区では地下げがなされていたことからもうかがい知れる。

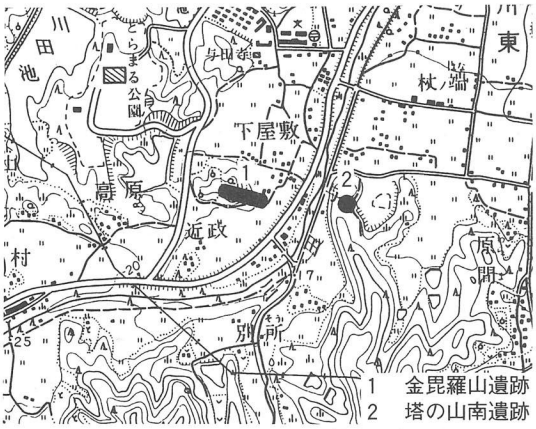
一方，近世以降，石風呂川の流れも安定したと思われ，Ⅱ区，Ⅲ区では石風呂川の洪水砂上で，当該期の遺構面を確認した。中でもⅢ－②区で検出したＳＦ01は砂糖製造用の竈で，幕末以降，伝統産業として盛んに行われた砂糖（白下糖）づくりが，この辺りで営まれていたことを証明するものとなった。これまで文献等でしか知ることのなかった砂糖づくりについて，発掘調査より得た好資料である。

以上，三殿出口遺跡では，特徴的な遺構を確認した。しかし，全体的に遺構は希薄であり，調査前に想定していた弥生時代の遺構については，後期の遺物を採取するにとどまり，明確な遺構は確認されなかった。恐らく，南部山側の斜面地に弥生時代の集落が営まれていたものと思われる。

金毘羅山遺跡

1．立地と環境

金毘羅山遺跡は大川郡大内町水主下屋敷に所在し，大内平野を流れる与田川とその支流である別所川との合流点から北西方向約200mの地点にある独立丘陵，金毘羅山（標高約42.5m）の南東部丘陵上及び東山裾部に位置する。大内町史によると，当遺跡付近の与田川周辺部の微高地上からは，弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が広範囲に分布しており，そのことは，昭和58年に実施された圃場整備事業に伴い確認されている。さらに，当遺跡の南東側には，与田川方向に眺望のきく尾根上に塔の山南遺跡が位置し，ここからは，前年度の調査で弥生時代後期以降の所産と思われる箱式石棺墓・石蓋土壙墓等を検出している。



第29図　遺跡位置図（1：25,000）

2．調査成果

(1)　概要

本年度は昨年度からの継続調査である。調査区は金毘羅山の南東部丘陵上及び東山裾部からなり，前年度調査した東山裾部からは，弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡，中世（13世紀後半～14世紀）の掘立柱建物跡などを検出している。本年度の調査は，丘陵部の約1300㎡で，一部前年度調査した東斜面部より土器棺墓１基（弥生時代後期），また，先行して予備調査を実施した結果，２トレンチより土器棺墓２基（弥生時代後期）を検出している。このことから，さらに数基の土器棺墓が検出されるものと予想している。一方，１トレンチ・２トレンチより検出した中世の不明遺構（銭貨：宋銭出土）については，埋土に多量の小形円礫を含んでいる。一方３トレンチからは，時期不明の溝１条と花崗岩礫（30～50㎝程度）を2.0m×1.5m程度の石室状に配した墓を検出している。

これらはいずれも現在精査中につき，詳細な時期，遺構の性格，さらに新たに検出する遺構等の報告は今後にゆずることにする。なお，周知の金毘羅山古墳については，それに関わる遺構遺物が皆無で，現状でその存在は確認できない。

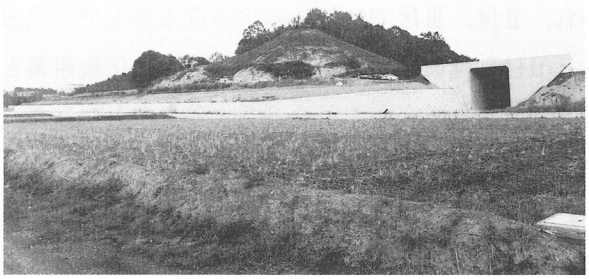


写真27　南東部丘陵調査前状況　遠景（南東から）

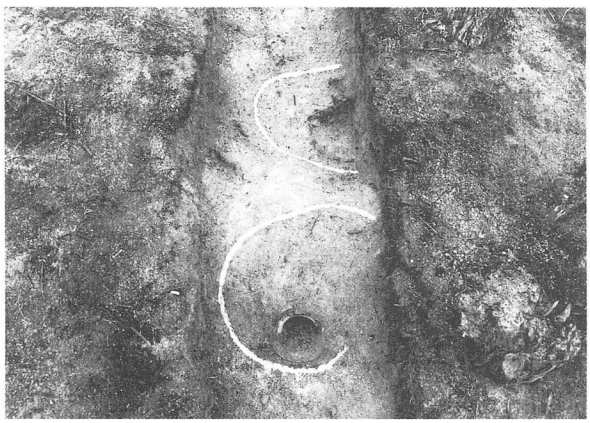
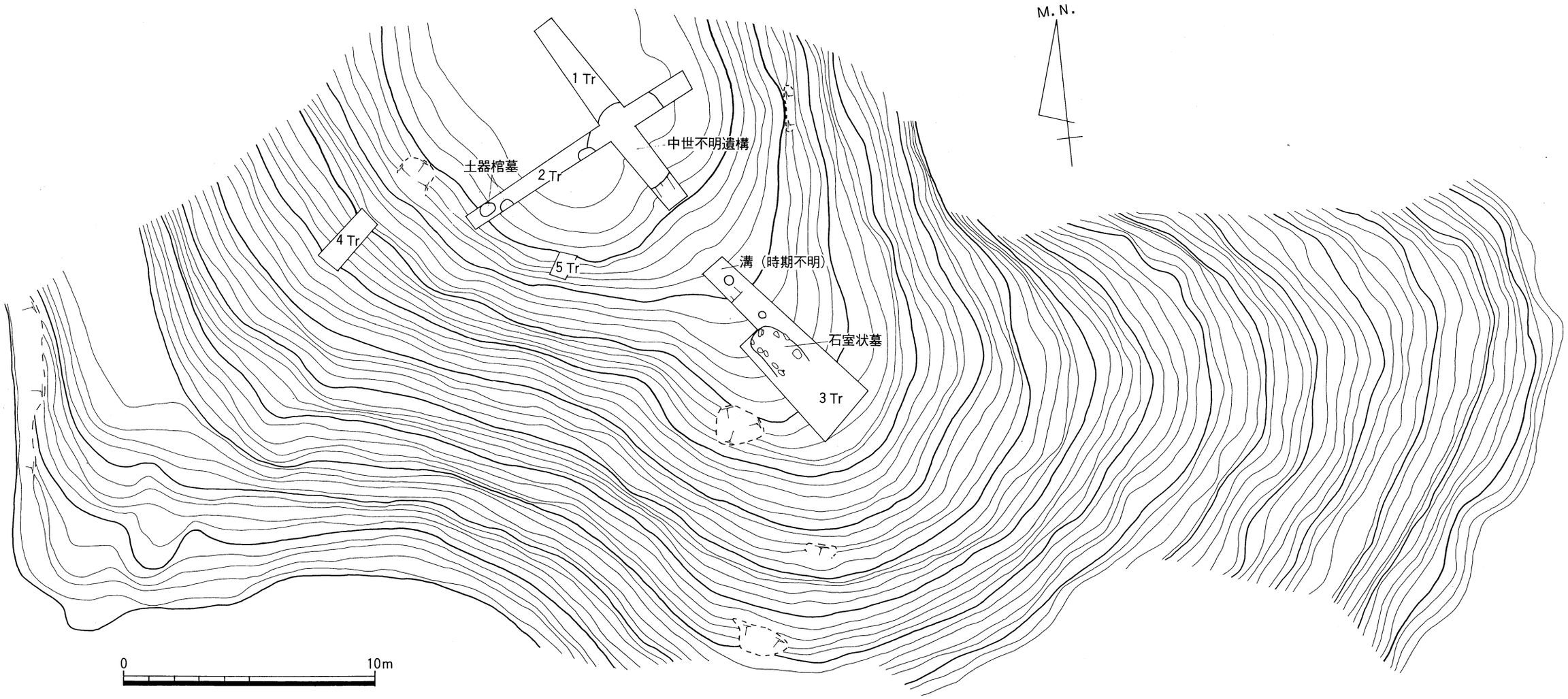


写真28　２トレンチ内土器棺墓検出状況（南西から）

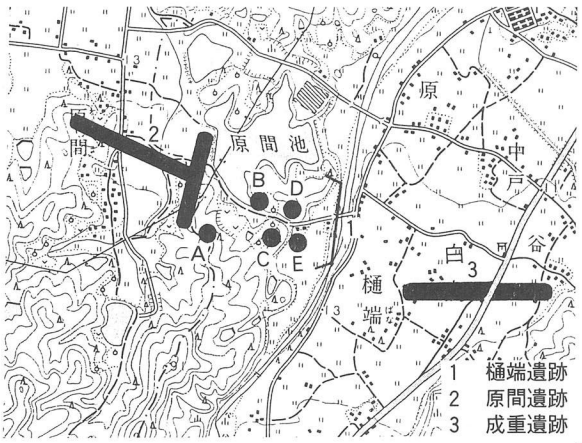


第30図　金毘羅山遺跡丘陵部地形測量図

樋　端　遺　跡

1．立地と環境

樋端遺跡は，大川郡白鳥町白鳥西藤井・同寺前に所在し，地形的には大内町の虎丸山から北東方向に延びる低丘陵上（標高約28～35m）に立地している。調査区の東側には，湊川がつくりだした沖積平野を望み，西側には，古川の堆積地が広がっている。本遺跡は昨年度からの継続調査であり，その結果，弥生時代及び古墳時代の遺跡であることが判明している。



第31図　　遺跡位置図（1：25,000）

周辺の遺跡としては，東方に湊川の沖積平野上に営まれた弥生時代中期の集石墓等の墳墓を中心とする成重遺跡が所在し，西方には平野部で弥生時代後期から古代にかけての集落跡，また丘陵上では古墳時代中期から後期にかけての古墳９基が確認された原間遺跡が隣接している。さらに，原間池を挟んで北側には，秋葉山から西方に延びる尾根上に古墳時代前期の大日山古墳（前方後円墳）が所在する。この辺りは，南海道の推定ルートの一つとしても挙げられており，湊川にかかっている「神越橋」という名称にも，それを想起させるものがある。

2．調査成果

(1)　概要

本年度は昨年度からの継続調査であり，昨年度はＡ区，Ｃ区北半分，Ｄ区で本調査を実施した。その結果，弥生時代後期の竪穴住居１棟（Ｃ区），土器棺墓18基（Ｃ区15基，Ｄ区３基），古墳時代後期の樋端２号墳（Ａ区，７世紀前半），神越２号墳（Ｄ区，６世紀末～７世紀初）などを検出した。なお，Ｂ区及びＥ区東半分はトレンチ調査をもって終了している。

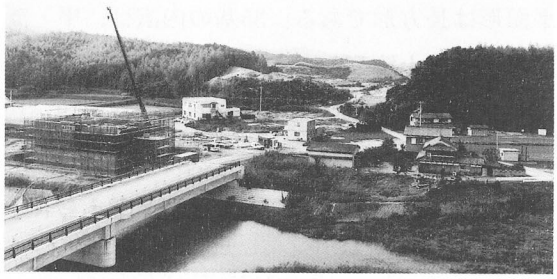


写真29　Ｃ地区遠景（東から）

本年度は残るＣ区南半分の本調査とＥ区西半分のトレンチ調査を実施した。Ｃ区南半分では，弥生時代後期から終末期にかけての土器棺墓８基，土壙35基と古墳時代の粘土槨木棺墓を主体部にもつ神越３号墳を検出した。また調査区内からは，ピットの上部に埋納される形で四葉座内行花文鏡の破鏡が出土した。帰属時期は，漢鏡の編年で５期，四葉座内行花文鏡のⅢ式（ＡＤ60年前後）のものと思われる【註】。中心部近くに穿孔があることから，懸垂鏡としての使用が考えられる。もともと破鏡の風習は，弥生時代後期から古墳時代初めにかけてみられるもので，集落跡から出土する例が多い。しかし，今回は，墓域から出土したということで，その性格については注目される点であり，今後の詳細な調査がまたれる。なお，Ｅ区西半分でのトレンチ調査結果は，巻頭に記載しているので，ここでは省略する。

それでは，以下Ｃ区南半分での調査成果について報告する。

(2) 弥生時代後期～終末期

①土器棺墓

C区では，土器棺墓を北半分での昨年度の調査で15基，今年度の南側での調査で８基の合計23基を検出している。これらは，湊川の沖積平野を見おろす丘陵部につくられていることから，成重遺跡を含め，その周辺地域に営まれていた集落との関連が指摘される。土器棺墓の蓋には，鉢を使ったものと高杯の脚部を欠いて使ったものとの２種類が確認されている。

今年度調査した８基の内ＳＴ20，22，23の３基については，残りの状態が悪く，墓壙の掘形が確認されなかった。それ以外のＳＴ16，17，18，19，21については，比較的残りの状況は良好で，その内最良のＳＴ18について詳しく報告する。

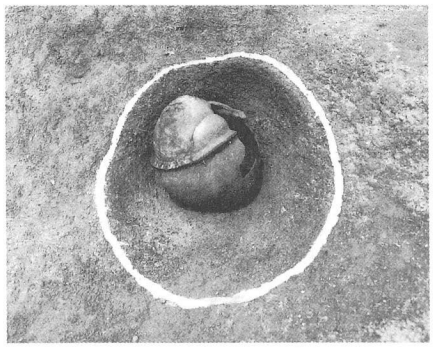
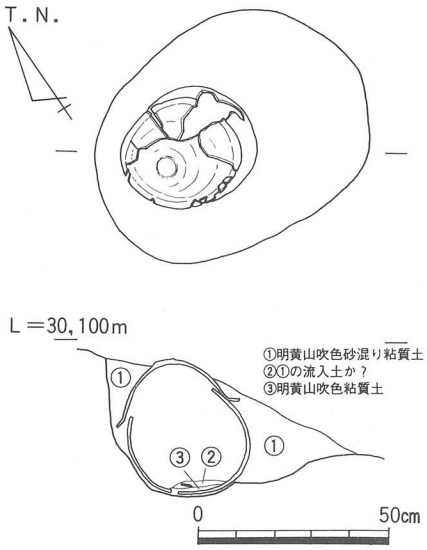


写真30　ＳＴ18検出状況（南から）

ＳＴ18

調査区内を北東方向に延びる尾根の南斜面部（標高約30.0m）に位置する。棺に口頸部を打ち欠いた壺（最大径約30cm，深さ約30cm）を用い，蓋には鉢を用いている。棺の底部には穿孔が認められた。墓壙は，棺を安定して置くためにカコウ岩盤を二段に掘り込み，山側の掘形は斜度を急にして，それを支えにして棺を据えたものと考えている。



第32図　ＳＴ18　平・断面図

②土壙墓

今年度の調査で，35基の土壙を検出している。そのほとんどの平面形は長方形である。35基の内訳は，平・断面の形状，木棺痕跡などから土壙墓と考えられるものが23基（ＳＫ01，03，05，06，07，08，09，10，11，12，13，14，16，18，19，21，22，24，26，28，29，31，35），墓とは考えにくいものが３基（ＳＫ02，15，20），どちらともいえないものが９基（ＳＫ04，17，23，25，27，30，32，33，34）を数える。そこで土壙墓と考えられる23基について報告する。

写真31　尾根筋土壙墓列全景（北東から）

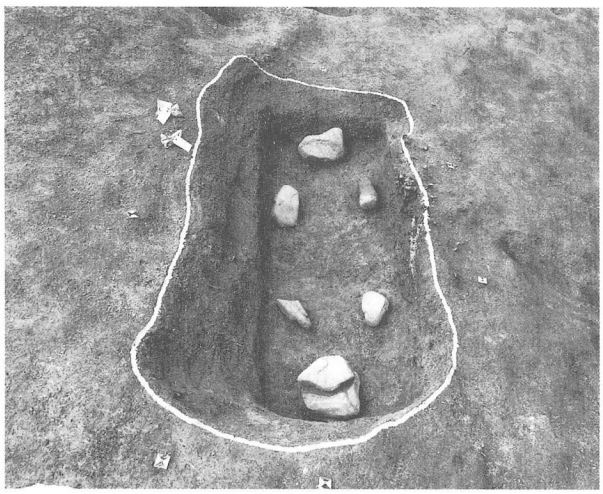


写真32　ＳＫ12完掘状況（西から）

ア，立地

調査区を北東方向に延びる尾根上と，それを挟んで南北の斜面に立地する（標高約28.9m～33.2m)。どちらかといえば尾根上から南斜面にかけて多く分布することから，湊川の沖積平野方向を意識しているものといえる。長辺主軸は23基中19基が東西方向である。

イ，形態

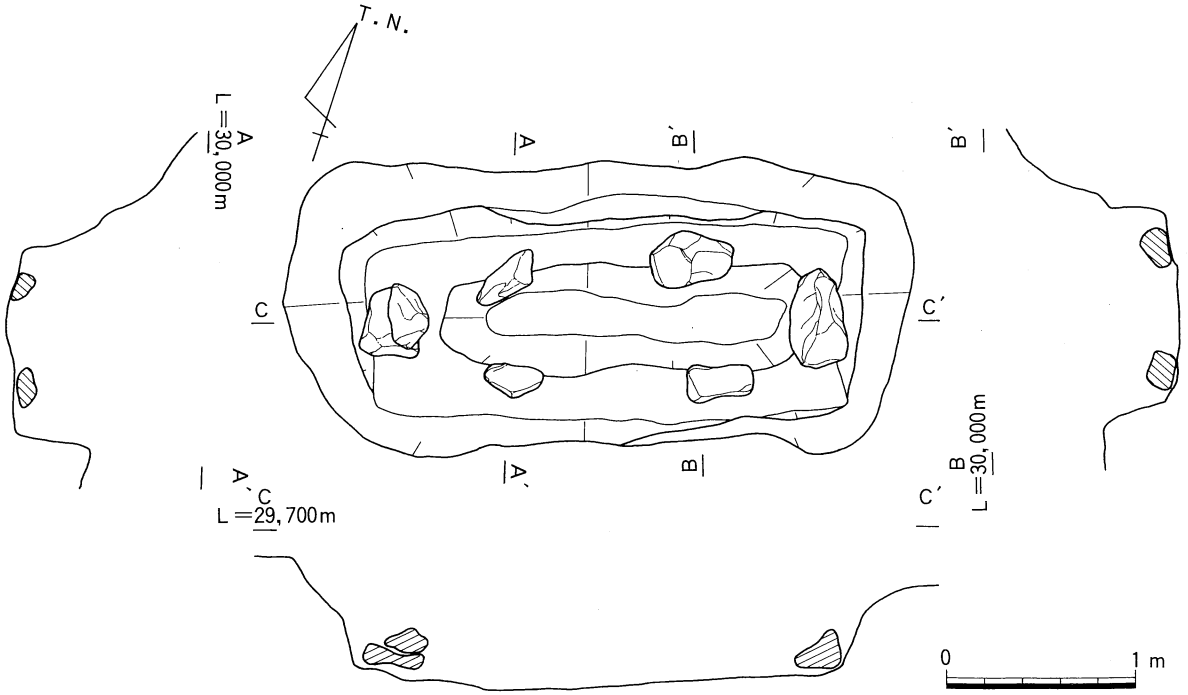
平面形はそのほとんどが隅丸の長方形である。その内，現存長が最大のＳＫ05で，長辺約3.8m，短辺約1.6m，深さ約0.75mをはかり，最小のＳＫ21で，長辺約1.4m，短辺約0.65m，深さ約0.15mをはかる。なお，ＳＫ12，13では，割竹形木棺を安定して据えるために使用したと思われる人頭大の河原石を床面で検出している。

ウ，出土遺物

土壙墓群の帰属時期を決定しうる遺物は，ＳＫ07より弥生土器片（弥生時代後期～終末期）が出土している外，ＳＫ14の床面付近から弥生時代後期～終末期に属する鉄鎌が１点出土している。なお，尾根筋を掘り込んでつくられているＳＤ01からも同形の鉄鎌が１点出土している。

エ，帰属時期

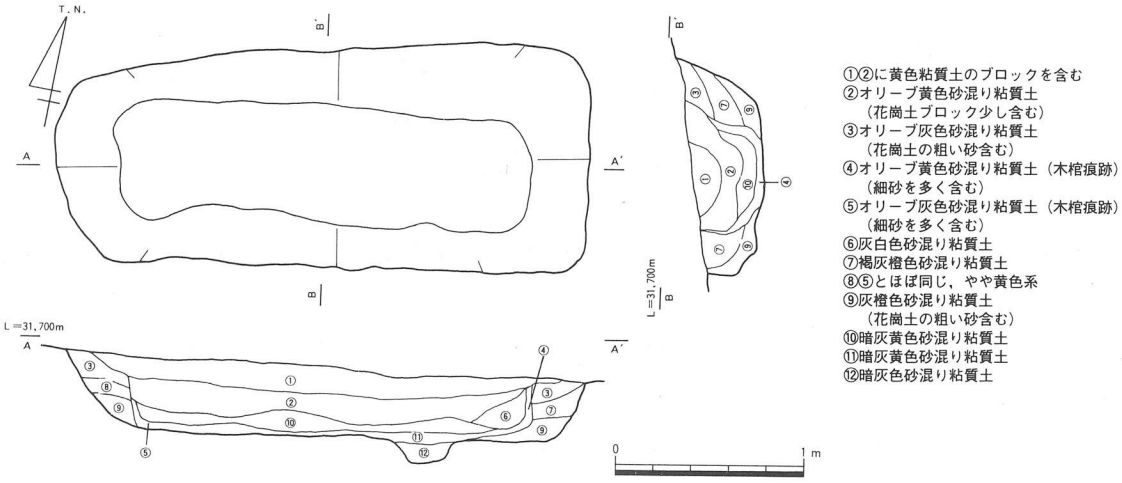
出土遺物をもって検証すると，概ね弥生時代後期から終末期にかけての時期幅の中に求められるものと考えている。個々の詳細な時期差については今後の検討課題だが，尾根筋を掘り込んでつくられているＳＤ01より出土した鉄鎌からこの溝は，尾根筋上の土壙墓に伴う可能性が高い。よってＳＤ01より先行してつくられたＳＫ33とこれらとの間には，若干の時期差が認められる。



第33図　ＳＫ12　平・断面図

ＳＫ12

尾根の南斜面（標高約29.8m）に立地する。長辺主軸は，Ｎ－71°－Ｅをとる。床面で木棺を四方から支えるために置かれた河原石を検出した。床面の断面形や置かれた河原石の状況から考えて割竹形木棺を据えたものと考えている。



第34図　ＳＫ19　平・断面図

ＳＫ19

尾根筋上（標高約31.6m）に立地する。長辺主軸は，Ｎ－82°－Ｅをとる。木棺痕跡の形状から，割竹形木棺を据えたものと考えている。

(3)　古墳時代

①神越３号墳

ア，調査前の状況

神越３号墳は，調査区内を南西より北東方向にのびる尾根筋のピーク（標高約34.5m）に位置する。この辺りは，早くからのタバコの栽培などに伴う開墾のため旧地形の改変が著しく，現状での墳丘等は確認できなかった。

イ，墳丘

遺構は主体部１基と主体部より南西方向の尾根筋上で，尾根に直交して掘り込まれた溝を１条検出した。恐らく周濠の一部が残ったものと考えられる。このことから想定して，墳径約10m程度の円墳を復元することができる。また，土層を観察した結果，盛土は確認されていないので，地山整形によってのみ築造されたか，盛土があったけれど後世に流出したのかは不明である。

ウ，埋葬施設

検出した主体部は１基で，土層断面からＵ字状の割竹形木棺の痕跡をもつ粘土槨木棺墓と判明した。概ね，尾根に直交してつくられており，長辺主軸はＮ－42°－Ｗをとる。墓壙は二段に掘り，割竹形木棺を安定させるための赤褐色粘土（暗緑黄色粘土が混ざる）を床面と縁辺部に敷き，棺を置いた上により赤褐色の濃い粘土で被覆したものと考えている。規模は現存長で，長辺約2.7m，短辺約1.5m，深さ約0.4mをはかる。

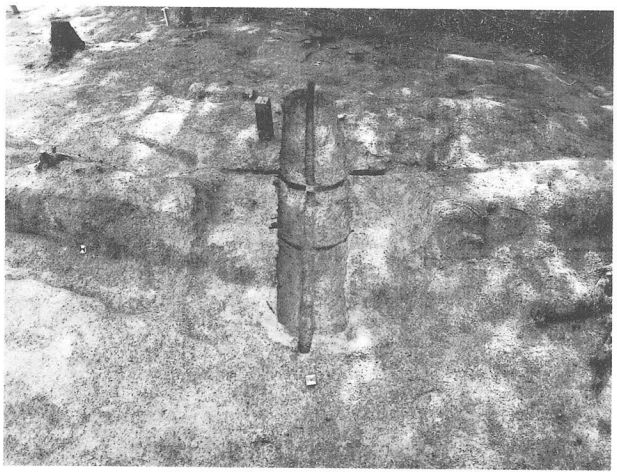
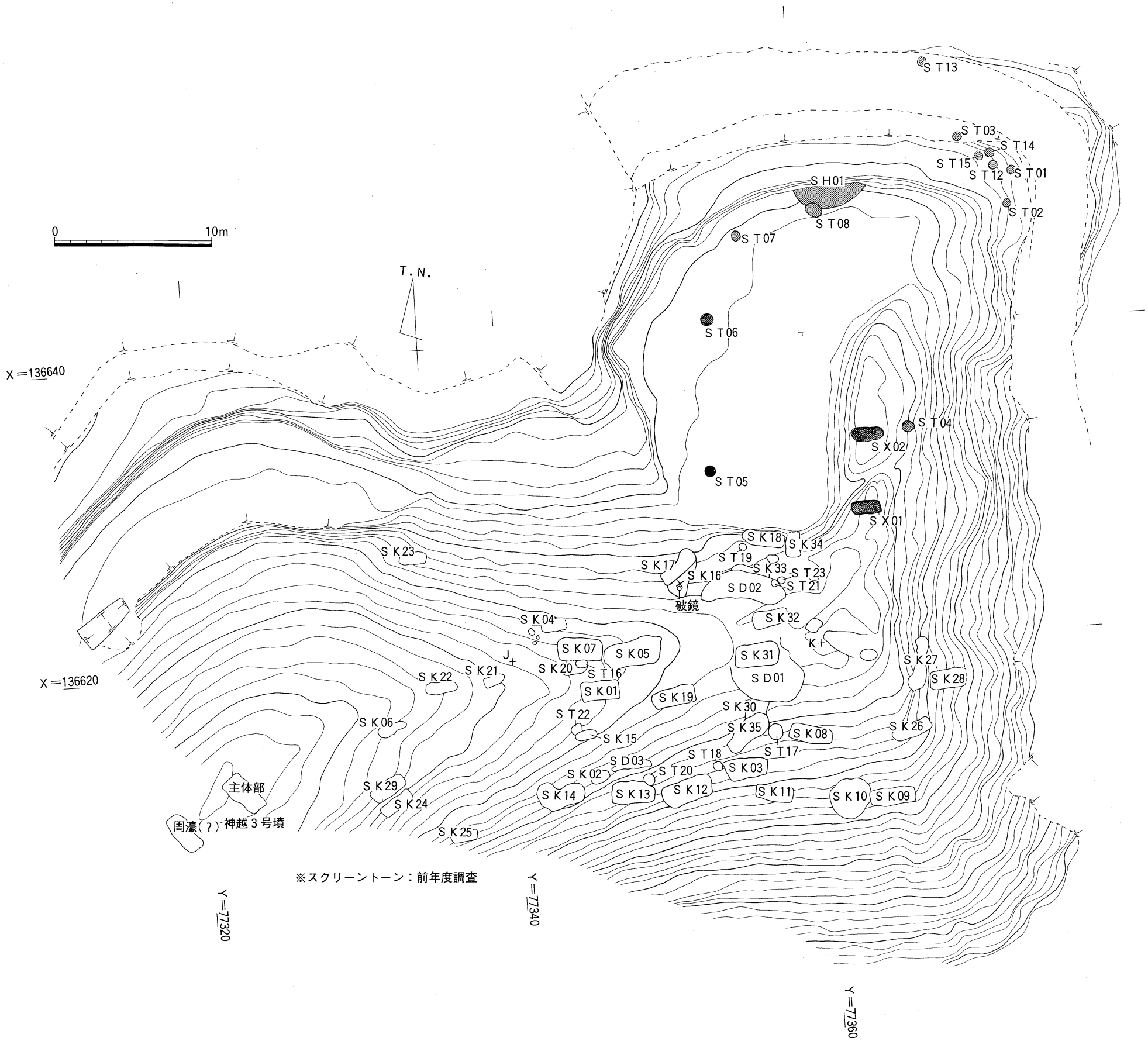


写真33　神越３号墳主体部検出状況（北西から）



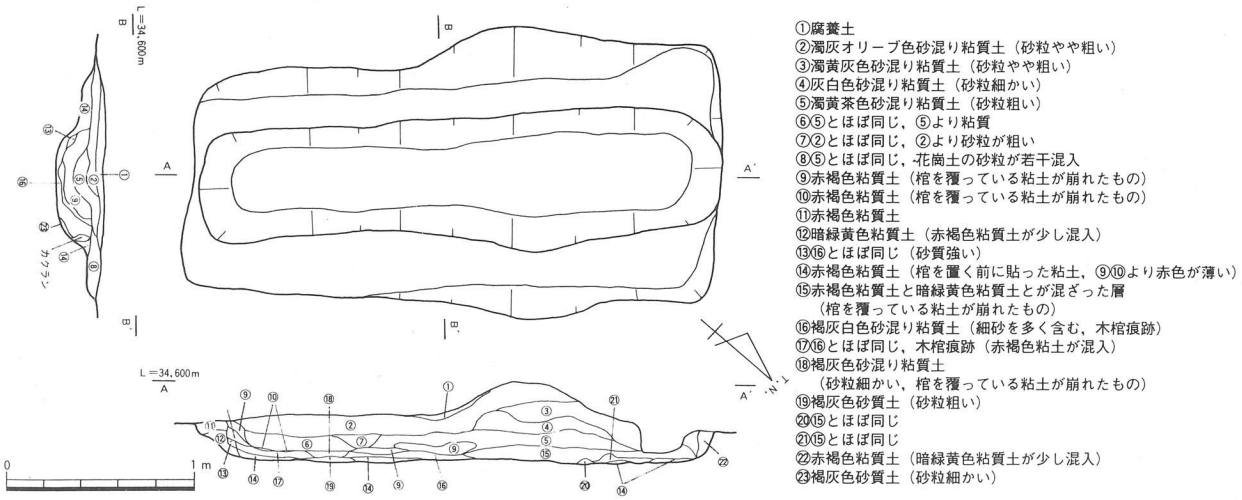
第35図　樋端遺跡C地区地形測量図

エ，出土遺物

主体部から緑色系のガラス玉４点と長さ14.5cm程度のヤリガンナ１点が出土した。ガラス玉は４点とも，南東側の小口に近い床面から出土していることから，これらは棺内遺物と判断でき，かつ頭位は南東側と考えられる。ヤリガンナは中心部より北西よりで，赤褐色の濃い粘土中から出土したので，棺外遺物の可能性が高い。なお，周濠の一部と思われる溝からの出土遺物は皆無だった。

オ，帰属時期

原間３号墳と類似していることから，古墳時代中期と考えられる。



第36図　神越３号墳主体部平・断面図

３．まとめ

前年度の調査成果をふまえて報告すると，樋端遺跡では，湊川方向を望む丘陵上（C・D地区）に弥生時代後期から古墳時代にかけての墓域が営まれており，中でも弥生時代後期から終末期については，C・D地区あわせて26基の土器棺墓が密集していた点，C地区の尾根上には比較的大型の土壙墓が尾根筋に沿って整然と配置されていた点は特筆されよう。また古墳時代では，前年度調査した神越２号墳（後期，横穴式石室）に先行する神越３号墳（中期，粘土槨木棺墓）を検出したことは成果の一つである。これらは，成重遺跡での成果とあわせて，湊川中流域における弥生時代中期から古墳時代にかけての墓制を考察する上での重要な資料といえよう。さらに，調査成果の中でも述べているようにこの墓域を造営した集団は，湊川沿いに集落を営んだものと考えられ，C地区南側の丘陵裾で弥生時代中期から古墳時代にかけての集落・墓域が確認されている神越遺跡，さらに湊川をはさんで東側の成重遺跡などとの関連が指摘される。尚，周知の神越桃山古墳（後期）に関連する遺構・遺物は，C地区内では確認されなかったこともあわせて報告する。

写真34　神越３号墳完掘状況（東から）

【註】　岡村秀典「後漢鏡の編年」　『国立歴史民俗博物館研究報告　第55集』　国立歴史民俗博物館1993

成　重　遺　跡

1．立地と環境

成重遺跡は，大川郡白鳥町成重に所在する。本遺跡は湊川によって形成された沖積平野に立地し，標高は概ね13m前後を測る。この平野は東方を帰来山系，西方を虎丸山系から派生する丘陵に挟まれており，南北に長く開けている。湊川は現在の流路に固定されるまで幾度も流路を変えて流れており，昨年度までの成重遺跡の発掘調査でも各時代の自然流路跡が確認されている。調査区は南北に延びる国道318号線を中心に挟む形で東西約450m，南北約70～80mとかなり広く，遺構面はほぼ全域にわたって２枚以上確認される。調査区西側は湊川氾濫原であり，平成８年度に実施された予備調査では遺構・遺物を確認していない。

本遺跡は平成９年度からの継続調査であり，これまでの調査で多くの知見を得た。特に平成９年度の調査では弥生時代中期から後期にかけての集石墓を始めとする墳墓群，弥生時代後期を中心とする竪穴住居群等を検出しており，弥生時代の居住遺構と埋葬遺構を併せ持つ貴重な遺跡として注目を浴びている。また周辺の遺跡としては，東側に弥生時代の竪穴住居跡を検出した谷遺跡，善門池西遺跡があり，さらにその東には弥生時代中期の集落跡を検出した池の奥遺跡が所在する。池の奥遺跡では数多くの石器，石製品が出土しており，特に磨製石斧の出土量は香川県内においても屈指であり，注目に値する。西側には26基の土器棺墓を始めとする弥生時代後期の墳墓群を検出した樋端遺跡が所在し，本遺跡における居住域と墓域の関係を考える上で，これら近隣の遺跡群は重要な資料となるであろう。

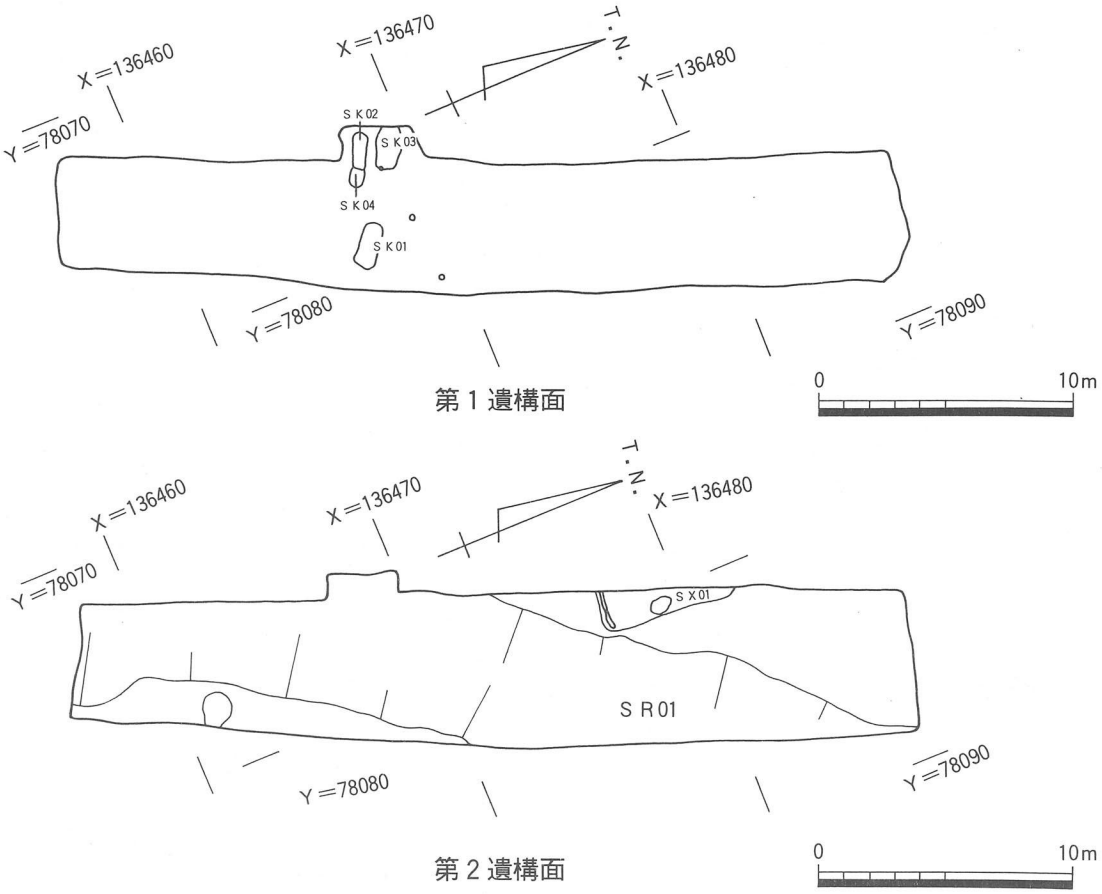
本年度は国道318号線を挟んで東側のＤ２区・Ｄ３区・Ｄ４区・国道318号線拡幅部の調査と西側のＧ４区・Ｇ５区・Ｇ６区・Ｇ７区・Ｇ８区の調査を行った。以下各調査区ごとに調査成果を述べる。

第37図　調査区割図（１/4,000）

2．東側調査区の成果

(1) 国道318号線拡幅部の概要

国道318号線拡幅部は国道の東側に位置する細長い調査区である。以下，写真と図面の表記は「R318」とする。基本層序は昨年度調査され，南側に接するＡ３区とほぼ同じである。遺構面は２面ある。第１遺構面では中世の土坑群が，第２遺構面では弥生時代の竪穴住居状遺構と旧流路が検出された。



第38図　R318　遺構配置図（1/300）

第２遺構面ＳＸ01　調査区の中央部で検出した竪穴住居状遺構である。大部分が調査区外に延びる。平面形は隅丸方形で，南北5.4m，深さ32cmを測る。断面形は壁が直に落ち，床面はほぼ平坦である。南側の壁際で壁溝状の溝が，東側の壁際では土坑が検出されている。この土坑の埋土は暗褐色粘土であり，炭や焼土は全く認められなかった。また，位置的にも中央から大きくずれており，炉としての機能は考えられない。遺物は東側の壁際にかたまって床面直上から出土している。１は下川津Ｂ類の甕である。体部外面に細かい刷毛目を，内面に指頭痕を施す。２は高杯の杯部である。

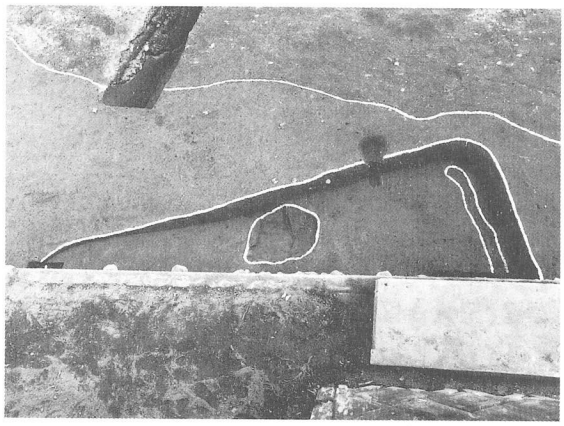
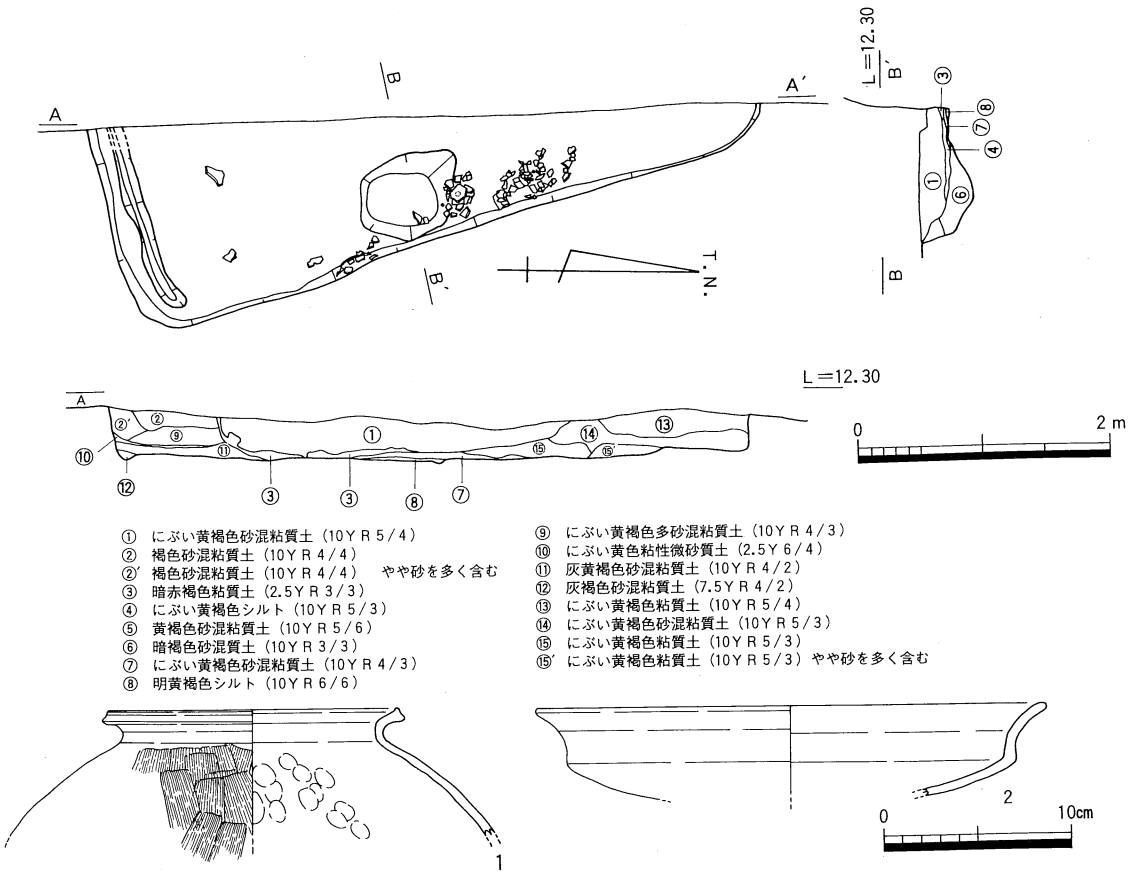
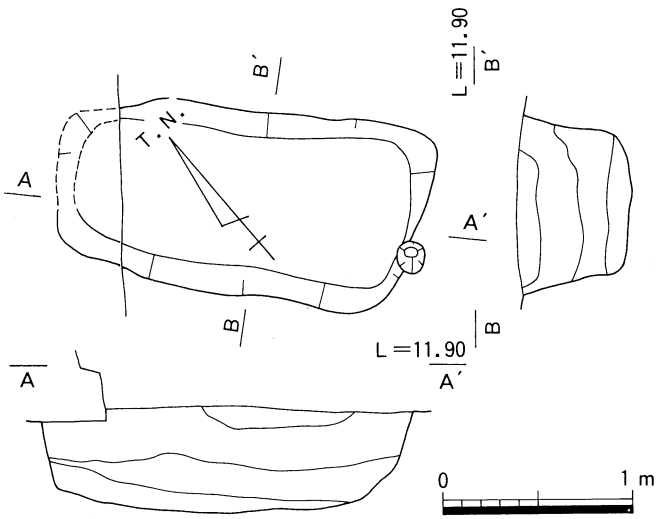


写真35　R318　ＳＸ01　完掘状況（西から）



第39図　R318　第２遺構面　ＳＸ01　平・断面図（１/60）及び出土土器実測図（１/４）

第１遺構面ＳＫ01～04　調査区の中央部で検出した土坑群であり，列状に整然と並んでいる。これらの土坑群に共通する点を挙げると，①平面形が整った長方形である。②主軸方向がほぼＮ－40°－Ｗである。③規模はＳＫ02に切られるＳＫ04以外は長さ1.6m～2.0mである。ただし，幅は65cm～１mとやや開きがある。④断面形状は壁がほぼ直に落ちる。⑤埋土は灰褐色系である。また第１遺構面ベース土ないしは直下のにぶい褐色混砂粘質土のブロックを含むものが多いが，このことから掘削後すぐ埋め戻されたと想定できる，がある。以上のような共通点からこれらの土坑群は近接した時期に営まれたと考えられ，性格としては土壙墓である可能性が高い。第40図に図面を呈示したＳＫ03は長さ2.0m，幅95cmを測り，どの層にも遺構面ベース土を含み，①～⑤の項目を満たしている。出土遺物には最下層で中世の土師器の杯の口縁部小片が出土している。よって，これらの土坑群は大きくは中世に比定できる。また，成重遺跡では平成10年度に南側に隣接するＡ３区第１遺構面で13Ｃ頃に掘削された土壙墓の可能性が高い，列状に並ぶ土坑群が検出されている。今回調査した土坑群はこれらの土坑群と主軸方向がほぼ一致，ないしは直交しており，近接した時期のものである可能性が高い。



第40図　R318　第１遺構面　ＳＫ03　平・断面図（１/40）

なお，埋土には弥生土器細片が比較的多く混じるが，これは弥生時代の遺構面である第２遺構面の包含層まで掘削が及んでいるためであろう。

(2)　Ｄ区の調査概要

Ｄ区は成重遺跡の調査区東端に位置する。地形は大局的には丘陵裾部の緩斜面（Ｄ２区東部，Ｄ３区）と沖積面（Ｄ２区西部）からなるが，Ｄ３区・Ｄ２区の中央部には東西方向に延びるごく浅い谷がある。基本層序は昨年度までに調査されている通りで，遺構面を２面確認できた。基本的に第１遺構面では古代後半～中世の遺構を，第２遺構面では弥生時代の遺構を検出した。

Ｄ２区第１遺構面ＳＰ01　調査区南部で検出したピットである。径40cm，深さ40cmを測る。このピットでは長胴甕が正位に埋納された状態で出土した。この甕は底部を人為的に欠いている。呈示した図では口縁部，胴部が欠損しているが，これは調査中のミスによるものであり，本来は底部以外は完形である。１は体部外面に細かい刷毛を施している。

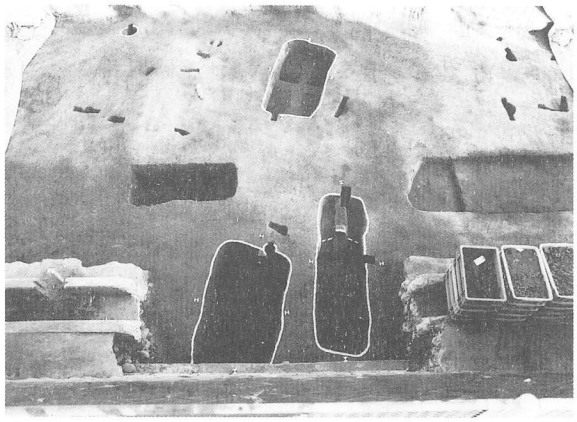


写真36　Ｒ318　ＳＫ01～04　全景（西から）

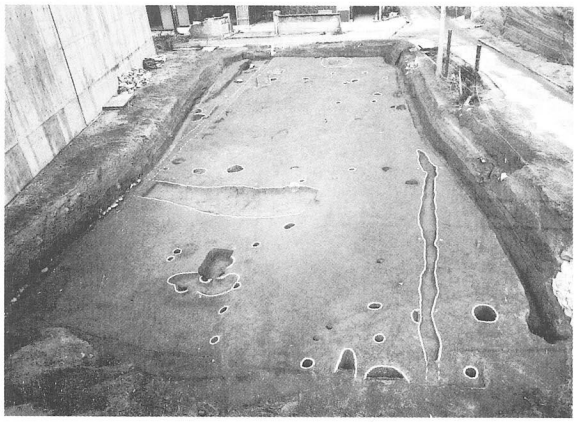
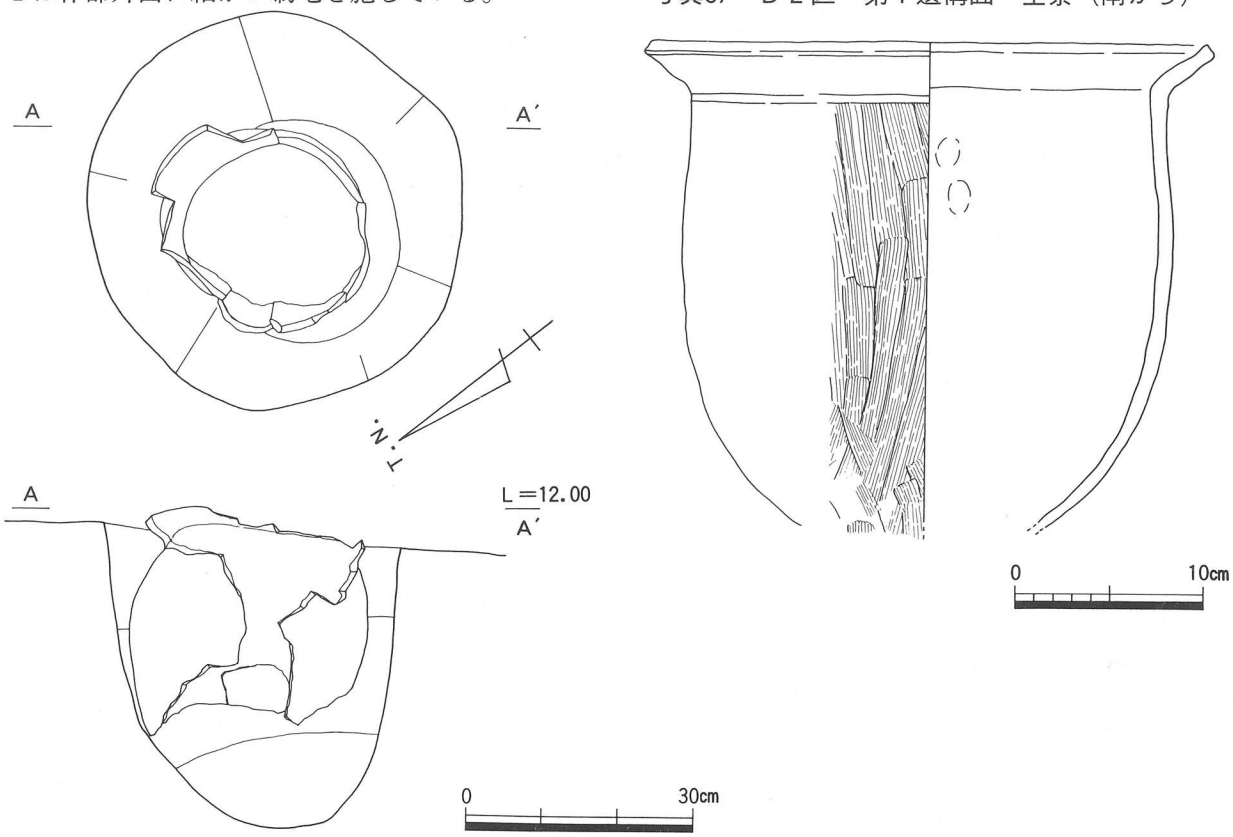
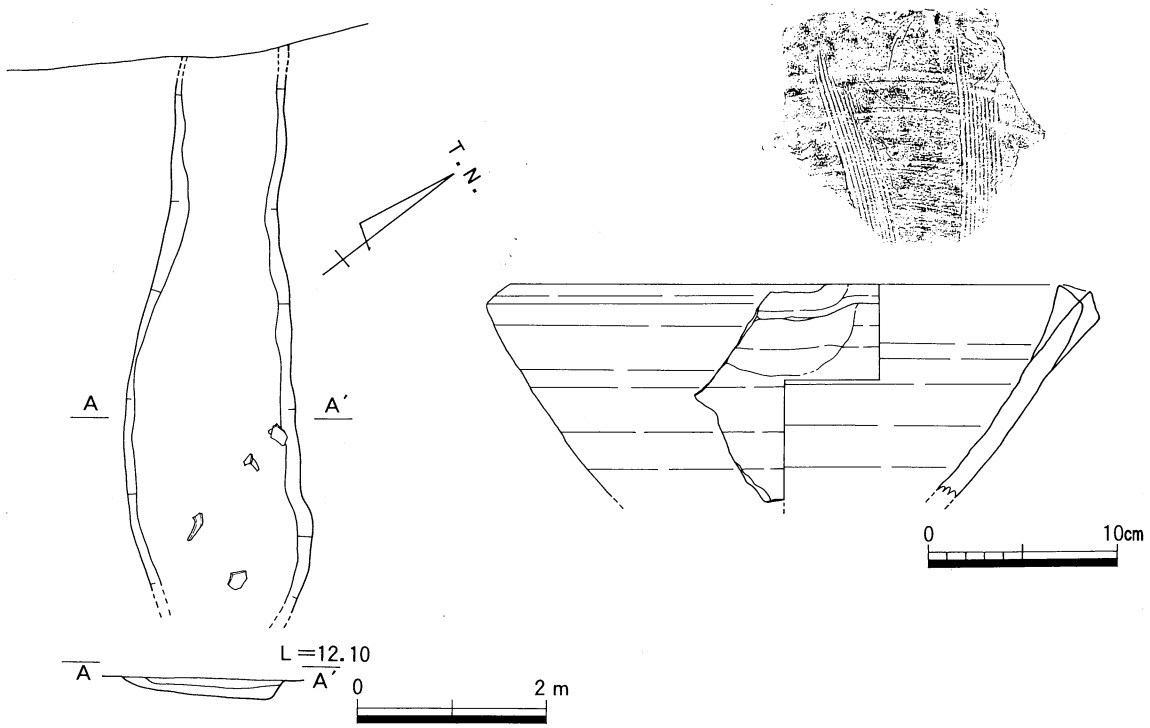


写真37　Ｄ２区　第１遺構面　全景（南から）



第41図　Ｄ２区　第１遺構面　ＳＰ01平・断・立面図（１/10）及び出土土器実測図（１/４）

Ｄ２区第１遺構面ＳＤ02　調査区南部で検出した東西方向の溝状遺構である。検出長2.8m，幅60～90cm，深さ20cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。出土遺物には土師器の杯，土釜，片口擂り鉢等がある。１は土師器の片口擂り鉢である。内面に９条の条溝を施す。



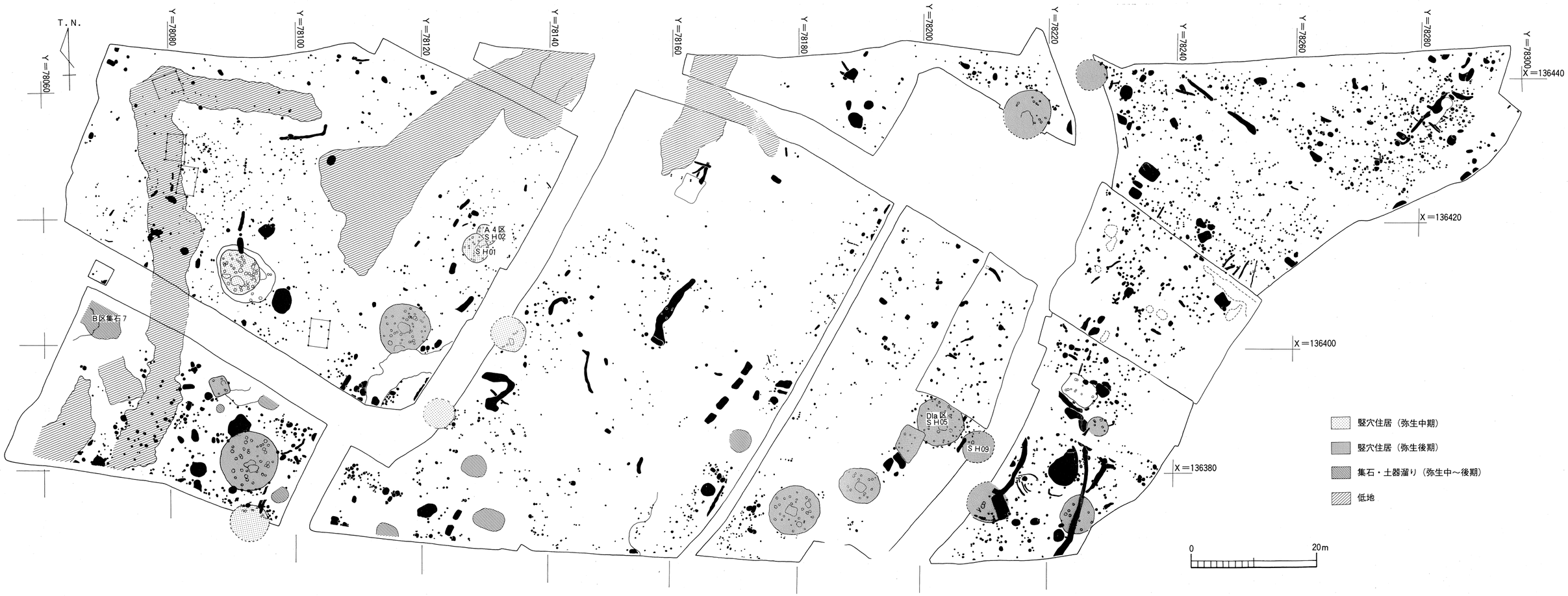
第42図　Ｄ２区　第１遺構面　ＳＤ02　平・断面図（１/80）及び出土土器実測図（１/４）

(3)　東側調査区のまとめ

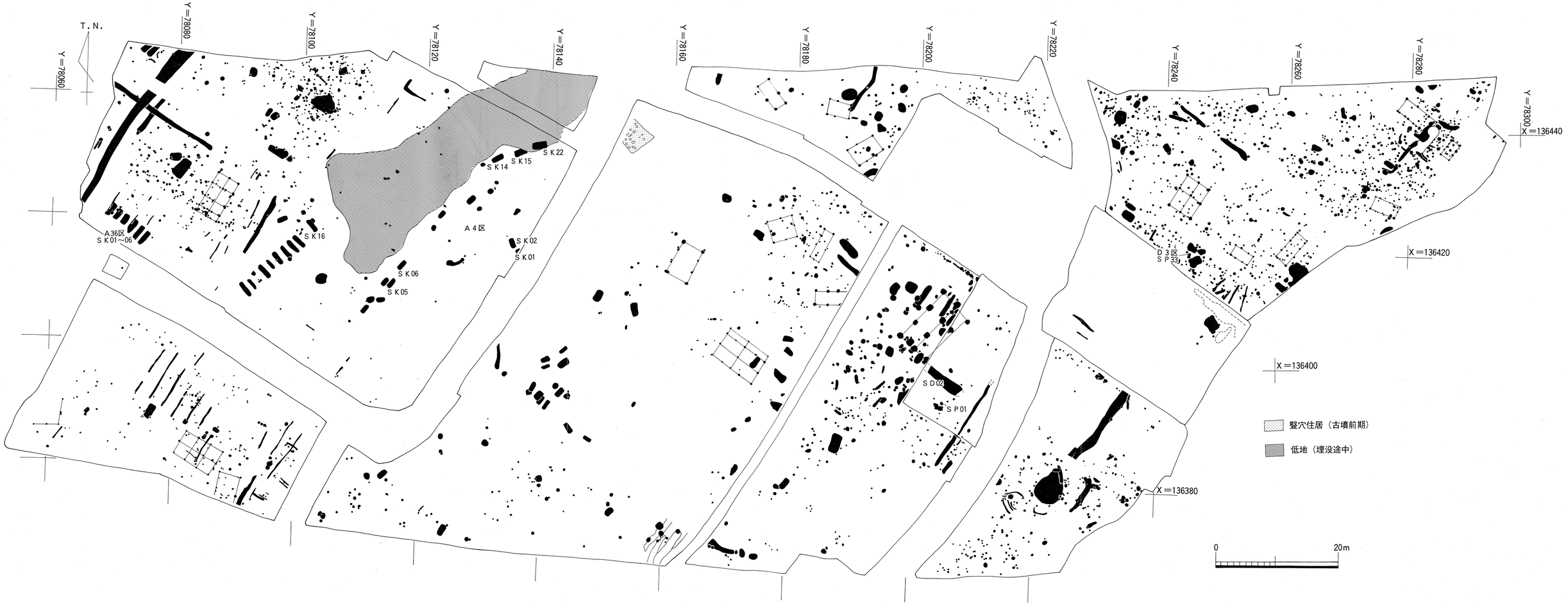
東側調査区では遺構面を２面確認している。以下，遺構面ごとに説明する。

第２遺構面　昨年度までの調査により今年度調査区の北側と南側で竪穴住居群の分布が確認されていた。特に南側では弥生時代後期中葉，後葉の竪穴住居５棟が列状に並んで検出されており，今年度調査区でも未検出の竪穴住居が見つかることが期待されていた。しかし検出できたのはピット，土坑，溝状遺構のみであった。この理由については地形に関わるのではないかと考えている。竪穴住居群が検出されたのは丘陵裾の緩斜面であるが，今年度調査区，特にＤ２区は東の丘陵にある谷地形の延長部にあたり，浅く窪んだ地形になっている。そのため竪穴住居群が分布する北側のＤ４区や南側のＤ１区，Ｄ１ａ区よりレベルが低くなっている。調査区においてはなかったが，東側の丘陵の谷部では現在，湧水が認められる。よって当時も湧水や降雨による水の通り道であった可能性があり，このことが本年度調査区で竪穴住居が造られなかった一因でないかと考えられる。

第１遺構面　国道318号線拡幅部では13Ｃ頃の土壙墓と考えられる土坑列を検出した。成重遺跡の第１遺構面では同様に列状に並ぶ土坑群が数十基あり，これらはほぼ主軸方向を同じくする。今後の課題としては土坑の性格と時期の決定，そして同時に営まれた集落との関係の把握等があろう。



第43図　A区～D区　第２面　遺構配置図（1/400）



第44図　A区～D区　第1面　遺構配置図（1/400）

3．西側調査区（G区）の成果

(1)　G区の概要

G区は，国道318号線の西側に位置し，成重遺跡の最西端に設定した調査区である。この調査区は昨年度からの継続調査区で，これまでにG１～３区を調査している。今年度は昨年度に引き続きG４～８区が，調査対象地である（第37図）。

G４～８区は湊川の旧の氾濫原に近く，現在でもその痕跡が調査区西側で，１～２mの比高差として残っている。

基本土層序は耕作土下に0.4～１m程の洪水砂礫層が調査区全面に堆積し，その上面で今回第１遺構面とした近世の遺構を検出した。砂礫層下に砂層を挟みやや安定した暗灰黄色シルト層がある。この上面が昨年度までの古代・中世面（昨年度第１遺構面）である。今年度はこの面で古代・中世の遺構を検出していないので，遺構面の設定を行っていない。さらに砂層と粘質土の交互層を挟み約60cm下で，淡黄茶色粘質土となる。この土層上面で弥生時代後期の遺構を検出したので，今年度はこの面を第２遺構面とした。さらに砂層と粘質土の交互層を挟み約70cm下で，暗灰黄色砂混じり粘質土層となる。この土層上面で弥生時代中期の遺構を検出したので，今年度はこの面を第３遺構面とした。

G４・５区では第２・３遺構面は若干西側（G５区側）が高くなるものの，ほぼ均一に堆積したそれぞれの土層上面にあり，かなり安定した遺構面であったことが想定できる。しかし，G６・８区からは北に向かって傾斜している。そのためG６・８区では第２・３遺構面が同一遺構面となっている。第１面を検出した砂礫層は全面で確認したが，第２・３面と同様に西側が高く，東に向かって傾斜している。

第１遺構面形成砂礫層は調査区全域で確認でき，ほぼ全域で遺構を検出した。検出した遺構は柱穴・土坑・砂糖竈である。第２遺構面形成シルト層は調査区全域で確認できるが，遺構はG４・５・６・８区で部分的に検出したのみである。検出した遺構は掘立柱建物・竪穴住居・集石状遺構などである。第３遺構面形成粘質土層は旧湊川氾濫砂礫層によって西側を削平されており，結果的にG４・６・８区で検出した。検出した遺構は掘立柱建物・竪穴住居・土壙墓・集石状遺構・柱穴などである。

(2)　第３遺構面検出遺構

現在調査中のG４・６・８区で弥生時代中期の遺構を検出している。G４区では集石状遺構５基，掘立柱建物１棟，土壙墓５基，溝状遺構を７条，柱穴を検出している。また，G６・８区では竪穴住居１棟，土壙墓１基，柱穴を検出している。第３遺構面とした中期の遺構面はG６区北部からG４区西部にかけて続く流路（砂礫層）によって削られており，これより以西では遺構を検出していない。G７区は現在調査中であるが，当該期の遺構を検出しているので今年度の調査区が成重遺跡の弥生時代中期の集落の西端部であることが確認できた。

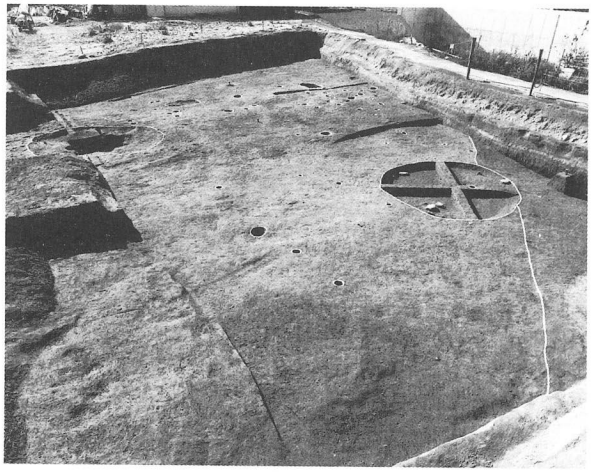
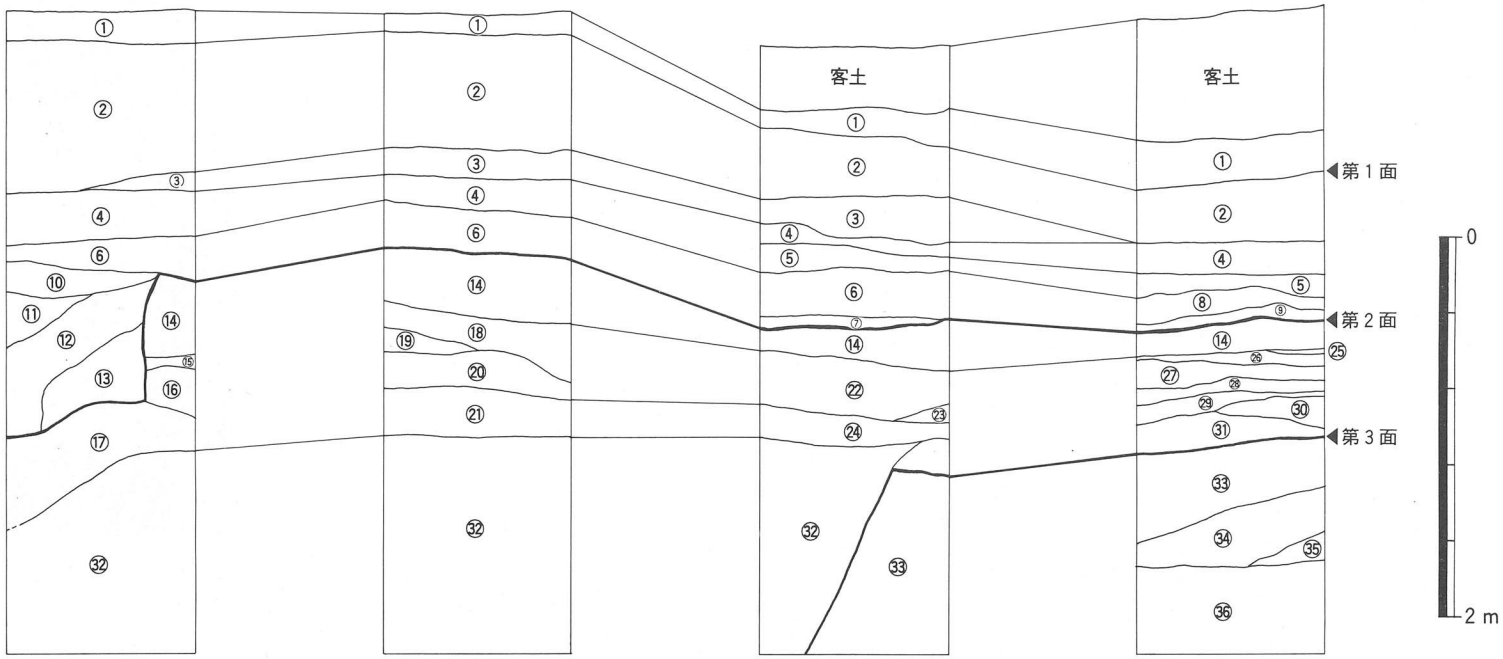
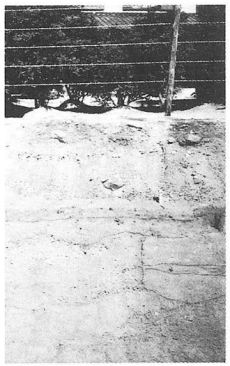


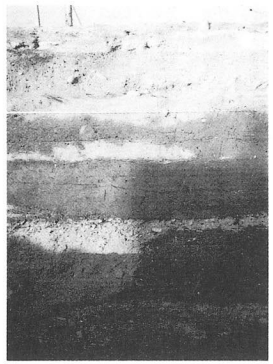
写真38　G６・８区　第３面遺構検出状況(北東から)

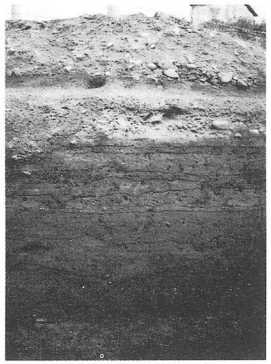
ＳＨ01（G６・８区）　北西部で検出した竪穴住居である。北西部を弥生時代中期の遺構面を切る砂礫層によって削られているものの平面形態は円形を呈

① 耕作土
こげ茶色砂混じり粘質土
（φ5mm以下の砂粒を多量に含む）
② 濁白灰色砂礫層
（砂φ1～5mm，礫φ1～20cm程度）
茶色砂礫層
（砂φ5mm以下，礫φ2～10cm）
③ 暗茶白黄色砂層
（φ1mm以下）
濁灰黄色砂質土層
（部分的φ1～2cm程度の小礫を含む）
④ 濁黄色砂層
（微砂粒～細砂粒。1mm以下）
⑤ 暗黄褐色砂質土層
⑥ 暗褐黄色砂層
（部分的φ3～40mm程度の砂礫を含む）
⑦ 暗黄褐色粘質土層（弥生土器及び炭を含む）
⑧ 暗褐黄色砂層
（部分的φ3～40mm程度の砂礫を含む）
⑨ 淡黄褐茶色砂混じり粘質土層
⑩ 暗灰茶黄色砂質土層
（φ1mm以下）
⑪ 暗灰茶黄色砂礫層
（砂φ1mm以下，礫φ1～12cm程度）
⑫ 暗黄色砂層
（φ2mm以下の砂粒）
⑬ 暗灰黄色砂礫層
（砂φ1～2mm，礫φ1cm程度少量含む）
⑭ 淡黄茶色粘質土層
（硬く締まったシルト。粘質土に近い）
⑮ 淡黄茶色砂質土層
⑯ 淡灰茶色砂質土層
（φ1～2mm程度の砂粒を含む）
⑰ 暗茶黄色砂層
（φ1mm以下の砂粒）
⑱ 淡茶色砂礫層
（砂φ1mm以下，礫φ1～3cm程度）
⑲ 黄こげ茶色砂層
（φ1mm以下）
⑳ 濁茶黄色砂礫層
（砂φ1mm以下，礫φ1～5cm程度）
㉑ 濁茶黄色砂礫層
（砂φ1～5mm，礫φ2～10cm程度）
㉒ 暗灰黄色シルト層
㉓ 暗茶黄色砂礫層
（砂φ1～3mm，礫φ1～3cm）
㉔ 暗灰黄色砂礫層と暗茶灰色粘質土の互層
（砂φ1～5mm，礫φ1～5cm）
㉕ 暗茶黄色砂混じり粘質土層
（φ1～5mmやや多く含む）
㉖ 濁茶黄色シルト層
（しまりがよい）
㉗ 濁茶黄色砂質土層
（砂層ぽい。砂層に近い。東壁にはない）
㉘ 明褐茶色粘質土層
㉙ 灰茶色礫混じり砂質土層
（砂φ1mm以下，礫φ1～2cm）
㉚ 黄茶色砂礫混じり粘質土層
（砂φ1mm以下，礫φ5cm前後）
㉛ 暗灰褐色粘質土層
（弥生土器少量包含層）
㉜ 砂礫層
（1.5m以上）
砂礫層
（中期の遺構面及び包含層を切る砂礫層）
㉝ 暗灰黄色微砂混じり粘質土層
㉞ 淡茶色砂質土層
㉟ 褐茶色砂質土層
㊱ 砂礫層





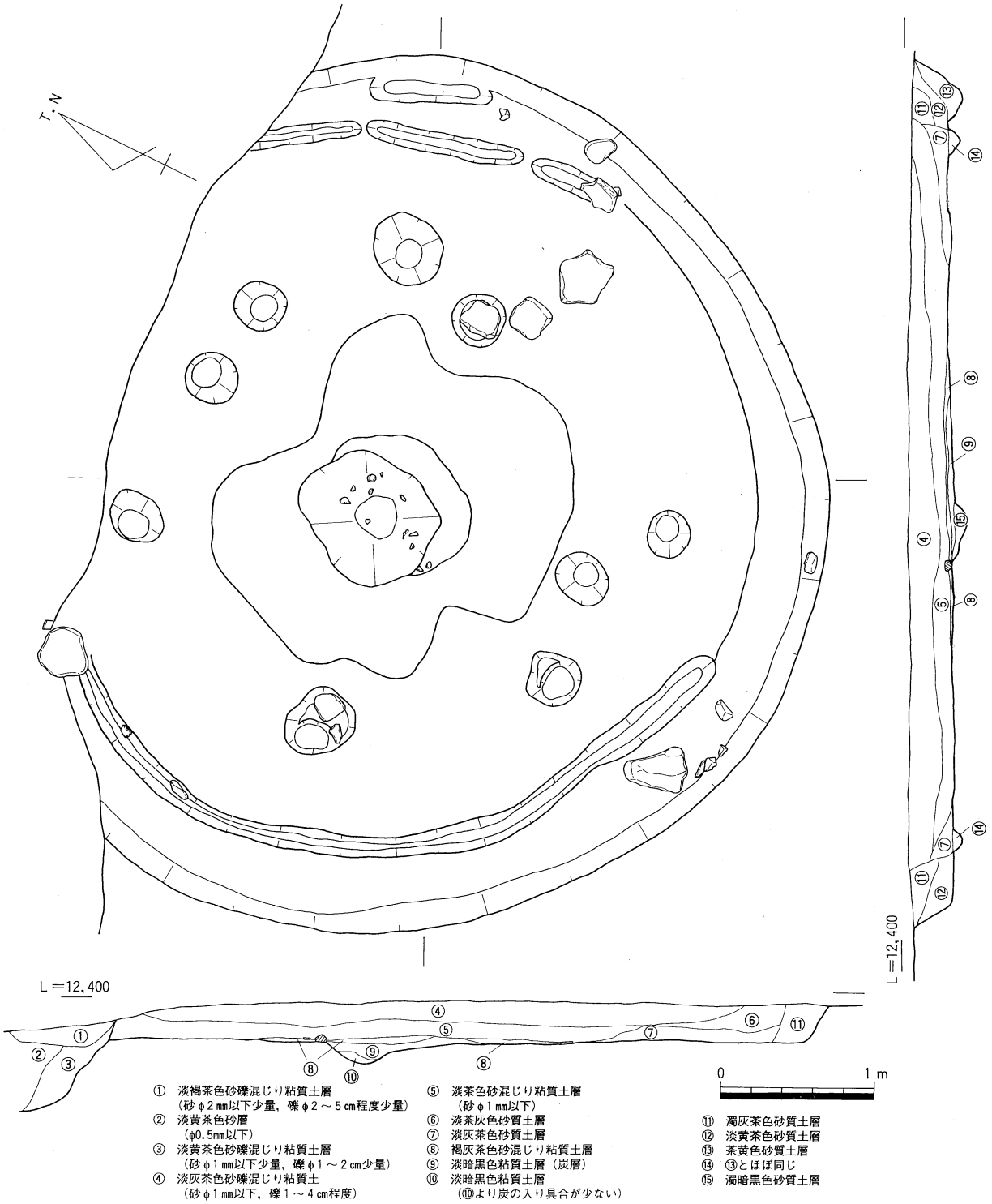




第45図　G４・５区　北壁　土層序

第46図　G 4 ～ 8 区　遺構配置図（第 3 面）

し，規模は直径約5.7m，掘削面からの深さ約0.3mを測る。土層及び竪穴内床面検出遺構から切り合いが確認でき，ほぼ同位置で住居があったものと考えられる。内側の竪穴住居は円形で，直径約4.8mを測る。周囲に壁溝が有し，ほぼ中央部に歪な円形を呈する炉を検出している。主柱穴は4あるいは5穴と考えられる。東部床面直上には砥石及び台石が出土している。時期は出土遺物から弥生時代後期と考えられる。一方周囲に残る竪穴住居はそれ以前（中期）と考えられ，集落域の継続性が考えられる遺構である。



第47図　第2・3面　SH01　平・断面図

ＳＢ01（Ｇ４区）　調査区南東で検出した掘立柱建物である。南東側は調査区外であるために調査を行えなかったが，１間×３間の規模と考えられる。主軸方位はＮ－50°－Ｗである。柱間距離は長列が1.8ｍ，短列が3.3ｍと整然としている。柱穴の平面形状はすべて直径60cmほどの円形を呈する。また，柱穴の深さも60cm前後と一定しており，すべての柱穴で柱痕を確認している。

長軸北西方向にあるＳＰ081は，ＳＰ023およびＳＰ126からほぼ等距離（2.5～2.6ｍ）にあり，埋土も建物を構成する柱穴と類似していることから，ＳＢ01の棟持柱と考えられる。ＳＰ020からは厚さ５cmほどの平らな石が出土しており，添石と考えている。

１はＳＰ022から出土した遺物である。口縁部に刻目紋を施した壷で，頸部内外面に刷毛目が施されている。

柱穴出土遺物よりＳＢ01は弥生時代中期と考えられる。

ＳＢ01は，これまでの成重遺跡の発掘調査で検出していなかった棟持柱をもつ建物という特異な構造と，きわめて規則性が高く建てられていることから，集落内で特別の役割を果たす建物である可能性が考えられる。

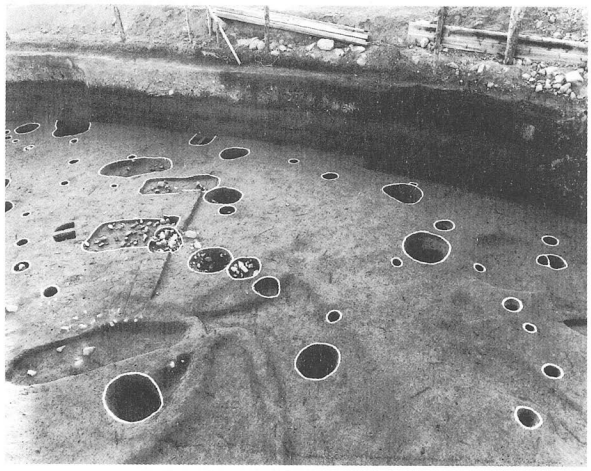
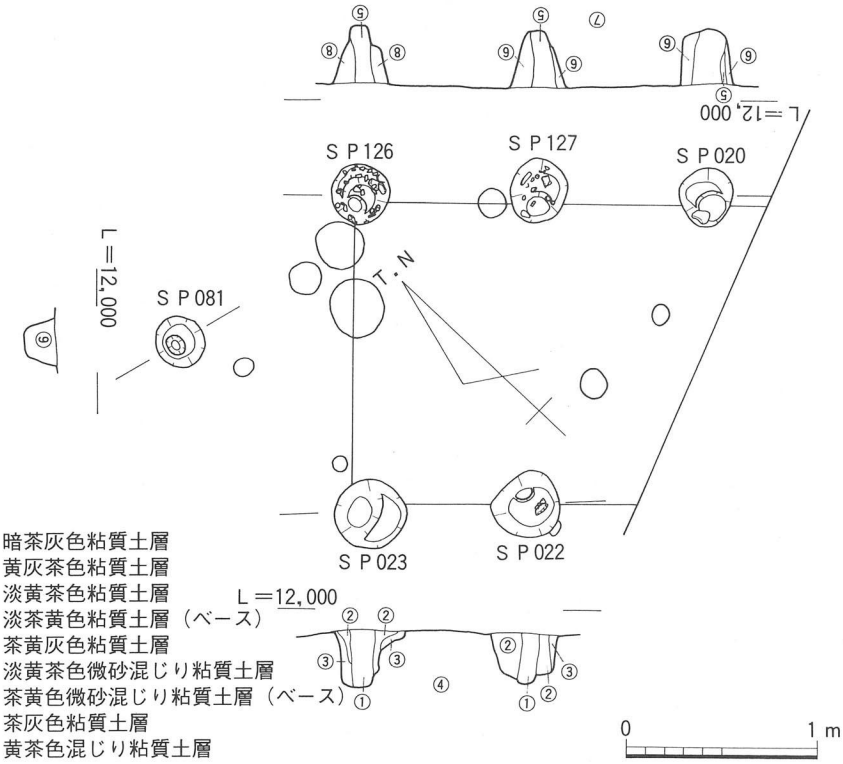


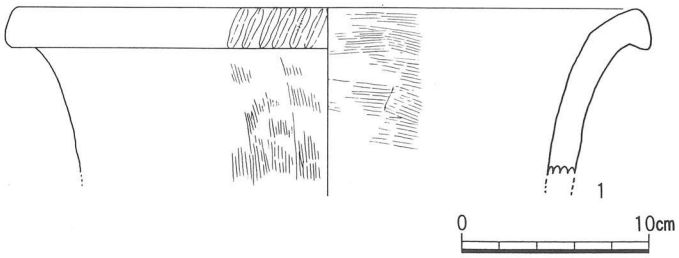
写真39　Ｇ４区　ＳＢ01　検出状況（西から）



第48図　Ｇ４区　ＳＢ01　平・断面図（第３面）

土壙墓

土壙墓はＧ４区東部を中心に６基検出している。そのほとんどが主軸をＮ－50°－Ｅの方向を取っていることから墓域を構成するのにある程度の方向性があったものと考えられる。しかし，土壙墓には検出面からの深度が浅いものと深いものがあることから同一時期



第49図　ＳＢ01（ＳＰ022）出土遺物実測図

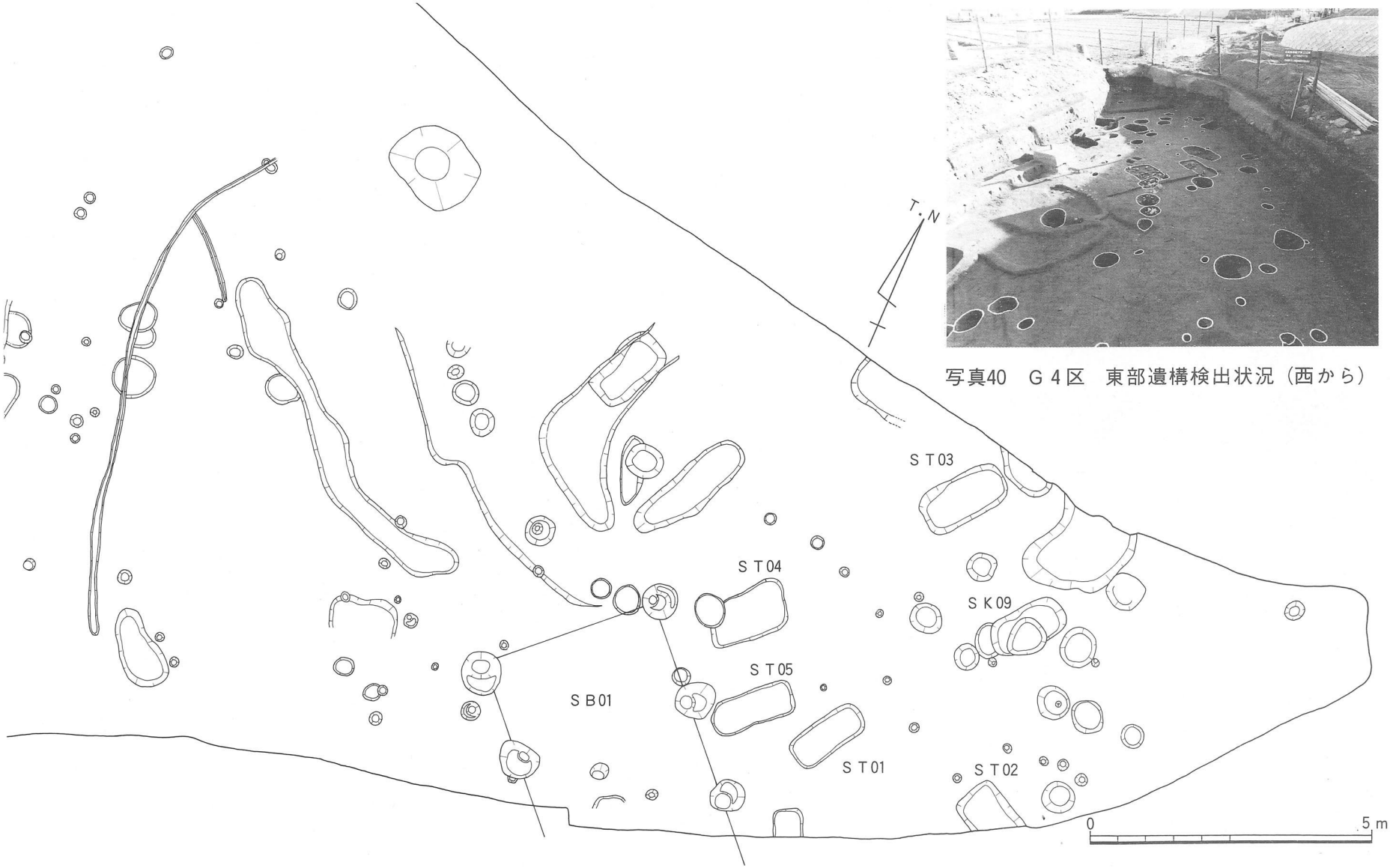


写真40　Ｇ４区　東部遺構検出状況（西から）

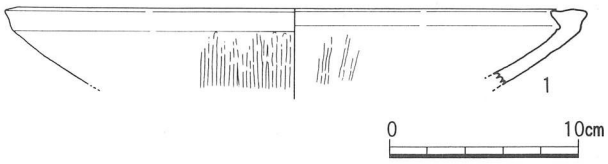
第50図　Ｇ４区　東部　遺構平面図（第３面）

の築造ではないと考えられる。

ＳＴ03（Ｇ４区）　Ｇ４区東部で検出した土壙墓で，検出面からの深度が深いものである。平面形態は隅丸の長方形を呈し，規模は長軸約1.6m，短軸約0.8m，深さ約0.4mを測る。墓壙の掘形は土層断面から箱形を呈している。

墓壙内より弥生土器の破片が出土している。１は高坏である。直線的に延びる杯部から口縁端部が上方に屈曲し，僅かに左右に拡張する。杯部内外面に縦方向のヘラ磨きが施されている。時期は弥生時代中期である。

ＳＴ04（Ｇ４区）　Ｇ４区東部で検出した土壙墓で，検出面からの掘削深度が浅いものである。平面形態は隅丸の長方形を呈し，規模は長軸約1.4m，短軸



第51図　ＳＴ03　出土遺物実測図

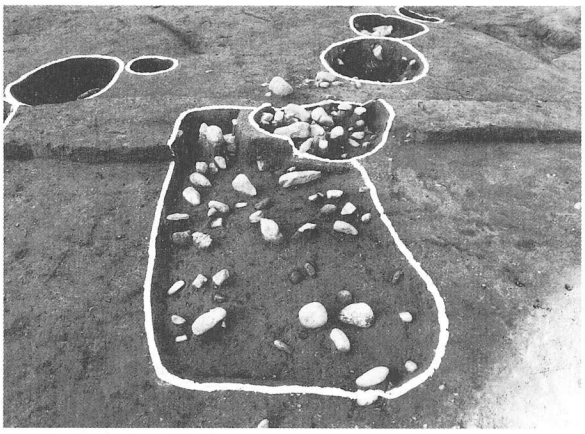
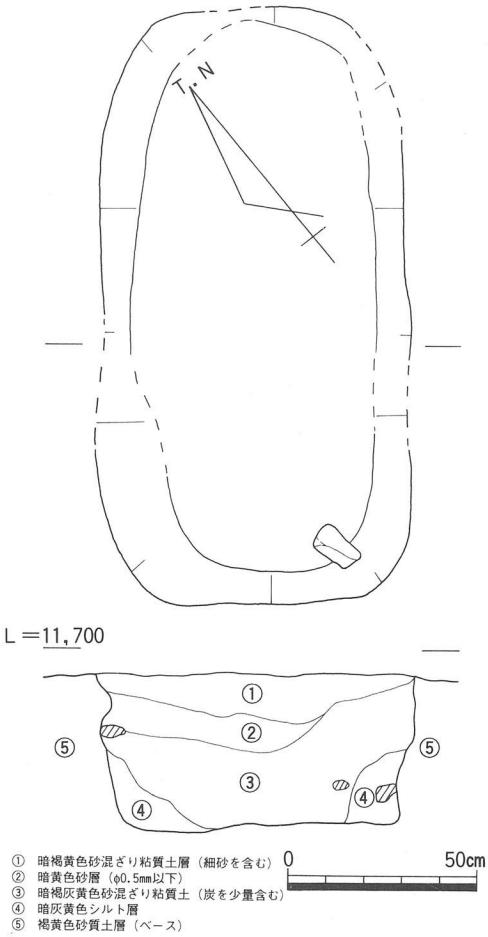
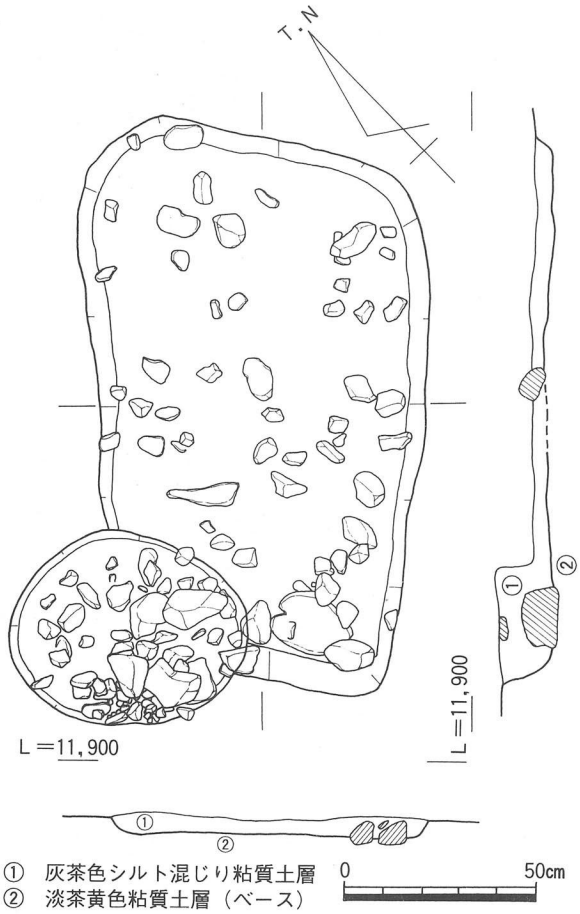


写真41　Ｇ４区　ＳＴ04　検出状況（北から）



第52図　Ｇ４区　ＳＴ03　平・断面図（第３面）

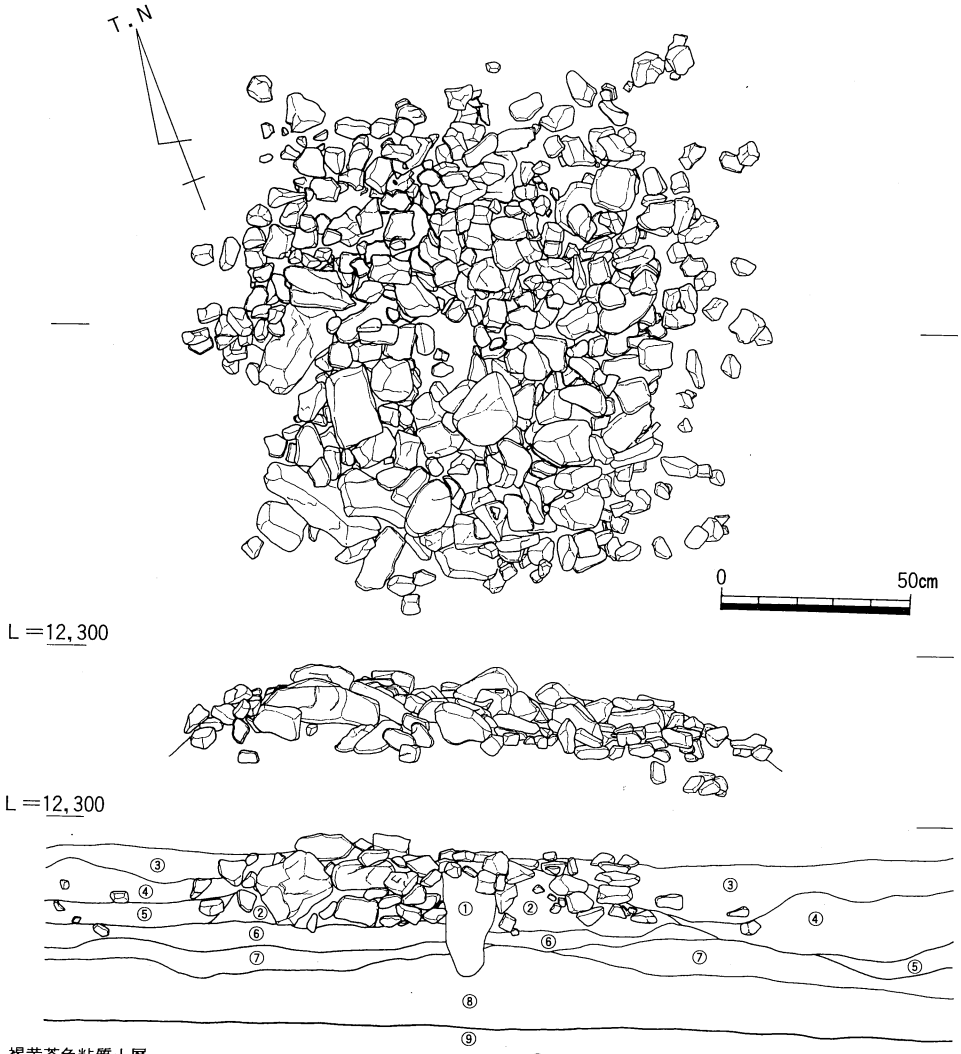


第53図　Ｇ４区　ＳＴ04　平・断面図（第３面）

約0.85m，深さ約0.15mを測る。墓壙の掘形は浅いものの箱形を呈していたものと考えられる。墓壙床面には２～10cm程度の礫をまばらに敷いたように配されていた。墓壙内より弥生土器片が出土している。墓壙掘り込み面の土層関係から弥生時代中期の所産と考えられる。

集石状遺構

弥生時代中期の集石状遺構は，Ｇ４区で４基検出している。これら４基の集石状遺構は弥生時代中期の遺構面と弥生時代後期の遺構面間に堆積した層上面で検出している。弥生時代中期の遺構面と後期の遺構面の間には河川の氾濫による堆積のため均一な堆積ではないものの５つの層が確認できる。細分すれば集石状遺構２は土層序㉖上層に構築され，集石状遺構３は土層序㉝上層，集石状遺構４・５は土層序㉛上面に構築されていることが確認できる（第45図）。したがってＧ４区で検出した集石状遺構４基は同一時期に存在したものは２基でそれ以外は単独で存在したことが窺える。
今回はそのうち集石状遺構２・３について報告する。



① 褐黄茶色粘質土層
② 濁灰黄茶色砂混じり粘質土層（⑥の小ブロックを少量含む）
③ 濁灰茶黄色粘質土層
④ 濁茶灰黄色粘質土層（部分的に濁黄色の砂層[φ１mm以下］を含む）
⑤ 淡黄褐色砂混じり粘質土層（φ１mm以下の細砂）
⑥ 黄褐灰色砂質土層（細砂を含むと１cm程度の小礫を含む）
⑦ 淡灰褐色砂礫混じり粘質土層（φ１mm以下，礫２～５cm）
⑧ 淡灰褐色粘質土層
⑨ 濁褐黄色粘質土層（ベース）

第54図　Ｇ４区　集石状遺構２　平・立・断面図（第３面）

集石状遺構２　Ｇ４区のほぼ中央部で検出した。平面形態は隅丸の方形状を呈しており，規模はほぼ一辺が約1.4m，中央部の高さ約0.2mを測る。遺構面は前述したように土層序㉖上層で検出した。盛り上がりは集石断面から５～15cm程度の礫を主として，下部に茶褐色粘質土で構成されていることが解る。また，ほぼ中央部に径約15cm，深さ約30cmの柱穴を確認した。この集石に伴うものと考えられ，今後集石の性格を考えるのに貴重な資料になるものである。

土器と石の比率は土器が94点（13%），石が653点（87%）と圧倒的に石が多いことが解る。土器片には完形に近いものはなく全てが破片で，特に被熱の痕跡のあるものやミニチュア土器などの特殊な土器は確認できなかった。石材については総数653点中，砂岩（57%）が多く，次いで花崗岩（26%），粘板岩（８%）・結晶片岩などが少量認められる。また，石材総数の約８%が被熱を受けていることが確認できた。

集石状遺構３　Ｇ４区中央北部で検出した集石状遺構で，石の堆積状況から上位集石と下位集石にわかれる。土層断面より下位集石が弥生時代中期遺構面に形成され，それが褐茶色砂混り粘質土・黄茶色石質土によって埋没した後，ほぼ同じ場所に上位集石が形成されたものと考える。

上位集石は平面形態がやや南西⟷北東方向に長い歪な楕円形を呈しており，規模は東西長軸約２m，南北短軸約1.3mを測る。土層断面から縁部から緩やかに層が厚くなり，ほぼ中央部で約15cm程度の盛り上がりとなる。盛り上がりは全て石と土器で構成されている。下位集石は平面形態が円形を呈してお

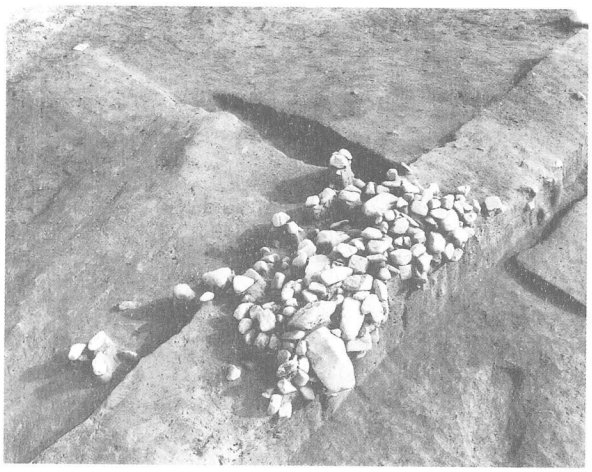


写真42　Ｇ４区　集石状遺構２　検出状況(西から)

写真44　Ｇ４区　集石状遺構３　検出状況(南から)

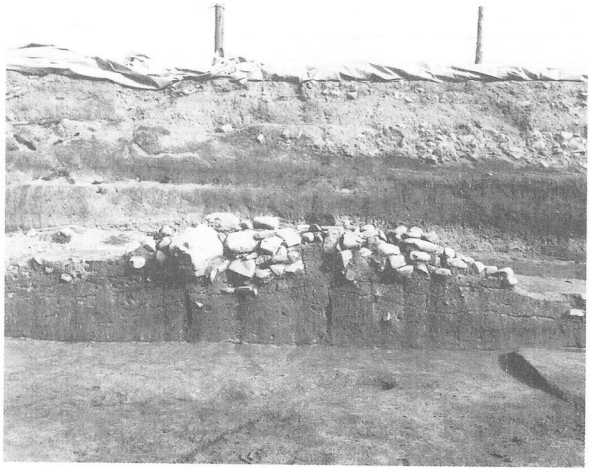
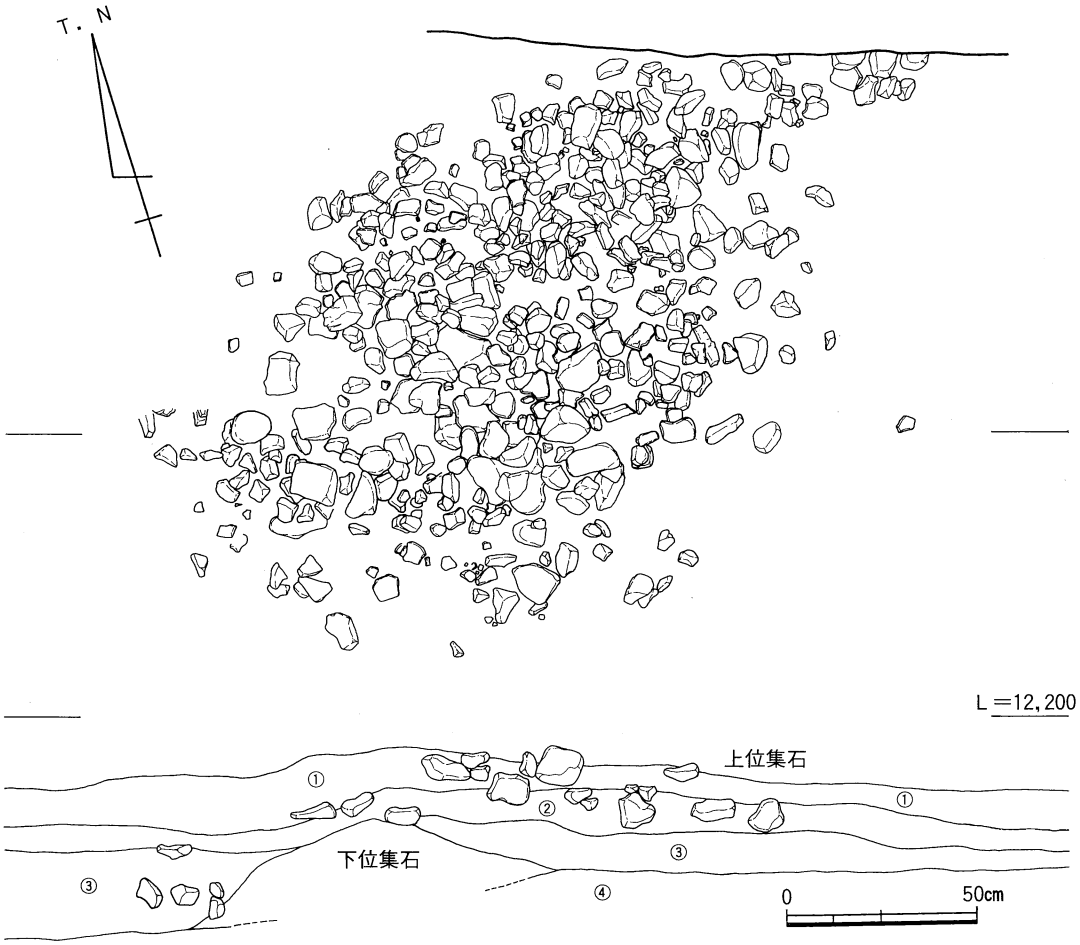


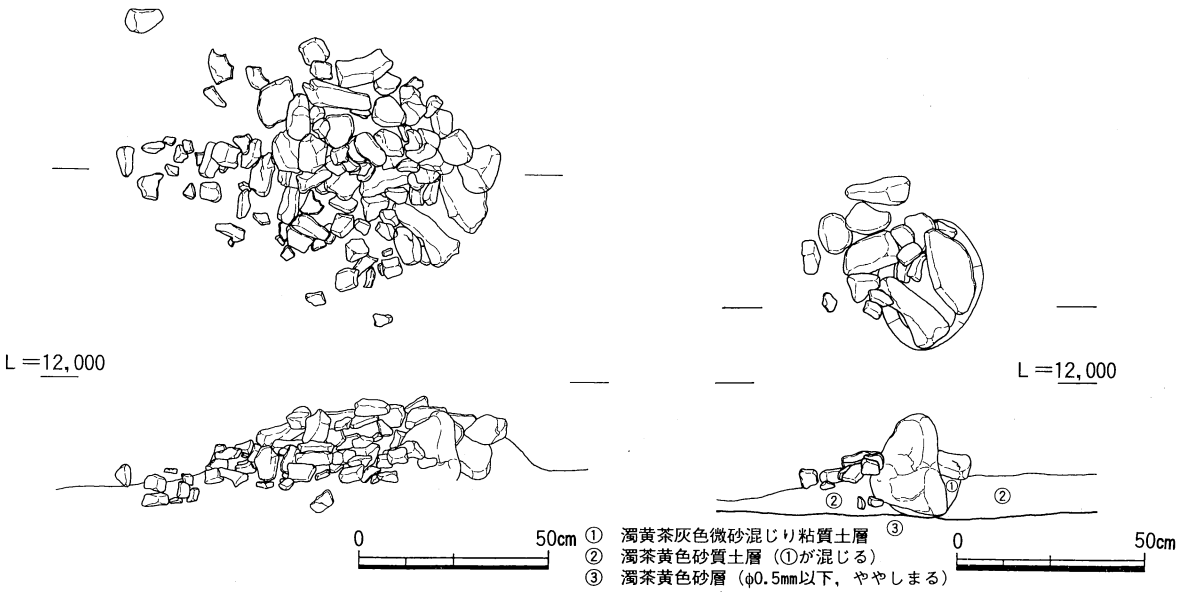
写真43　Ｇ４区　集石状遺構２　土層断面(南から)

写真45　Ｇ４区　下位集石状遺構３　検出状況(南から)



① 淡黄茶色シルト層
② 黄茶色砂質土層（φ1～5mm程度の砂粒を含む）
③ 褐茶色砂混じり粘質土層
④ 茶黄色粘質土層

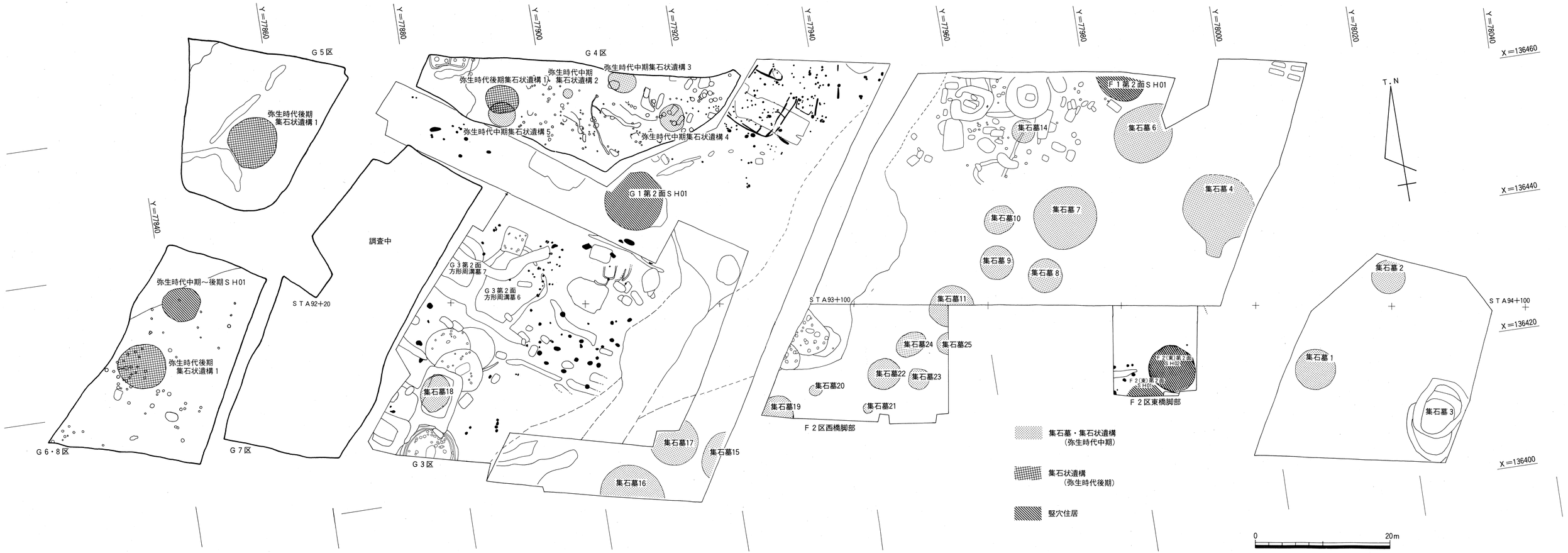
上位集石状遺構平・断面図



① 濁黄茶灰色微砂混じり粘質土層
② 濁茶黄色砂質土層（①が混じる）
③ 濁茶黄色砂層（φ0.5mm以下，ややしまる）

下位集石状遺構立石平・断面図

第55図　G４区　集石状遺構３　平・立・断面図（第３面）



第56図　Ｅ区～Ｇ区　第２面　遺構配置図（１/400）

り，規模は東西約0.7m，南北約0.7mを測る。やや小振りの集石で，ほぼ中央に穴を掘り30cm程度の扁平な石を立てている。

立石は下位集石の中央部ではないものの，立石を中心に他の石が盛り上げられた様に検出でき，集石状遺構２の中央の柱穴と同様に今後集石状遺構の性格を考えるのに重要なものと考える。

土器と石の比率は土器が147点（25%），石が433点（75%）と圧倒的に石が多いことが解る。土器片には完形に近いものはなく全てが破片で，特に被熱の痕跡のあるものやミニチュア土器などの特殊な土器は確認できなかった。石材については総数433点中，砂岩（58%）が多く，次いで花崗岩（22%），粘板岩（11%）・結晶片岩などが少量認められる。また，石材総数の約14%が被熱を受けていることが確認できた。

弥生時代後期（第２遺構面検出遺構）

現在調査継続中のＧ７区を除くＧ４・５・６・８で，遺構を検出している。Ｇ４区では調査区北西隅で掘立柱建物・竪穴住居の壁溝及び集石状遺構１を，Ｇ５区では集石状遺構１・溝状遺構を，Ｇ６・８区では集石状遺構１を検出しているが，それぞれの調査区での遺構密度は希薄で，成重遺跡全体から見ると集落の縁辺部であった可能性が考えられる。

土層的には地表下約1.4m（標高約12.4m）で，黄茶褐色粘質土が調査区全面に堆積しており，やや

写真46　Ｇ５区　集石状遺構１　検出状況(西から)

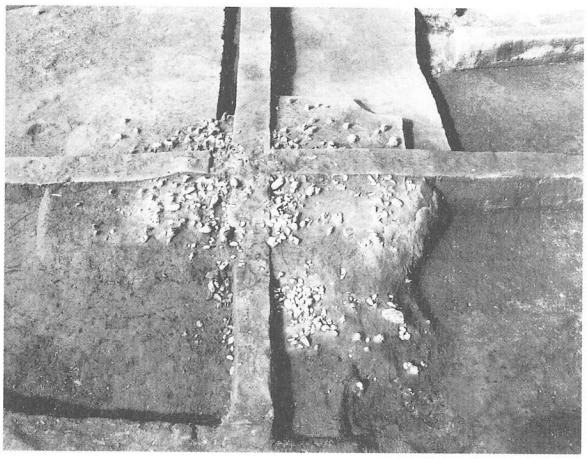


写真48　Ｇ４区　集石状遺構１　検出状況(南から)

写真47　Ｇ５区　集石状遺構１　土層断面(西から)

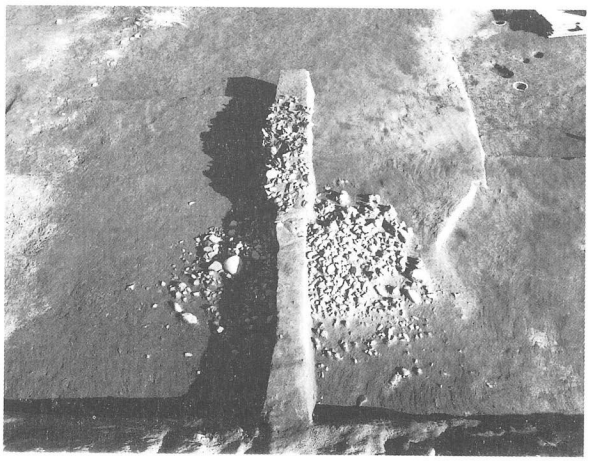
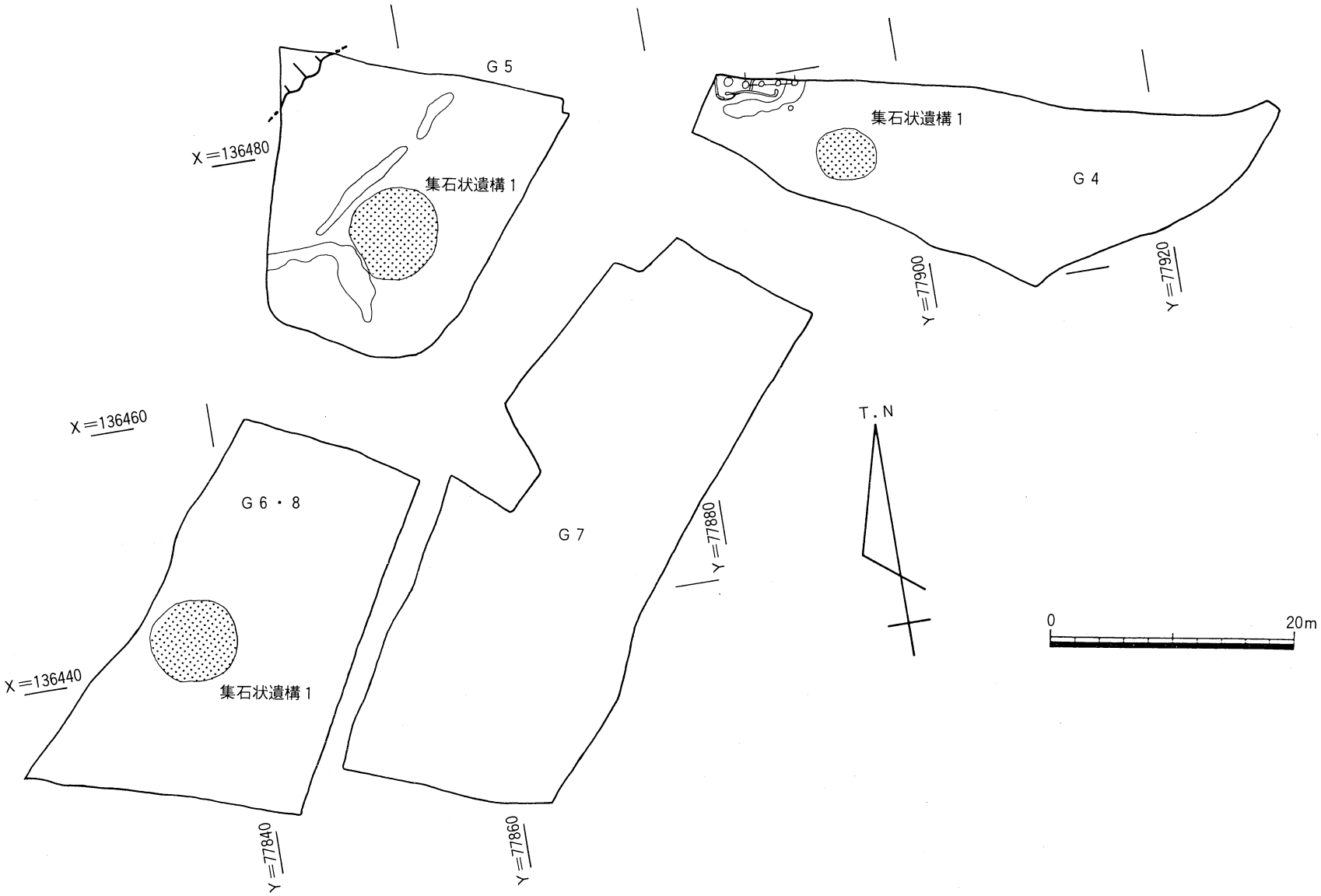


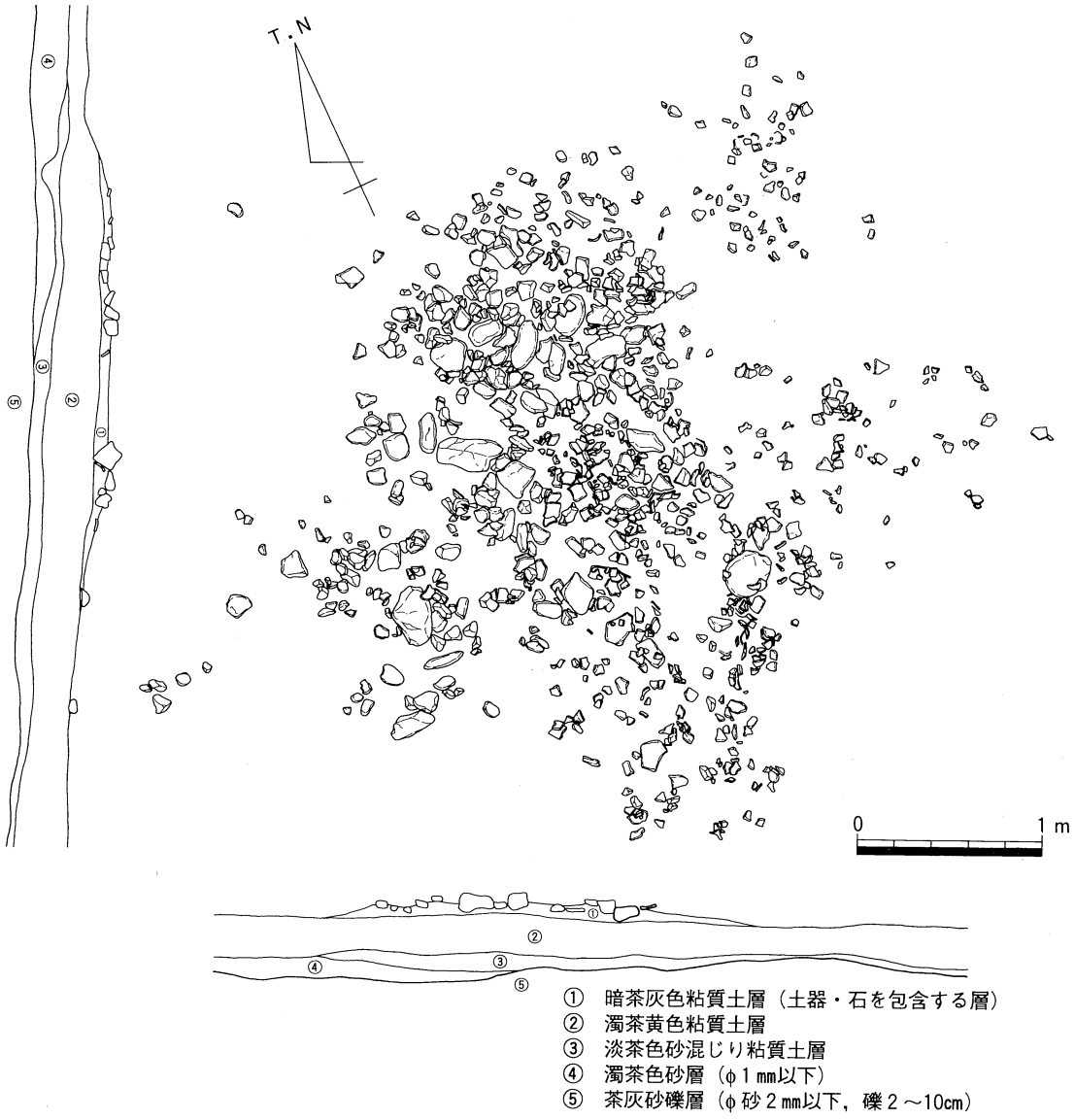
写真49　Ｇ４区　集石状遺構１・５　検出状況(南から)



第57図　G 4～8区　遺構配置図（第 2 面）

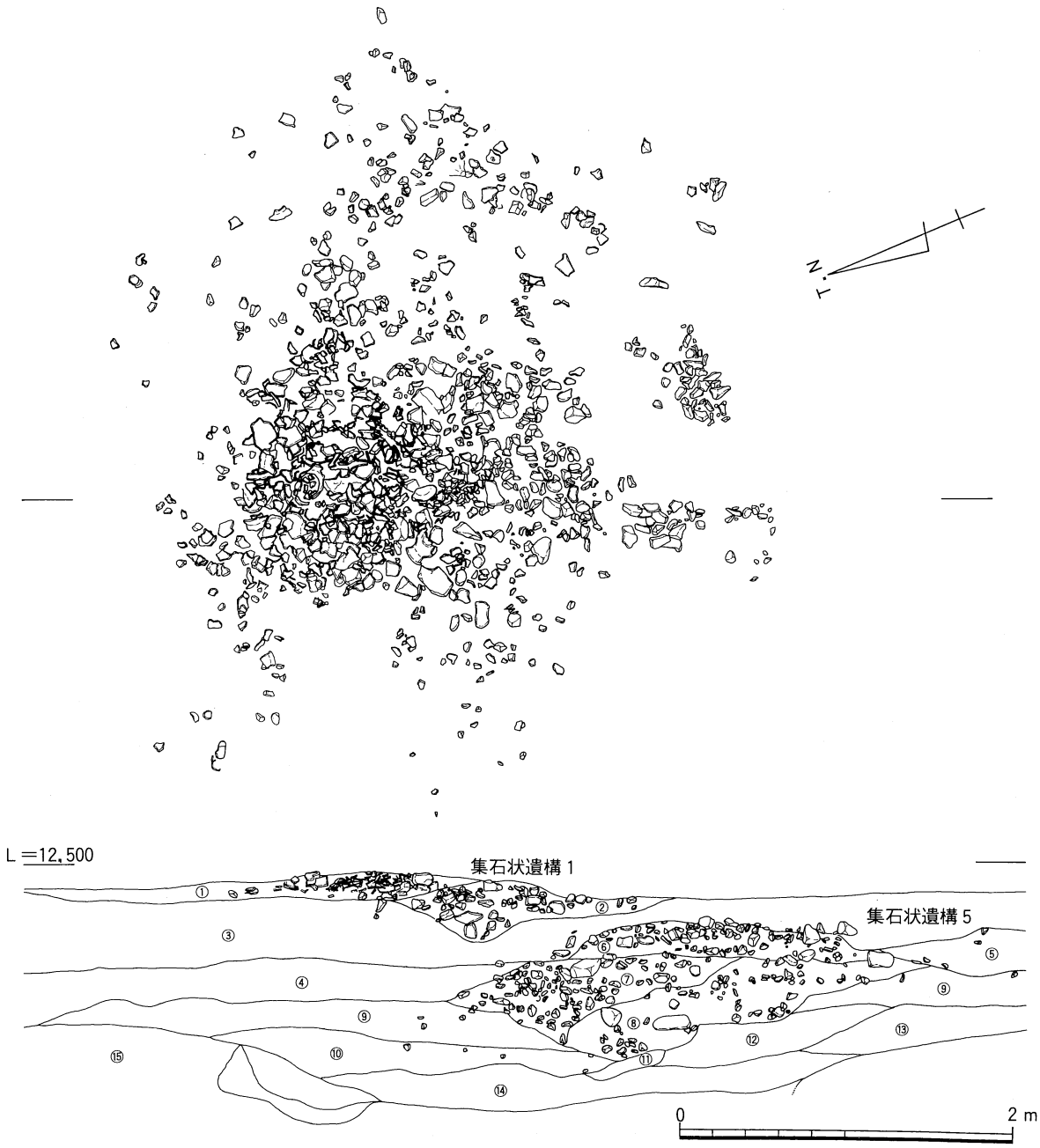
西から東に若干傾斜しているものの安定した面が広がっていることが確認でき，その上面で弥生時代後期の遺構を検出した。

集石状遺構１　Ｇ５区で検出した集石状遺構１は平面形態が石・土器の密度に差はあるもののほぼ円形を呈しており，規模は東西約４ｍ，南北約４ｍを測る。土層断面から縁部から緩やかに層が厚くなり，ほぼ中央部で約10cm程度の盛り上がりとなる。盛り上がりは全て石と土器で構成されており，石と土器の分布には北西部に特に石が集中し，南東部に土器が集中すると入った若干の差が認められる。土器と石の比率は土器が4757点（93%），石が334点（７%）と圧倒的に土器片が多いことが解る。土器片には完形に近いものはなく全てが破片で，特に被熱の痕跡があるものやミニチュア土器などの特殊な土器は確認されなかった。石材については総数334点中，砂岩（82%）が多く，次いで花崗岩（15%），粘板岩（２%）・結晶片岩などが少量認められる。また，石材総数の約23%が被熱を受けていることが確認できた。



第58図　Ｇ５区　集石状遺構１　平・断面図（第２面）

遺物は弥生時代後期中葉を中心とし，若干前葉の土器を含む。



① 暗灰茶色粘質土層
② 暗茶灰色粘質土層
③ 濁黄茶色粘質土層
④ 濁茶黄色砂層土層
⑤ 濁黄色砂質土層
⑥ 淡茶色砂混じり粘質土層（砂φ１～４mm程度少量，茶黄色粘質土のブロックを含む）
⑦ 灰茶色粘質土層（茶黄色粘質土のブロックを少量含む）
⑧ 茶色砂礫混じり粘質土層（砂φ１～４mm程度，礫３～７cm程度）
⑨ 茶褐色砂礫混じり粘質土層（砂φ１～４mm程度，礫２～５cm程度）
⑩ 茶褐色砂混じり粘質土層（砂φ１～７mm程度少量）
⑪ 茶灰色粘質土層（部分的に炭・焼土を含む）
⑫ 灰茶色砂混じり粘質土層（砂φ２～５mm程度少量）
⑬ 黄茶灰色粘質土層
⑭ 灰茶色粘質土層
⑮ 濁茶黄色粘質土層

第59図　Ｇ４区　集石状遺構１　平・断面図（第２面）

第60図　E区～G区　第1面　遺構配置図（1/400）

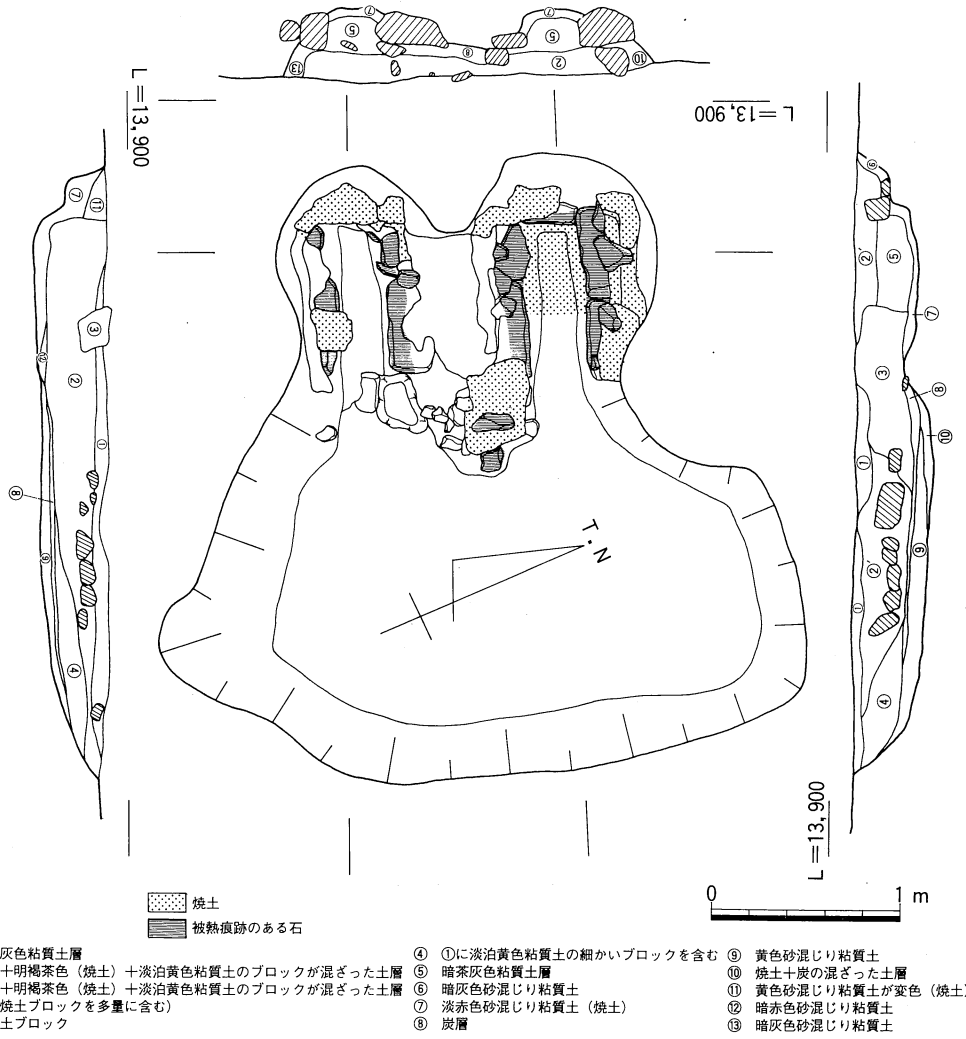
集石状遺構１　Ｇ４区で検出した集石状遺構１は平面形態が歪な円形を呈し，規模は東西約3.5m，南北約４mを測る。土層断面から縁部から緩やかに層が厚くなり，ほぼ中央部で約15cm程度の盛り上がりとなる。特に中央部での土器の密集度は高い。また，土器・石の密集する上部と石だけが落ち込み状に堆積する下部とに細分できるが，明確な平面形態は確認できなかった。土器と石の比率は土器が5053点（74%），石が1735点（26%）と圧倒的に土器片が多いことが解る。土器片には完形に近いものはなく全てが破片で，特に被熱の痕跡があるものやミニチュア土器などの特殊な土器は確認できなかった。石材については総数1735点中，砂岩（62%）が多く，次いで花崗岩（21%），粘板岩（８%）・結晶片岩などが少量認められる。また，石材総数の約16%が比熱を受けていることが確認できた。

この傾向はＧ５区で検出した集石状遺構１とほぼ同じで，弥生時代後期の集石状遺構に共通する在り方と言えよう。

遺物は弥生時代後期中葉を中心とし，若干前葉の土器を含む。

近世（第１遺構面検出遺構）

現在調査継続中のＧ７区を除くＧ４・５・６・８区で近世の遺構を検出している。特にＧ５区で柱穴



第61図　Ｇ５区　砂糖竈　平・断面図（第１面）